その後の
戦国魔神
ゴーショーグン
AM JuJu
文／首藤剛志
絵／グループ・コーヒートウニウ
なにわ♡あい

## その後の戦国魔神ゴーショーグン

**首藤剛志**（しゅどうたけし） 1949年 福岡県生まれ

19歳のとき書いた「大江戸捜査網」でシナリオデビュー。いったんはシナリオから遠ざかるが「世界昔ばなし」で復帰。83年はアニメ以外に、ミュージカルの台本などにも活躍している。

**グループ・コーヒートウニウ（上條修・鶴山修・斎藤格）**

上條氏はTV版「ゴーショーグン」の作画監督。最近は「ミンキーモモ」「幻魔大戦」でも作画を担当。この3人のチームで、葦プロの新作「マッドマシン」の第1話を作画する予定。

**なにわ♡あい** 1958年 東京都生まれ

マンガ家である前に、ひとりの熱狂的アニメファンであるなにわさん。「ゴーショーグン」のほかには「J9シリーズ」が大好き。AM本誌の連載も好評である。

緊急アンコール上映決定！
日本アカデミー賞ノミネート未定！！

——レミー・島田物語——

# ルウェンゾリの恋人

レミー！君はちょっと危険すぎる！

監督・脚本・ちょい役は
"あの"レオナルド・M・ブンドル

セル画　グループ・コーヒートウニウ　イラスト　佐藤ル

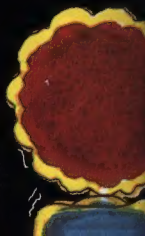
「エーイ、わしゃ、ホステスか！」動物保護官になったレミーだが、彼女をまっていたのは、おろかであさましい人々とのパーティーばかり。
Zzz…

ドソドソ♡

密猟者出現のしらせに、レミーはパーティー会場をとびだす。しかし、
密猟者におそわれ、飢えたライオンにもねらわれる。そのとき……

ごっくん

ゴリラのような大男になぐられ、気を失ったレミー。目ざめると、そこは白一色の世界。「あれ？　裸……」レミーはあわてて胸もとをおさえた。
ZZZ…
びりー

バリバリ

赤道直下の月の山の頂上にレミーをつれ去ったのはカイン。あのブントルの弟である。そして、彼は人間のはく製を作ることを美学としていた。

バリバリ

の月の山から脱出を決行する
ZZ…

ぶ

バリバリ

あまりの寒さに
口の温泉にとびこむレミ
に虚無僧
のフ
ル登場
なぜもっと早くきてくれなかったの
の意外な
どろしス水着…
ZZZ…

バ
カラ

うん♡
おもしろかったネ♡
おっ!! 始まったか!?

# その後の戦国魔神ゴーショーグン

首藤剛志

▶ブンドルの弟カインの設定より

# 目　次

# 序

ケン太が地球の魂とゴーショーグンと共に宇宙へ飛翔してから、一年が経とうとしていた。ゴーショーグンの光を浴びた限られた数のメカニックは、ハートを持ち自立して動き始めたが、それは、あくまで限られた数であり、使う側の人間、使われる側のメカという関係に大きな変革はみられなかった。

人間達も、巨大な陰の組織ドクーガを倒すため、一時は全世界で団結したものの、目的を果たした今、再び、主義・宗教・人種・国家の違いによる利害関係のため分裂し始め、いたる所で権力、武力闘争が起こるようになった。わずか一年も経たぬうちに、結局、変わったのはドクーガという組織が消えた事だけで、以前に比べて地球の世界情勢にさしたる変化があったとは思えぬようになっていた。

そんな人間達に失望したのか、ゴーフラッシャーによって意識を持った限られた数のメカ達は、車輪などの移動能力のあるものは、いつの間にか人間の前から姿を消し、自ら移動できぬものは、人間のための活動を拒否し、錆ついたように動かなくなった。それらのメカに、ドクーガから人類を救ったという功績がある以上、人間達はむげにスクラップにするわけにもいかず、仕方なく、

ドクーガ滅亡、人類の自由のシンボルとして、それぞれの町や村の広場や公園に記念碑として置かれた。

記念碑はあくまで記念碑であり、今を語るものではなかった。

世界中に争いは絶えず、人間はどうしようもなく変わらない動物なのかもしれなかった。

# 第二章

# 赤道直下、月の山からの脱出

大西洋
地中海
アフリカ
カイロ
エジプト
ナイル川
スーダン
ハルツーム
青ナイル
白ナイル
エチオピア
赤道
ウガンダ
ケニア
ソマリア
ルウェンゾリ山
ルワンダ
ケニア山
ナイロビ
ブルンジ
ビクトリア湖
キリマンジャロ山
タンガニーカ湖
タンザニア
ダルエスサラーム
ニアサ湖
マダガスカル
インド洋
ケニア
ザイール
ウガンダ
エルゴン山
ナイル川
モブツ湖
キョーガ湖
ルウェンゾリ山
アミン湖
ケニア山
ナイロビ
カリシンビ山
ビクトリア湖
キブ湖
ルワンダ
メルー山
キリマンジャロ山
ブルンジ
タンガニーカ湖
タンザニア

ルウェンゾリ山地――アフリカ大陸ほぼ中央、ウガンダとザイールの国境付近に広がる山地。
ピラミッドやスフィンクスに代表される古代エジプト文明を生みだした、母なるナイル川の源は古来から謎であった。

言い伝えによれば、アフリカ奥地にそびえる月の山と呼ばれる聖なる山の頂に降る雪が解け、ナイル川が生まれたといわれていた。しかし、古代ギリシャの学者達は「地球で最も暑い国を流れる川が、雪から生まれるなど悪い冗談だ」と言ってあざ笑った。

古代から探険家達は、母なるナイル川の水源を求めてアフリカ奥地にわけ入ったが、誰も、水源を見極めた者はおらず、伝説の月の山は、謎のベールに包まれたままだった。だが、十九世紀になり、ナイル川の源が、ケニア、ウガンダ、タンザニアの国境に広がるビクトリア湖である事が発見され、ビクトリア湖の西方にあるルウェンゾリ山地から湖に水が流れ込んでいる事が確かめられた。ルウェンゾリ山地こそ、伝説の月の山だったのだ。そして、発見者ヘンリー＝モートン・スタンレーはその山の頂に白いものを見た。赤道直下のその山には、確かに雪が降り、氷河すらあったのだ。ルウェンゾリ山地の最高峰、標高五一〇九メートルのマルゲリータ峰は、キリマンジャロ山、ケニア山に次ぐアフリカで三番目に高い山で、ルウェンゾリとは現地の言葉で「雪におおわれた山」という意味だった。

＊

ナイルの水源であるビクトリア湖付近は、ライオン、ゾウ、サイ、シマウマ、カモシカなどの野生動物の天国で、動物保護区となっていた。だが、野生動物を守る保護官達を悩ませていたのは、大規模な密猟団、カインという謎のグループの存在だった。彼らの動きは神出鬼没で、その本拠地は杳として知れなかった。

＊

風のない暑苦しい夜……赤道直下ビクトリア湖の湖面を、アフリカとはまるで場違いなワルツが流れていた。湖畔のホテルの大広間で、世界動物保護団体のパーティが開かれていたのだ。
きらびやかな衣装の紳士淑女がさんざめき、パーティは今、まさにたけなわだった。自然公園の観光バスの中からしか野生動物を見た事のない、イギリスやアメリカや日本の金持ち達が、動物保護団体に寄付した小切手の金額を誇りあう声があちこちで飛びかっていた。
――なんて愚かで、あっさましいパーティ……今も動物達は密猟者に狙われているかもしれないのに……あーあ、やっぱ来るんじゃなかったな――
湖面を見降ろすベランダで、胸の大きく開いた黒いロングドレスの女が一人――、溜息をつくと、手に持ったグラスのブランデーを一気に飲みほした。ブランデーはカミュのバカラ――、確かに彼女の好きな銘柄だが、夜になっても、昼間太陽にさらされた大地のほてりが吹き出してくるようなこの土地では、芳醇なブランデーの香りより、アルコール度の高い、カラッとした安物の蒸留酒

の方が似合っていた。たとえば焼酎のように。

——といって、こんなご大層なパーティじゃ、そんな安酒、置いてないしなあ……——

一年ほど前の、あのドクーガとの戦い以来、彼女の名前は世界中に知れわたっていた。彼女の横顔をマスコミはこぞって報道した。

〃悪の根源、ドクーガと果敢に戦った若き女性ファイター。バスト85、ウエスト56、ヒップ86。愛読書から好きな男性のタイプ、酒の好みから下着の枚数、一回に使うトイレットペーパーの長さ……〃

——いい加減にさらせ！　わしゃミニスカートで足むき出しにして、ニコニコハイハイ、おはようございま～す、のブリッ子歌手じゃないんじゃぞ！　とわめきたくても周囲がほっておかない。行く先々で、カミュのバカラを勧められ、うっかり日本のお茶漬けが好きともらせば、パリの高級料理店マキシムですら、食後にコシヒカリの海苔茶と鮭茶と梅茶が出てくる始末……だいたい、アフリカの奥地の動物保護官になったのだって、リブ・ミー・アローン、人目をさけて放っておいて欲しいからなのに……今日のように、お偉いみなさんよろしく、パーティになると出席しなければならない。動物保護に寄付してくれる人達となれば、断るわけにもいかないし、エーイ、わしゃ、世界一高いっていう、トウキョウ・ギンザのバーのホステスと同じか！　いやじゃ、いやじゃ、いやじゃ、ウン、もう一杯飲もう——

飲んでいれば、気がまぎれる得な性格なのだ。

「レミーさん、おかわりですか」

後ろからブランデーグラスを持った、白いスーツの若い男が声をかけた。

「あ、……どうも」

グラスを受けとったレミーに男は続けた。
「僕への返事、考えていただけましたか」
「あん？」
レミーは相手の顔をしげしげと見た。
「まさか、忘れたわけじゃ……僕のプロポーズを……」
レミーは思い出そうとした。確か男は、アメリカのなんとか財閥の御曹司で……エート……、
「失礼」
レミーは、バッグから手帳を出してめくった。
――これこれ、八十二人目に結婚を申し込んだ人……保護団体への寄付金、年間五百万ドルか――
レミーは笑顔を無理してこしらえて……、
「ミスター・ハワード・アンペア……」
男は眉をピクッと動かし、
「それは、アメリカの成金の道楽息子です。僕は、イギリス王室の血をひく」
「えっ？」
レミーは、慌てて手帳を見直した。
――あ、イタ！　イギリスの大地主の極道息子、八十三人目の人だわ――
レミーは照れ笑いして、
「エッと、ミスター・エドワード・ロビンソン」

「まさか、お忘れだったんじゃあ」
「え、ええ、まさかまさかの冗談ですわ……お忘れだった筈がありませんですわ……」
——寄付金……八百万ドル……あ〜あ、ほんと、ホステスやってんだなあ……わたし——
「で、お返事は……あなたには、埃と泥にまみれたアフリカは似合いません。イングランドの緑の野で、白い馬に乗ってキツネ狩りをするあなたの姿が目に浮かびます」
「ハア、キツネ狩り……（——こやつ、本気で動物保護か？——）あのう、わたし動物が好きなんです」
「動物園ならイギリスにもあります」
——こりゃだめだ……——
レミーは、こんな男を相手にしている自分にハラが立ってきた。
——こんな時には……——
「アラ……」
レミーはフラッとよろけた。そして、手に持ったブランデーを、男の頭からひっかけた。
「！　大丈夫ですか？……」
「ちょっと酔ったみたい……わたし……あの……」
「はっ？」
レミーは、呂律の回らぬ声でいった。
「酔うと本音が出ちゃうんです。わたし、動物が好きなんです」
「分かります」

「愛しているんです。特にライオンなんか……」
「ライオンは、我がイギリスのシンボルです」
「シンボルそのものがいいんです。人間よりもあったかいし、もろに獣で……逞しいもん」
「はあ？」
「あなたも抱いてみると分かりますわ。ライオンってとってもセクシー……」
レミーはとろんとした目で、不気味に色っぽく笑った。
男は、その笑いにどうやら背筋に寒いものを感じたようだった。
と、その時、レミーのペンダントが光った。一瞬のうちに、レミーの顔がひきしまった。レミーはペンダントに語りかけた。
「こちらレミー。いつでもOK！」
ペンダントから声が聞こえた。
「密猟者発見……おそらくカインの一味です。場所は、ジョージ湖の北西三十キロ！」
「了解」
レミーは、男にニッコリ笑いかけると、
「仕事ですわ」
レミーは、黒いロングドレスの胸についたファスナーをサーッと降ろした。ドレスの下に迷彩色のレオタードが現れた。
「おあと、よろしく」
レミーは、脱いだドレスをポンと男に投げると、ベランダから飛びおりた。

「レミーさん!」
ベランダの下には、ジェットバギーが駐車してあった。レミーはバギーのシートに置かれてあったサファリブーツに裸足の足を無造作に突っ込むと、力一杯アクセルをふかした。サイレンの音を残して、一瞬のうちにレミーのバギーは男の視界から消えうせた。そして男が我にかえった時、ベランダに黒いハイヒールがちょこんと二つ並んであった。
男は、のろのろとハイヒールをつまみ上げるとつぶやいた。
「ダメみたい、僕……」

*

レミーのバギーは、夜の草原をけたたましくサイレンを鳴らしながら、時速百キロで風を切り裂くように走っていった。
サイレンは、動物との接触事故を避けるためのものだった。
バギーのまき起こす風が、レミーの頬に叩きつけられ、痛いほどだ。だが、レミーはこの感触が好きだった。なんだか、本当に生きているという感じがするのだ。
レミーは、バギーを自動操縦に替えると、武器の点検を始めた。麻酔銃、そして横弓とライフルを合わせたような弓銃……急所を狙わぬ限り殺傷能力はほとんどない武器だが、レミーには十分だった。特に、ボーガンはスコープを使えば百メートル先にあるリンゴを撃ち抜く自信があった。

*

ジェットバギーは、そろそろ目的地に近づいていた。

レミーは動物よけのサイレンを消すと、バギーの自動操縦を手動に替えスピードを落とした。このあたりは、リスやネズミ類などの小動物も多い。サイレンなしの自動操縦では、中型や大型の動物は回避できても、小動物は無理だ。動物保護官が動物をバギーで轢き殺したのでは話にならない。レミーは、レーダーセンサーで闇の中に動物がいない事を注意深く確かめながら、バギーを進めた。

やがて前方に、焚火と、動物保護官のマークを夜光塗料で描いたジープが見えてきた。銃を持った数人の保護官達が、肩を落として立っていた。

バギーから降りたレミーは、呆然とたちすくんだ。

保護官の一人が無念やるかたないといった口調でレミーに言った。

「遅かった。我々も出来るだけ急いだのですが……」

そこには巨大な象が無惨に撃ち倒されていた。保護官が駆けつけたのが早かったためか、二本の象牙は一本しか抜かれていなかった。

「かわいそうに……」

レミーの触れた象の膚には、まだぬくもりが残っていた。

レミーはバギーに戻ると、レーダーセンサーの金属物質の感度を一杯に上げた。レーダーは二十六キロ前方を進む金属物質を捕えた。おそらく密猟者達のジープだ。

「追跡するわ！　みんなは応援を待ってから、私のあとを追ってちょうだい」

「しかし、お一人では……」

「いつでも一人でやってきたわ、それがわたしのがらなの」

ニッコリ笑うと、レミーはバギーのスイッチを入れた。
次の瞬間、傍らにいた保護官がうめき声をあげて倒れた。「！」保護官の背中に木の杙のような槍がささっていた。続いて別の保護官が一人また一人と倒れていく。一瞬のうちの出来事だった。
残されたのは、バギーの中のレミー一人だけだった。
象の死骸の腹の中から一人、そして草むらの中からパラパラと人影が立ち上がった。密猟者達だ。
「待ち伏せ!?」
レミーはジェットバギーを発進させた。が、五百メートルほど前進した時、バギーは大爆発をおこした。象の腹の中にいた密猟者がロケット弾を命中させたのだ。素早くボーガンを掴んで草むらに身を投げ出したレミーは、唇をかんだ。
「密猟者が攻撃してくるなんて……」
そう、今まで、保護官に追われた密猟者達は逃げる一方だった。だからレミーも、レーダーセンサーでは遠くの金属反応に気をとられ、目前の反応に気付かなかったのだ。もっとも、あれだけ近くに潜んでいては、保護官達の車の金属反応とほとんど見分けがつかなかっただろう。
——でも彼らも、私の生きている事には気付いていない筈だわ——
レミーは、背の高い草をそっとかき分けながら、密猟者達の方へ近づいていった。密猟者達は、象の死骸から残っていた一本の象牙を抜き取る作業に夢中になっているようだった。密猟者達の顔が焚火の明りで判別出来るほど近くまで身をかがめ忍び寄った時、レミーは背後に何かの気配を感じた。ふり向いたレミーは思わず天を仰いだ。「あいた！」そこに、身を伏せたオスライオンがいたのだ。たてがみはすり切れ、かなり年をとったライオンである事が分かった。ライオンは、明ら

かにレミーを狙って攻撃のチャンスを待っているのだ。

——かんべんして……わたし、あなたの味方です……といったところで分かる筈もないもんなあ……——

ライオンは普通、人間を襲わない。他の動物に比べ肉の少ない骨だらけの人間は、ライオンにとって御馳走とはいえないのだ。しかし、年をとって獲物を捕える事が難しくなった老ライオンにとっては、贅沢を言ってはいられない。普通、人食いライオンとか、人食いドラになるのは、こういった類の年とった猛獣である。そしてまさに、その類のライオンがレミーの背後にいるのだ。前には密猟者、後ろにライオン……ライオンが攻撃の姿勢に入った。——しゃあない——レミーは両手を広げ、さっと立ちあがった。急に大きく見えた獲物にライオンは一瞬ひるんだ。レミーは次の瞬間、密猟者達に向かって走り出した。びっくりしたのは密猟者達である。無理もない。髪を振り乱した女が、全力疾走でこちらへ走ってくるのだ。我にかえった密猟者達はレミーに向け銃をかまえたが、レミーの後ろからライオンが走ってくるのに気付き、息を飲んだ。

レミーは密猟者達の中へ飛び込んだ。続いてライオンは、目標にしていた獲物が急に増えた事に動転し、興奮し、暴れまくった。レミーはその隙に素早く、保護官達が残したジープの下に駆け込んだ。

密猟者達の悲鳴と引きちぎられる肉の音、ライオンのうなりが響いた。あたりはすぐに静まりかえった。

「終わった……」

レミーは、ジープの下からそっと惨状をのぞいた。そして思わず声をあげそうになった。

身長二メートル半は超えようという大男が、ライオンの首根っこを脇の下に抱えこんでいたのだ。男はニヤリと笑うとライオンの首をひねった。ライオンの首の骨が折れる音がして、グッタリとなったライオンは大男の足下に崩れ落ちた。
「よくやった、ゴーホム」
ライオンの攻撃から生き残った密猟者の一人が、ゴーホムと呼んだ大男に、小さなチョコレートのような物を渡した。
ゴーホムは、それを口に入れると頬を崩して微笑み、幼児のような片言でつぶやいた。
「オ、イ、チ、イ……」
密猟者は、ライオンの死骸をのぞき込み、吐き捨てるように言った。
「こんな年よりライオンの毛皮じゃ、売り物にならんな。女は逃げちまったようだし、味方はやられるし、とんだ狩りだったぜ」
密猟者は、ゴーホムに味方の死骸と象牙を保護官達のジープに乗せさせると、ジープを発進させた。
もちろん、そのジープのトランクにレミーは忍び込んでいた。レミーは、仲間の保護官達と、結果的にレミーを救ったライオンを、むざむざ殺されて黙っている女ではなかった。
――それと象牙のために殺された象の分も――
ジープのトランクの中で、レミーはボーガンを握りしめた。

＊

ジープはまる半日走り続けて、止まった。レミーの腕時計についている高度計は、海抜三五〇〇メートルを指していた。レミーが、やはり時計に付属している距離計や温度計で、そこがルウェンゾリ山地のどこかである事を割り出すまで、そう長い時間はかからなかった。レミーは、密猟者達が象牙と仲間の死骸を運び出し、あたりが静かになったのを見計らってから、ジープのトランクから抜け出した。まわりの光景は、動物保護の草原地帯とは一変していた。そこは暗い密林の中……。しかも地面といわず木々といわず、苔がびっしりと覆い、木々の梢からは得体のしれぬ植物がボロきれのように垂れ下がり、古い幽霊屋敷のカーテンを思わせた。

昼のはずなのに、光はまるでさし込まず、まるで霧吹きで吹きかけられたような肌寒い湿気が充満していた。レミーは耳をすまして気配をうかがった。動物の鳴き声は聞こえなかった。動物も住めないような土地……それはそうだろう。こんなにジメジメして寒い所に住めるのは人間、それもたちの悪い人間くらいのものだ。レミーはここが密猟者の隠れ家として最適な事を納得した。

その時、密林の向こうからモーターのうなり声のようなものが聞こえた。レミーは音の方へ忍び寄った。突然、目の前の密林が開け、そこに、舗装された広場があり、十数台のトラックやジープから五十人を超える作業員が密猟した動物達を運んで、忙しそうに動きまわっていた。何より変わっていたのは、広場のはずれに巨大なロープウェイの設備がある事だった。ロープウェイの行き先は、すぐに霧と雨雲に閉ざされ確かではなかったが、これだけの施設を持つ以上、相当大規模な密猟グループ、いや密猟組織と言ってもよかった。

――甘く見たかなあ……一人じゃ手に負えないわ――

レミーがそう思った時、背後の繁みがガサッと動いた。機敏に身構え、振り向いたレミーの前に、

巨大な生き物の影がそびえていた。
——!　ゴリラ?……いや、違う。これは、先刻(さっき)の大男!……——
そう思う間もなく、大男の張り手がレミーの頬に飛び、レミーの体は確実に五メートルは宙を飛んだ。
宙を飛びながら、レミーは自分の顎(あご)がはずれたのを感じたが、体が苔むした地面に落ちた時には、すでに気を失い、意識がなかった。

*

何時間、気を失っていたのだろう、目を醒ましたレミーは、あたりの様子がまるで違う事に目を見張った。全てが白く輝いていた。壁も天井も、寝かされている豪華なベッドも、そして天井には、透明なガラス細工で作られたシャンデリアが輝いていた。床はどうやら大理石で作られているらしかった。部屋の四隅に飾られたギリシャ時代の彫刻も純白だった。白くないのは、裸で寝かされている、陽焼けしたレミーの肌と金髪ぐらいのものだった。
——あれ?　裸……——
レミーは裸の自分に気付き、慌(あわ)ててシーツで胸元をおさえた。そして、少し落ち着いて周囲を観察することにした。
——そうだ。私の顎、確かはずれたんじゃなかったっけ——
恐る恐る顎に手をやったが、顎は元通りになっていた。両耳の下の鈍いしびれが、一度は顎がはずれた事を物語っていた。

——ま、生きてりゃめでたい……でもこの部屋、ここまで白ずくめだと悪趣味よね……ん？——

レミーは、白ずくめの部屋にかなり大きめのガラス窓がある事に気付いた。窓の外は乳白色の空が広がっていた。そして、その空にはチラチラと雪が降っていた。

——雪!?……ここはどこなの？　アフリカじゃないの!?——

その時、部屋のどこからか男の声がした。

「お目醒めかね、ミス・レミー・島田……」

レミーは落ち着いて答えた。こういう時は無理しても落ち着く習性がついていた。

「おはよう」

レミーは大袈裟に顎を動かしてみせた。

「顎は元通りみたい。ちゃんと声が出るものね」

「乱暴をして済まなかった……あいつは手加減を知らん奴でね」

「それは、お互い様……ところで、あなたのお名前を聞く前に、ここは一体どこなの？　アフリカじゃないみたい」

「アフリカだ……」

「うそでしょ。あの雪はつくりもの？」

「うそではない。正真正銘、それも赤道直下のアフリカだ。ただし、標高は五〇〇〇メートル以上あるがね」

「フーン、それが、本当なら……ねえ、クイズにお答えしますわ。ここの場所を私が当てたら、何か着るものをいただけます？」

「いいだろう」
「ルウェンゾリ山地、通称月の山、たぶんその最高峰、マルゲリータのてっぺん」
「さすがだね」
壁にしつらえられた戸棚が開き、そこに数十着を超すドレスが吊るされてあった。
「好きなものを着たまえ、下着がいり用なら……」
戸棚の下の引き出しが自動的に手前に動いた。
レミーは呆れて、思わず溜息をついて言った。
「ごていねいに下着まで、……さっそく試着したいんですけれど、カメラを切って下さいません」
「カメラ？……」
「あなた、どこからかカメラで見ているんでしょ、私を……」
「恥ずかしがる事はない。あなたの体は、気を失っている時にとくと拝見した」
「でしょうね……でも、気を失って知らないうちはともかく、知っててのぞかれるのは好きじゃないわ。悪趣味よ、ブンドルさん」
レミーはずばりと言ってみた。
「ブンドル？」
「とぼけない、とぼけない。こんな事する物好きはあなたしかいないわ」
「ブンドルとは、どのブンドルかね」
「しまいにゃ、怒るわよ。レオナルドメチィチのブンドル兄ィ」
「わたしは、あの男ほど悪趣味ではない」

「えっ？」
「あんな男と一緒にしないでほしい……その証拠に、この部屋のカメラを切ろう……」
レミーはとまどいながらも、
「サンクス、フレンズ」
「着替えを楽しみたまえ」
男の声が消え、部屋に音楽が流れた。随分古い昔に流行した映画音楽だった。
――ラブ・ストーリー（ある愛の詩）か、確かにブンドルの趣味じゃなさそう……私の趣味でもないけれど――
レミーはベッドから起きると戸棚のドレスを物色し始めた。そこはそれ、レミーもまだまだ若い女である。あれやこれやと試着し、鏡相手に一人だけのファッションショー……、気に入ったドレスを見つけるまでに、たっぷり三時間はかかった。

＊

で、どんな服を選んだかと言えば、結局、真っ赤で毛足の長いとっくりのフィッシャーマンセーターと黒い革製のジーンズとブーツ……あまりセンスはよくないが、脱出を考えれば身軽な方がいい……いつもはノーブラだが、今日はフロントホックのブラジャーをつけ、そのパットの部分に小さくたたんだストッキングを忍び込ませた。ストッキングは、割と使い道があるのだ。ジーンズの下には、ガーター止めの古風なストッキングをはいておく。そして細目のベルト、バックルは金属製を選んだ。

部屋のどこからか男の声が聞こえた。
「衣装が決まったようだね……あまりドレッシーとはいえないようだが……」
「中身で勝負するわ」
「そう願いたいものだね。どうも、その服は逃亡用の身軽な格好としか思えない」
「分かる？」
「それに、そこにあるドレスはどれも、いまひとつあなたには似合わないようだ」
「はあ、やっぱり見てたわけ。暗い性格ね」
「あなたには、やはり一番似合う格好をしてもらおう」
別の戸棚が自動的に開いた。
レミーは戸棚の中をのぞいて眉をひそめた。黒いビキニの水着が入っていた。
「これを着ろというの？」
「あなたに一番似合ってるし、この雪山から、裸では逃げられまい」
「断ったら……？」
部屋の扉が開いて、ゴーホムと呼ばれていた例の男が、タキシードを着て入ってきた。
レミーは、仕方ないといった顔でうなずいた。
「額をはずされるのはもうたくさん」
レミーは、いさぎよくセーターとジーンズを脱ぎビキニに着替えた。ただ、ブラジャーのパットに潜ませたストッキングは、しっかりビキニのブラジャーに移しかえた。その素早い動きに、ゴーホムも、カメラで見つめていたこの屋敷の主も気づく事はなかった。

「それにしても、雪山のてっぺんで水着なんて……」レミーのつぶやきに、声は答えた。
「ここでは、べつに不似合いではない」

＊

ゴーホムに連れられて部屋の外に出た、水着にバスローブといった出立ちのレミーは、目を見張った。
確かに男の声の言うとおり、水着姿のレミーは不似合いではなかった。部屋の外にあるガラス張りのオートロードを往き来する男女は、ほとんどが水着姿だった。それも、アメリカの安手のペーパーコミックのヒロイックファンタジーに登場するような、シェイプアップというか、ボディビルドされたというか、まさに肉体といった感じの男女達だ。
レミーは溜息をついた。
「病気じゃ……」
ガラス張りのオートロードから、屋敷の様子が見渡せた。それはガラスと白い大理石で作られたギリシャの宮殿のようだ。この屋敷の持ち主は、アフリカの月の山の頂上に、オリンポスの丘もどきの神々の神殿を作ったつもりになっているのかもしれなかった。
ガラスの回廊に囲まれた中庭には、湯気にかすむ温水プールがあった。
――そう言えば、月の山は火山だった――
湯気の中に、水着の男女の戯れる姿が蠢いていた。そして、中庭のプールから屋敷の外のゲレンデへ雪のスロープが続いていていて、水着を着たまま……いや、お好みとあれば、裸のままでもスキー

が楽しめるように出来ていた。男女達は、プールで体を温めるとスキーをはいて、しかも気圧の差を調整するため、ご丁寧に小型の酸素マスクをつけて、ゲレンデに飛び出し、ほてった体を冷ましては、また温水プールに飛び込む……いわばサウナ風健康入浴法を楽しんでいるのだ。
——月の山ヘルスセンター……でなければ、大人向け温泉遊園地……、ほとんど悪趣味ね……。
この屋敷の持ち主は、ろくな男じゃないわ——レミーは、そう心に決めつけた。

やがて、大男ゴーホムとレミーは、中世ロココ調の扉の前にやってきた。その扉まで、ご丁寧に白く塗られている。
ゴーホムは扉をノックした。
男の声が聞こえた。
「入りたまえ。ただし、ミス・レミー・島田だけに願おう」
ゴーホムは扉を開くと、レミーにうやうやしく頭を下げた。
「サンクス」
レミーは、部屋の中に入っていった。中は暗闇で何も見えない。ゴーホムは、まだ開いた扉の横につっ立っていた。
男の声が響いた。
「すまんが、扉の傍のサイドボードの上に、銀の食器がある」
スポットライトが、サイドボードを照らし出した。
「その中にチョコレートが入っているから、それをゴーホムにやってくれ。一つだけでいい」

レミーは食器のフタを取り、小さなチョコレートの包みをつまみあげ、ゴーホムの右手にのせた。
ゴーホムの顔に子供っぽい微笑がこぼれた。
「その男はチョコレートに目がない。ただし、ベルギーのゴディバ製のものに限るがね」
「フーン。じゃ、おまけ」
レミーはニッコリ笑うと、もう一つチョコレートをゴーホムの左手においた。
ゴーホムはこれ以上の幸福はないといった表情を作った。
「オ、イ、チ、イ……」
ゴーホムはペコッと頭を下げると扉を閉め、出ていった。
サイドボードを照らしていたスポットライトが消え、部屋の中はまた暗闇に戻った。
突然、猛獣のうなり声がして、数メートル先の暗闇に豹の姿が浮かび上がった。
レミーに飛びかかろうとしている。
そして、豹の横に巨大なアフリカ象が鼻をふり上げて……レミー目がけて突進する白サイが……。
が、今にも動き出しそうな動物達は、一歩も動こうとしなかった。それは、生きている状態と寸分変わらない、剝製にされた動物達だった。
レミーはうんざりしたように、かぶりを振って言った。
「ディズニーランドの冒険の国はもういいわ。あなた、姿を見せてちょうだい……」
部屋に明りが入った。窓にはシェルターが閉じてあって薄暗いが、かなりの広さだった。中央に円型の巨大なテーブルがあり、片端におそらく白熊の毛皮で作ったのであろうソファーセット。壁には昔の銃器、その横に酒の並んだバーセット。いたる所に動物達の剝製が置かれてあった。その

どれもこれもが、躍動感あふれるその動物のベスト状態で剝製にされていた。蒐集家から見れば、溜息の出そうなコレクションだったが、レミーは、煮えくり返るような怒りしか感じなかった。剝製が素晴らしいという事は、その動物の殺された瞬間が、その動物にとって、最高に美しい生の時間だった事を物語っている。生き物にとって最良の時を楽しんでいる時に、この動物達は殺されたのだ。

レミーは語気強く言った。

「暗いわ。窓を開けて！　窓の外は昼の筈でしょ。こんな墓場より、生きている陽の光を楽しみたいの」

閉ざされていた窓のシェルターが開いた。シェルターのとれたその広間は、まるで展望台だった。先ほどまでの雪は降りやみ、赤道直下の太陽が、純白の雪の上で踊っている。

そして、おそらく気を失ったレミーを運んで来たロープウェイが、今もゆっくりと空中を月の山の頂上の屋敷を目指して登って来るのが見えた。

レミーの頭の中を様々な脱出のアイデアが駆け回った。レミーは窓ガラスに触れ、強化ガラスで出来ているのを確かめた。打ち破る事は不可能……それに、警備の厳重なロープウェイに乗って逃げる事も無理だった。よしんば上手くロープウェイに忍び込んでも、動力源を止められてしまえば、宙に浮く箱の中で袋のねずみだ。

何か方法がある筈だ……。

レミーは、広間の片方の一面が、ステンドグラスで構成されているのに気付いた。

「これは……確か……」

「見憶えがあるのかね」

レミーは美術鑑賞が趣味だった。事実、スパイ時代、その趣味を生かして、美術評論家になりすまして、ニセ絵画ルートを探った事もあった。フランスの美術を語る者で、このステンドグラスを知らない者はもぐりといえる。世界でもっとも美しいといわれるブルーのステンドグラス……シャルトルブルー……パリの郊外にあるシャルトルという町の教会にある筈のステンドグラスが、今、ここにあった。

「まさか……よくできたイミテーションよね」

「いや、今、シャルトルにある方がイミテーションだ。わたしは、このステンドグラスにはフランスよりアフリカの太陽が似合うと思ってね……摩り替えたのだ。それは本物のシャルトルブルーさ」

「お言葉ですけれど、人の国の文化財をどう思っていらっしゃるの」

「美しいものは人のものではない。わたしのものだ」

その声は、今までのマイク越しのものではなかった。振り返るレミーの前に、濃紺のタキシードを着た金髪の男が立っていた。その顔は見憶えのある男にあまりに似ていた。

「ブンドル……？　いえ、違うわ。彼じゃない」

「そう、私は、あなたの知っているブンドルではないと、先刻言った筈だ。あの男の美学はカスだ。わたしこそ、メディチ・ブンドル家の正統な美学の継承者なのだ」

「正統だろうとなかろうと、ともかくあなたが密猟団の親分ってわけ」

「品の無い表現は止めてもらおう……わたしは美の求道者だ……みるがいい、動物の剝製達を。美

しく光り輝いている……」
「でも、生きてはいないわ」
「見苦しく生きても意味はない。生命が美しいのは、その若い力の漲る最も盛りの時、一瞬しかない。その一瞬が終われば、あとは衰えていくばかりだ。だからこそ、私は様々な生物の最も美しい瞬間を、最高の技術を使って永遠に残そうとしているのだ」
「永遠に残っても、それはただの死体でしょ」
「永久に美しく生き続ける死だ……その美しさをあの男は分かっていない。レオナルド……メディチ・ブンドル家の面汚しだ」
「あの男と、どーいう御関係？……」レミーが聞いた。
「レオナルドは私の兄にあたる……もっとも私は兄と認めはしないがね。わたしの名はカイン・メディチ・ブンドル」
カインは冷たい微笑を浮かべ、レミーを見つめた。
――エライのが現れてくれたわ――
レミーは唇を噛みしめた。

*

カインがレミーのために用意し、洗練したマナーの給仕達が運んでくる昼食は、豪華なものだった。特に、海ガメのスープと、デザートの月の山の氷をベースに作ったコブラの血のシャーベットは、カインの自慢の料理だったが、脱出方法を考え続けているレミーには、じっくり味わう余裕は

なかった。
カインは、さかんに自分の美学が、兄のブンドルのそれよりどれほど勝れているかを語り続けたが、レミーには、兄の病気より自分の病気の方が重いのだという事を自慢しているとしか思えなかった。
特にカインは、生き物の剝製に対する美学を、兄のブンドルがまるで認めない事をののしり続けた。
兄弟は永遠のライバルである……誰かが言ったそんな言葉をレミーはふと思い出した。
その兄弟の過去に一体何があったのだろう。……ま、何があったにしろ、あまり係わりたくない問題だった。
カインは熱っぽく言った。
「私は、私の美学を兄に認めさせる機会を待っていた」
その言葉を聞いた時、初めてレミーの背筋を冷たい恐怖が走った。レミーはカインをまじまじと見つめた。
「あなたを見ていると、あなたのお兄さんが人並みに思えてくるわ」
カインは、フッと笑ってそれには答えず、手元の鈴を鳴らした。
ゴーホムが、レミーの持っていたボーガンを持ってきた。
カインはボーガンを受けとると、ゴーホムに部屋の外に出るように命じた。そしてボーガンでレミーを狙うように構えた。
「いまどき珍しい武器だ」

「近ごろの武器は、殺傷能力が強すぎるわ。それなら、急所を狙わない限り死ぬ事はないもの」
「殺しが嫌いかね」
「メカに殺しをさせたくないの」
「気にする事はない。ゴーショーグンとドクーガの戦いで、意志を持ったメカの数は、全体から見ればほんのわずかだ」
「でも、いやなの」
　プシュン！　カインは矢を発射した。
　矢はレミーをかすめ、壁に突きささった。レミーは眉ひとつ動かさなかった。
「気の強い人だ。美しい、豹のように……」
「豹には爪があるわよ」
「強がりかね」
「まあね」
「だが、この武器はよくない。せっかくの毛皮に穴が開く……これを見たまえ」
　カインは、机のボタンを押した。
　床の下から彫刻がせり上がってきた。それは、良く知られた腕のないギリシャ美女の像だった。
　だが、レミーは、その像が大理石で作られていないのにすぐ気づいた。
「これこそ、本当のミロのビーナスだよ。まさに生きている。この女を捜すのに手間がかかった」
　それは人間の剝製だった。
　レミーの恐怖は現実になりつつあった。

レミーはつぶやいた。
「江戸川乱歩の読みすぎね」
「よく、あの日本の作家を知っていたね」
「ランボーの詩集を買いにいって、間違って買っちゃったの」
「面白かったかね」
「面白がってる時じゃなさそう……私を何のモデルにするつもり？」
「これなんかいかがかな」
　壁のビジョンに飛翔するサモトラケのニケの彫刻が写った。羽根をつけた女神が、今まさに飛びたたんとしている姿。ギリシャ彫刻の傑作だった。ただし、その像は首がない事でも有名だった。
「わたしの顔がお嫌い？」
「あなたの顔に似た彫刻が見つからなかった……もっとも、兄には分かるだろう。首が無くても、その彫刻が誰で出来ているかはね……弟から兄へのささやかな美学のプレゼントにするつもりだ」
　レミーの顔には、もはや恐怖を通り超したバカバカしさに呆れ果て、微笑さえもれていた。
　レミーはカインに言った。
「食後のお酒をいただけるかしら」
「いいとも」
　カインは、部屋の隅のバーセットのカウンターに入った。
「カミュのエキストラかね」
「ブランデーは飽きたわ……それにちょっと酔いたい気分……」

「好きなものを選びたまえ」
　レミーはバーセットの前に行くと、ラムとウォツカの棚を見た。そしてアルコール度が七十度以上ある酒を探した。十三本あった。レミーは、その位置をしっかり頭に刻みつけるとそのうちのプエルトリコ産のラム酒、ロンリコ百五十一プルーフとグラスを二つとり、白熊のソファーに座った。
「二人でお酒を……」
　レミーは二つのグラスにラムを注いだ。
「色仕掛けかね」
「ドゥ・マイ・ベスト。やるだけやらなきゃ。だって生きていたいもん」
「面白い」
　カインはレミーの横に座った。
　レミーは、カインにしなだれかかるようにして言った。
「このお酒は二人で一気に飲むのがしきたりなの」
「いいとも」
　二人は、グイッとグラスをあけた。
　喉もとを七十五・五度のアルコールが通り過ぎた。二人はふーっと熱い息を吐いた。
「煙草、吸いたい……」
「これでよければ……」
　カインはメンソール入りのダンヒルを出した。
「ハッカ入り大好き……」レミーは煙草を口にくわえた。

カインはカルチェの銀ライターを出して、火をつけるとテーブルに置いた。
レミーは煙をカインに吹きかけると、
「火がつきそう、もう一杯いい？」
「もちろん」
二人は二杯目を飲みほした。
二人は、ニヤリと笑い合った。
「さらに一杯」
「どうぞ」
三杯目を飲みほすと、さすがに二人の目の下が赤くなった。
レミーは四杯目をついだ。
カインは、レミーの耳もとにささやいた。
「体を壊す前に言っておくが、あなたの酒量は、調べによると確かブランデー三本。私は五本いけるよ……」
レミーはクスクスッと笑った。
「あなたを酔い潰すのは無理ってことよね」
「残念ながら、酔い潰れるのはあなたさ」
二人は見つめ合って、またクスクスと笑いあった。
「でもさ……お酒の使い道って酔うだけじゃないもん」
レミーはいきなりラムのボトルをカインの頭に叩きつけた。素早くテーブルの上のライターを取

って、ソファーから離れると、年代ものの銃のかけてある壁から、ウィンチェスター銃を取ってカインに向けた。
カインはよろよろと立ちながら言った。
「弾が入っていると思っているのかね」
「銃の使い方は知っているわ」
レミーは銃身を持って、台尻をカインの顎にヒットさせた。カインは後ろにふっ飛び、ソファーに叩きつけられ気を失った。
レミーはバーセットに飛び込むと、アルコール度の高い酒を次々にカウンターに並べた。ブラジャーのパットに隠したストッキングで、五本のボトルを結ぶと肩にかけ、残りのボトルを広間中にぶちまけ、ライターの火をつけた。たちまち広間に炎が広がった。レミーは椅子を振りあげるとシャルトルのステンドグラスの前に立った。強化ガラスは無理でも、中世のステンドグラスなら割る事もできる。せっかくの文化財を……しかし、背に腹は替えられない。
レミーは椅子をステンドグラスに叩きつけた。ステンドグラスは、気圧の差で外へ飛び散った。レミーは、床に落ちていたボーガンを拾うと肩にかけ、気圧の差でおこる広間の嵐に逆らって扉の後ろに隠れた。
すでに広間の異変に気づいたゴーホムと密猟者が飛び込んで来た。ゴーホムは、倒れているカインが頭からかけられたラム酒に、床を這う炎が今まさに襲いかからんとしているのを見て、慌てて身をカインの上に投げだし、炎からカインを救った。
駆け込んで来た密猟者達は、割れたステンドグラスの窓に殺到した。だがレミーは、窓からでは

なく、開けっぱなしにされた扉から堂々と、しかし足早に通路に出た。目指すは中庭のプールだ。慌てた様子を見せない限り、すれ違う水着の男女の中で目立つ事はなかった。
ゴーホムの重みで目を醒ましたカインは、血走った目をしてわめいた。
「あの女を殺せ！　殺せ、八つ裂きにしても構わん！」
あのブンドルの弟とは思えぬ品のなさだ。
武装した密猟者達はレミーを追って、次々と屋敷の外へ出ていった。

だが、レミーはまだ外には出ていなかった。中庭の温水プールに体を浮かべ、体を温めていた。ついでに肩にかけた五本の酒も……温めれば温めるほど、燃焼力が強くなる筈だ。周りでは、若い男女が嬌声をあげ戯れている。
どの男女も、見つめるのが恥ずかしいほどギリシャ彫刻風の肉体美だが、おそらくカインの剝製美学用の材料なのだ。助けたいとは思うが、今は自分の身ひとつで精一杯だった。
レミーは、じっと水の中から外のゲレンデに続く雪のスロープの出入口を観察していた。温水プールで体をほてらした男女は、出入口で小型酸素ボンベを貰っている。ということは、ボンベに供給する大型の酸素タンクもある筈だ。そして、出入口に置かれているスキー靴に無造作に足を突っ込んで、たてかけてあるスキーを履くとゲレンデへ滑っていく。
ということは、どんな足にでも合うオールフィット仕上げのスキー靴である事も物語っている。レミーの足にも合う筈だ。
――ＯＫ、当たって砕けろだわ――

レミーは温水プールから上がると、バスローブでボトルとボーガンを隠しながら、スロープへの出入口へゆっくりと歩き始めた。
その時、屋敷から中庭への通路に密猟者達が現れ、水着の男女を振り向かしては顔を確認し始めた。
――急がなければ……しかし、目立たぬように――
何食わぬ顔で出入口の窓口に来たレミーは、係員ににっこり笑いかけた。
無愛想な係員は何も言わず、小型ボンベを渡してくれた。チラリと窓口の中を窺うと、確かに大型の酸素タンクが置かれてある。
その時、レミーの肩を誰かが軽く叩いた。
レミーは窓口のガラスに写る背後の男の姿を見た次の瞬間、振り向きざまに酒のボトルを後ろの男に叩きつけ、ライターで火をつけた。
後ろの男はゴーホムだった。ゴーホムは、キョトンとレミーを見下ろしていたが、やがて胸にひろがる炎に気付き、悲鳴をあげプールに飛び込んだ。
レミーは、残りのボトルを窓口に叩き込みバスローブに火をつけ、投げ込んだ。スキー靴に足を突っ込み、スキーを履き、小型ボンベを口にくわえて一気にゲレンデに滑り下りた。この間二十秒とかからなかった。
ゲレンデに躍り出たレミーは、前方を滑っている水着の女から、ストックをもぎとり力一杯加速した。背後で大爆発音が起こった。おそらく酸素タンクに引火したのだ。
レミーは、緩やかなゲレンデから未整備の山腹へ出て、スキーを止めた。裸の肌が、寒気でチリ

チリと痛む。

見下ろす山腹は相当な急斜面だ。

強風で雪が吹き飛ばされ、いたる所に岩場がさらけ出されている。ここを降りていけるか？……。

山頂を振り向いたレミーの目に、追手のスキーヤー達の姿が見えた。やるしかない。

レミーは、直滑降で急斜面に飛び出した。レミーの姿はたちまち点のように小さくなった。追手達はゲレンデのはずれで、スキーを止めた。あまりの急斜面に怖れをなしたのだ。

顔を見合わす一同の中で、二人の男が自信ありげに親指を立てた。二人は、レミーを追って山腹を滑り降りていった。

二人の追手はすぐにレミーに追いついた。

山腹の地理を知る追手と、何も知らないレミーの差は歴然としていた。レミーの足元で追手の放つレーザーの光が飛び散った。

レミーがスキーを履いたのは実に四年ぶりの事だった。だが、自信はあった。何しろ、レミーはオリンピックの大回転に出場した事もあったのだ。もっともそれは、ヨーロッパ地区の優勝候補選手の身代わりではあったのだが……二十一世紀ともなると、アマチュアリズムのオリンピックといっても、所詮はウインタースポーツ用品のPRの場でしかなかった。優勝した選手の使用した道具を作ったメーカーの売り上げは確実に伸びたし、それは国家間の輸出入にも微妙に響いていた。そのオリンピックの年……ヨーロッパ地区のスポーツ用品は、オーストラリア、日本、アメリカ等のスポーツ用品に押されぎみで、どうしても負けるわけにはいかなかった。

しかし、女子大回転の優勝候補が決勝前の練習で、骨折してしまった。負けるわけにはいかないヨーロッパ地区は、秘密裏にヨーロッパ情報部（ＥＩＣ）に身代わりを依頼した。そして白羽の矢が立ったのがレミーだった。

レミーは、黒髪の優勝候補に化けるために、かつらをつけ、念入りに変装してオリンピックに出場した。結果は二位で、どうにかヨーロッパ地区は面目をほどこしたのだ。

だが今は二位では困る。追手に追いつかれたら、それは死を意味する。やがて前方に十数メートルの崖が見えてきた。イチかバチかだ。レミーは、スキーを崖に向けた。ジャンプ！　レミーは、スキーにしがみつくように前傾姿勢をとった。横風が強い！　レミーを追ってジャンプした追手の一人は、バランスを崩して落ちていった。もう一人は、ジャンプを諦め、緩斜面を降りていく。

宙を飛ぶレミーに、さらに複雑な気流が襲いかかった。スキーが、体がグラグラ揺れる。だめだ、着地出来ない！　その時だった。レミーに懐かしい感覚が蘇ったのは……そうだ。この感じ。クインローズで……敵に追われ急降下した時と同じじゃないか……思い出せ、レミー！　あの時、クインローズはレミーと一心同体だった筈だ。地面激突の瞬間、機首を挙げて……そう、ここだわ！　レミーはスキーの先端を力一杯引き上げた。スキーボードは、しっかりとざらめ雪を摑まえて着地した。ざらめ雪は、かなり下界が近いという事を教えてくれていた。数百メートル下には、高山樹林の森も広がっていた。

——やった！　でも、もう一人追手が残っている……いえ、大丈夫よ。私にはボーガンがある——

ボーガンを見たレミーは、次の瞬間、顔色を変えた。矢が一本しかない。急所をしとめない限り、完全に相手の戦闘能力を消す事は出来ない。もし撃つのを失敗したら……。
レミーは、凍える手で、ビキニのブラジャーから、残っていた片方のストッキングを取り出した。相手の背後から忍びより、ストッキングで首を締めれば……いや、かじかんで凍傷になりかかった指にそんな力は残っていなかった。しかし、レミーはストッキングのもう一つの使い道を知っていた。
レミーは、追手の現れるのを待った。
赤道直下の太陽が、ざらめ雪に反射して、剝き出しになった岩場を少しは温めてくれるのが救いだった。

＊

——あの崖からジャンプだ。助かりはしまい……だが、せめて死体でも確認できれば——
追手の男に油断がなかったと言えば嘘になるだろう。それでも、岩場の向こうに無造作に投げ出されたストックとスキーを見つけた時には、一応慎重にレーザーマシンガンを構えて、気配に気を配りながら近づいていった。が、次の瞬間、後頭部に女の足蹴りが飛んだ。一撃で男は目を回し、その場に倒れた。雪の斜面を、男のレーザーマシンガンが滑り落ちていく。女性の足に、男を一撃で倒すような力があっただろうか……まして、疲れ果て、全身凍えきっているレミーの足に……。
レミーは、雪の上に女の足を放り投げた。
それは、ざらめ雪をぎっしりつめたストッキングだった。

雪はこちこちに凍り、棍棒以上の凶器と化していた。
レミーは、倒れている男の着ているラックを脱がしにかかった。裸のレミーは、一時も早く暖を取りたかった。男の落としたレーザーマシンガンより、まずラックが欲しかった。だが、それが誤算だった。いきなり、レミーの周りの岩場が、雪が、レーザーの光で飛び散った。
上空から、ジェットヘリが狙い撃ちしたのだ。
岩場の陰に駆け込んだレミーは舌打ちして、男の落としたレーザーマシンガンの転がっている方を見たが、最初の攻撃で、マシンガンは粉々に壊されていた。見上げるレミーに、ジェットヘリを操縦するゴーホムの姿が見えた。
ヘリからカインの声が聞こえた。
「レミー・島田、よく頑張った。だが、狩りの楽しみはこれからだ。逃げるがよい。逃げて、逃げて、逃げまくって……そして、最後に仕留めるのはこの私だ」
レミーはスキーを履くと岩場から飛び出した。高山樹林の林に飛び込めばなんとかなる。
「林に飛び込んでもどうにもならない。レミー・島田。さ、逃げるがいい」
レミーの気持ちを見すかすようなカインの言葉が上空から聞こえた。その言葉に嘘はなかった。
高山樹林の間をすり抜けて滑るレミーを、やはり木々を数十センチの間隔ですり抜けてジェットヘリは飛び、レミーをいたぶるような正確な射撃が続いた。それは、カインの残酷な遊びだった。
「見事な操縦だわ……あの大男には出来っこない……すると自動操縦……」
レミーの頭に、様々な自動操縦の方法が浮かんだ。だが、百キロ近いスピードで、障害物との差を数十センチで躱して飛ぶ自動操縦はそう多くない。……そうか、自動焦点操縦……昔、カメラに

使われていたオートフォーカス、自動的にピントを合わせるやり方……二つの目から音波や赤外線を出して、対象物との距離を知る方法……それなら、ひとつの目を潰せば、距離は分からなくなる。わたしのボーガンには矢が一本……レミーは、くるっとスキーを回転させた。レミーは後ろ向きにスキーを走らせながら、ボーガンを構えた。

ジェットヘリは十メートルも離れていなかった。カインの残忍な笑いが、すぐそこに見えていた。ジェットヘリの両側に昆虫の目のようなセンサーが二つ見える。

レミーはボーガンを撃った。矢は、センサーの真ん中に当たってはじけた。もとより矢の一撃などで壊れるセンサーではなかったが、いきなり現れた矢の影は、センサーの一瞬の距離感を失わすには十分だった。グラリと揺れたジェットヘリは、たちまち樹木に激突し、落下し炎上した。

「遊びすぎよ」

レミーは、後ろも見ずに滑り去った。

ジェットヘリの破片の下で、身動きできない重傷を負ったカインは、やはり黒焦げになってのたうち回っているゴーホムに狂ったように叫んだ。

「殺せ！　あの女を必ず殺せ！」

*

月の山の岩肌を夕陽が照らしていた。

もう周りに雪はなかった。しかし歩く気力も尽きかけていた。レミーは、ただ本能のおもむくまま、足を動かしているだけだった。肌はもう冷たさを感じていないほど、寒さにやられている。夜

になればさらに冷え込み、おそらく、明日の朝まで生きていられないだろう。
「レミー・島田……一人ぼっちでアフリカ赤道直下で寒さに凍えて死ぬ……か」
レミーは、ヘミングウェイの小説『キリマンジャロの雪』の中にある、山の頂で死んでいる豹の話を思い出して微笑した。
「私は豹か……へへ、いきがっちゃって……こういう事考える時って、やっぱり死ぬのかなあ」
その時だった。レミーは微かな地鳴りを感じた。そして、岩場の向こうに白く暖かい蒸気を見た。そして鼻をつく硫黄(いおう)の臭いも……。
レミーは、よろけながら、蒸気の方へ向かった。
「やった！」
そこに泥沼があった。中央から蒸気を伴った泥の泡がボコボコと吹き出していた。
それは、火山で温められた地中の蒸気を地表に吹き出す、泥の温泉だった。レミーはためらわず泥の中に飛び込んだ。温かかった。頭から髪の先まで、泥の中に潜って温めた。体に生気が蘇ると同時に、快い疲れがドッと襲ってきた。
「溺(おぼ)れないようにしなきゃ……」
それでも瞼(まぶた)が重く垂れてくる。
その時だった。肩が何者かに掴まれ、グイッと泥の中から宙に引き上げられた。黒焦げになったゴーホムだった。ゴーホムの手が、レミーの首を掴んだ。
レミーは抵抗しなかった。
「もういいわ……いいのよ、これで……」

薄れていく意識の中で、レミーは耳なれない音楽を聞いた。尺八の音だった。
鈍い音がした。
ゴーホムの体がビクンと動くと、レミーの首から手がほどけ、ゴーホムは仰向けに倒れて動かなくなった。
泥だらけでしゃがみ込んでいるレミーの前に、虚無僧姿の男が立っていた。
金髪をなびかした端整なその男の横顔には見憶えがあった。レオナルド・メディチ・ブンドル、その人だった。
「弟が迷惑をかけた。済まない」
レミーはキッと立ち上がると、いきなりブンドルの頬を叩いた。
「どうせ来るんなら、なぜもっと早く来てくれなかったの？」泣き声に近かった。
しかし、そう言い終えてから、レミーは自分の言葉に慌てた。
――なんて事を言ってるんだろう、私。こいつは一年前まで敵で、しかも私の昔の恋人を殺した男……それなのに……――
確かにレミーの台詞は、待ち合わせに遅れた恋人にだだをこねている女の子のように聞こえた。
ブンドルもそれを感じたのか、意外そうな表情をチラリと見せた。
「弟が私にプレゼントを贈ると言って来た。よもやと思ったが、間に合って幸福だった」
「あなたの弟、多分、死んだわ。私がジェットヘリを落としたの」
「構わぬ。あれは、生きている事自体が許されぬ存在だった……君にはあの光が見えぬかね」
ブンドルは山頂を見上げた。山の頂がチカチカと光っていた。

「動物保護官達とアフリカ駐在の国連軍が、共同で弟の密猟団を攻撃しているのだ。私が位置を知らせた。弟が美だと信じていたものは、本当の美にとっては最悪の敵だ」

レミーは、倒れているゴーホムを見た。

「死んでいるの？」

「いや、象の麻酔を撃ち込んだだけだ……。さ、君は行くがいい。毛布と自動操縦のジープを用意した。保護官の宿舎まで一時間もあれば着くだろう」

「あなたは……どうするの？」

「わたしは闇に生きるのが似合い……さらばだ」

辺りはすっかり闇に変わっていた。

ブンドルは尺八を吹きながら、レミーに背を向け、歩き始めた。

レミーがその後ろ姿に声をかけた。

「あなたの宇宙美学論、読ませて頂いたわ」

ブンドルの足が止まった。

「それで？」

「さっぱり分からなかった」

ブンドルの体は、石につまずいたように揺れた。

「いいのだよ。存在自体が美しい者は、その美について何も分からなくても……」

「……私が美しい？」

ブンドルが振りかえった。レミーは髪の先から足の先まで泥だらけだった。ブンドルは一瞬、眉

をひそませたが……、

「美とは思い込みだ。私が美しいと思えば、それは美しい……たぶん、きっとな……」

ブンドルは、自分の台詞に呆れたという感じで、かぶりを振って歩き去った。

「たぶん、きっとか……」

今度はレミーが、石につまずきたい気持ちだった。

保護官の宿舎にたどり着いたレミーは、ジープから降りるのも億劫なほど疲れていた。

――一分でも早く眠りたい――

だが、宿舎のロビーのソファーに座る男の後ろ姿を見たレミーは、ハッと立ち止まった。そして、そっと近より、フッと笑って男の肩に手を置いた。頭の毛を剃りあげた中年のその男は、振り返らずに言った。

「レミー、相変わらずかね」

「ええ、相変わらずです……、隊長」

「あの子が戻って来る」

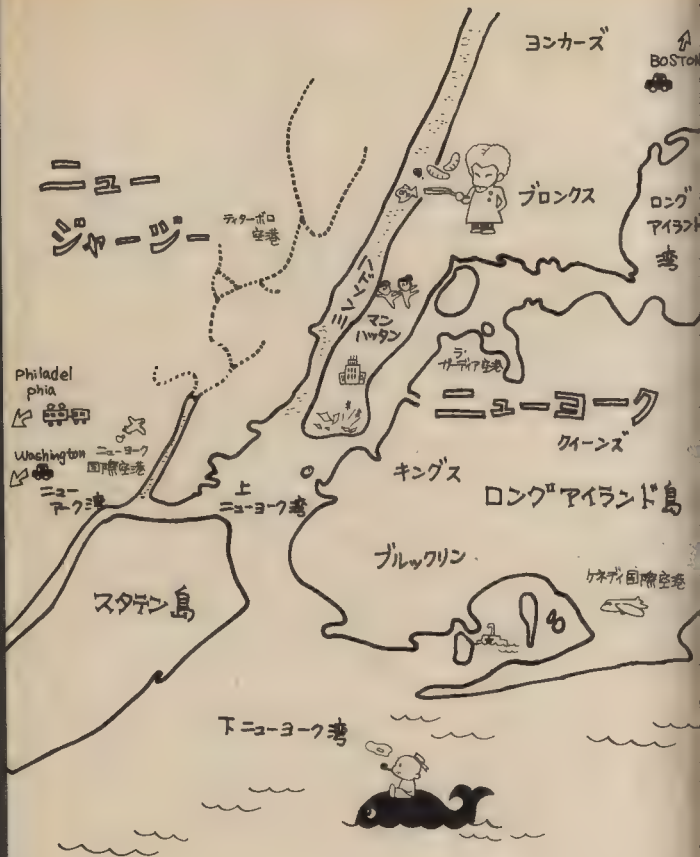
「あの子が?……」聞かなくても、その子が誰だか分かっていた。「話が長くなりそう……お願い、時間、いえ、二時間だけ眠らせて……」

「いいとも、疲れは十分とりたまえ。先は長い……」

レミーは自分の部屋へ入り、シャワーで体を洗うと、ベッドへ倒れこんだ。

そして、二時間どころか、まるまる、昼夜、ドロのように眠り続けたのだった。

# 第二章

# ブロンクス・ホットウルフ（あつい狼）

ヨンカーズ
BOSTO
ニュージャージー
ティターボロ空港
ハドソン川
ブロンクス
ロング
アイラン
湾
マン
ハッタン
ラ・ガーディア空港
ニューヨーク
Philadel
phia
Washington
ニューヨーク
国際空港
ニュー
アーク湾
上
ニューヨーク湾
キングス
クイーンズ
ロングアイランド島
ブルックリン
ケネディ国際空港
スタテン島
下ニューヨーク湾

《レポートI》

月の山を本拠地とするカイン密猟団が壊滅した頃……ロシアのバイカル湖のほとり、モンゴルとの国境に近い街イルクーツクの郊外に秘密裏に作られたソビエト軍のESP研究所で、ある事件が起こった。ESP研究所では、超能力の軍事利用を研究していたが、サンプルとして集められた超能力を持つと思われる幼児のうち、特に優秀と思われる七人の子供達が、警戒厳重な研究所から忽然と姿を消したのだ。一体どうやって姿を消したのか、また何者が子供達を連れ去ったのか、懸命の捜査にもかかわらず、何一つ判明しなかった。軍当局は、国家の重要機密として関係者に箝口令をしき、この事実を子供達の両親にも知らせなかった。

数週間後、子供達の両親は、子供達の遺留品と軍からの電報と勲章を受けとった。

〃オ子様ハ、原子炉ノ事故ニヨリ、死亡……誠ニ遺憾ナガラ、御遺体ハ、放射能汚染ニヨリ、オ返シデキマセン……我ガ国家ハ、小サナ英雄ノ死ヲ、勲二等勲章ヲ贈ルコトニヨリ、タタエマス……〃

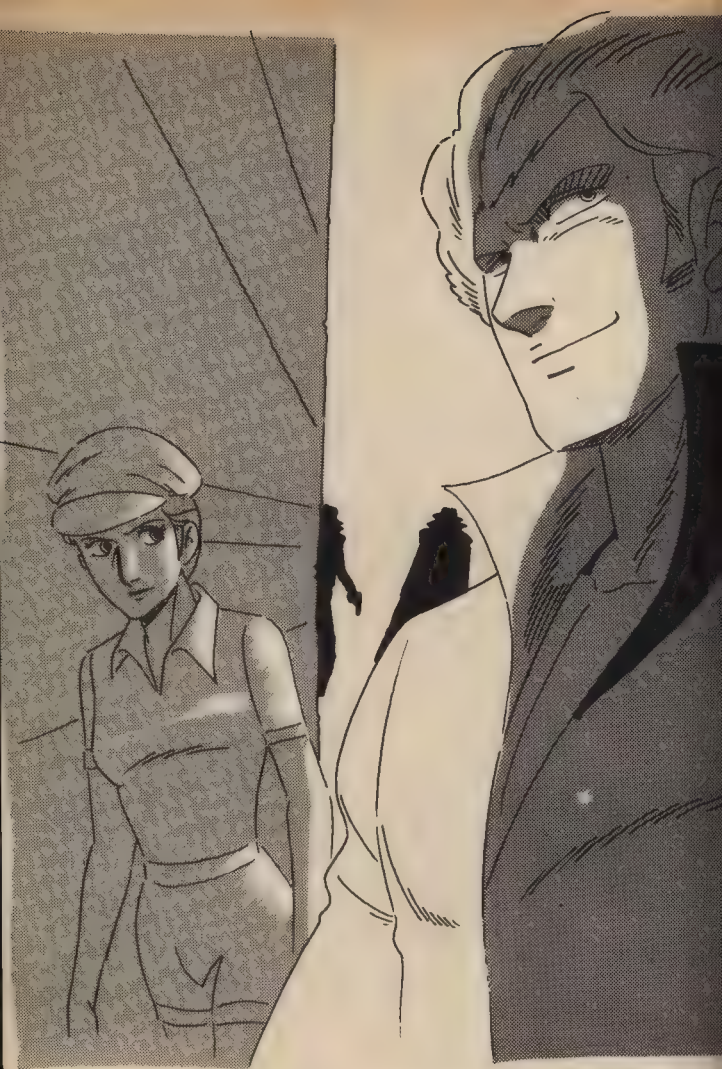
ニューヨーク、ブロンクス。
犯罪発生率世界一の都市、ニューヨーク……、その犯罪都市のシンボルとも言うべき地区が、ニューヨークの北東部に広がるブロンクスである。市警察がとっくにサジを投げたこの地区の名所の一つに動物園があったが、檻に入った猛獣より、もっと恐ろしい人間という名の獣が、ブロンクスの朽ち果てたビル群の中に、そして薬中毒やアルコール中毒で生気無く横たわる浮浪者の屯する路上に、放し飼いにされていた。

＊

薄汚れた街並みの中に、昼間だというのに場違いなネオンサインを輝かせて、いかめしい制服のガードマンに囲まれたフライドチキンの店がある。街路を俯き加減で往き来する、生活に草臥れ果てたブロンクスの住人に、店のスピーカーからCMソングがガンガン叩きつけられていた。
〝フラッシュレディ……
昼に太陽を……
味な事なら
ケルナグール・フライドチキン〟
「何がフラッシュレディだ。うるさいんだよ！　あの怪獣のおかげで客がこない、このやろ！」
ケルナグール・フライドチキン・ブロンクス支店のはす向かいにある小さなホットドッグ兼ハン

バーガースタンドのカウンターの中で、男は鉄板の上のハンバーガーのパティに、フライ返しを叩きつけ、八つ当たりしていた。
カウンターの外から女の客の声がした。
「ねえ、それじゃ、パティが潰れちゃうわ。そっと優しく、そっと叩いて……」
天然パーマの男は、客の顔も見ずに、
「お客さん、うちにはうちの焼き方があるんだ……。文句言わずに、焼き具合だけ言ってちょうだい。レアかミディアム？」
「黒焦げで……」
「ん？　オチョクルのか？　うちのは百パーセント極上ビーフだ。生で食うのが一番、焼くのが勿体ないって代物だぜ」
「でも、たまには、たっぷり焼けたのを……」
「ん」
いまの台詞には憶えがあった。——たしか一年前、ドクーガとの決戦の前夜、レミーのハンバーグを真吾と奪い合った時に、俺がくっちゃべったセリフだ——
キリーは、フライ返しでパティをひっくり返すと、はじめて客の顔を見た。
Gパンにシャツ、ニューヨークメッツの帽子をかぶった女が立っていた。かなり陽に焼けているが、忘れもしない、しわもない。
女は、茶目っ気たっぷりにウインクして、
「ハ～イ、元気？」

「ハ～イ、元気ですよ。お顔も黒焦げじゃん、レミー」
「黒ヒョウ……けっこう可愛いわ」
「黒ネコぐらいでいて下さい。本気で黒焦げハンバーガー？」
「ノン、ご自慢のホットドッグ（熱い犬）にするわ」
「ホットウルフ（熱い狼）と呼んでくれ……辛子(からし)は？」
「たっぷり」
「オイヨ……ホット・ホットウルフね」
キリーは、ホットドッグに辛子をつけてレミーに渡した。
「それにしても、相変わらずおいしそ……。そうか、俺に抱かれる決心がついたわけ？」
「あなたには、美味(おい)しいホット・イザベルがいるでしょ」
「……あれは食べそこなった」
レミーは肩をすくめた。
「みんなお料理苦手よね……」
「で、俺にお土産はなんだい？」
「あの子が帰ってくるわ……」
「あの子が？……」
キリーに、それが誰の事か分からぬ筈(はず)もなかった。
「星の向こうのカワイコちゃんでも紹介してくれるの？」
「それは望み薄ね」

と、その時、ブレーキの軋む音がした。
店の前に、中古のエアカータイプのフォードが停まった。
「伏せろ！」キリーが叫んだ。
レミーがホットドッグを持ったまま宙返りしてカウンターの中へ飛び込んだのと、中古のフォードからレーザーマシンガンが、雨霰と降り注いだのがほぼ同時だった。
マシンガンの一斉射撃で、店の中の備品がみるみるうちに粉砕されていった。
カウンターの後ろで、ジーンズのポケットからレーザー銃の部品を出し、組み立てながらレミーがキリーに言った。
「相変わらず派手好みね」
「リンド組の奴らだ」
「あなた、まだヤクザから足を洗ってないの？」
「俺は洗った。スワン組の弟分達にも足を洗わせた。だが結局、この不景気など時世で、奴らははきだめに戻るよりなかった。俺は元スワン組の相談役ってわけさ」
「兄貴分はつらい……」
「まあな」
キリーは、カウンターの下から取り出した旧式な拳銃S&W、M26・44マグナムの弾を確認した。
中古フォードの攻撃が止んだ。やっとマシンガンのレーザーが切れたらしい。フォードはエンジンをふかし発進した。
レミーとキリーはコクリと頷くと、カウンターから飛び出し路上に出る。

キリーをたずねたレミー。リンド組の襲撃をうけ、危機一髪

レミーは、置き場のないホットドッグを口にくわえている。
「プシュ!」
「ズガーン!」
レミーがレーザーを一発、キリーもマグナムを一発だけ、逃走する中古フォードに向けて発射した。二人はニッコリ笑った。
「現役ね」
「レミーもなまっちゃいない」
次の瞬間、その言葉どおり、フォードの後部ボンネット二カ所から煙が出て爆発……、フォードは横転し、街灯に激突した。
「さて、リンド組におとしまえをつけるか」
「手伝いましょうか?」
「ワンダーウーマンには役不足な相手さ、手が汚れるだけだ。さ、早く食わなきゃホットウルフが冷めるぜ」
キリーが、レミーの口にくわえているホットドッグを指さして言った。
レミーは、肩をすくめてホットドッグをガブリとやった。とたんに目を白黒……。
「ア……ウ……エ……」
レミーは舌を出してハアハア……。
「なに、これ。何の辛子?」
「スペシャル・キリー・マスタード。アフリカの唐辛子に日本のわさびに、タバスコ……カレーも

入ってら……」
「ブレンチ・マスタードじゃないの？」
「ありゃ、甘くていけない。辛子は辛くなきゃ……中途半端はいけない」
レミーは、口を押さえて店に駆け込むと、先刻の銃撃で壊れた販売機から吹き出しているコーラをがぶ飲みしたが、それから三日間、口の中が火傷したようで、何を食べても物の味がしなかった。
——こりゃ、売れんわ——
キリーの店に客が少ないのは、あながちケルナグール・フライドチキンのせいばかりではなさそうだ。

「今頃、キリーの野郎、血のしたたるミートボールになっている頃だぜ」
ブロンクス一の高級理髪店で、部下と共に散髪をしていたリンド組組長、ラッキー・ストライクは、満足げに葉巻の煙を吐き出し口ひげをひくつかせた。
もともと、リンド組とキリーが若頭をやっていたスワン組は、ブロンクスの縄張りをめぐって抗争を続けていた。しかし、四年前、キリーが懲役二百年の刑を受け、脱獄逃走してからというもの、キリーのいないスワン組は無力で、ブロンクスのほとんどがリンド組のものになった。ところが、三年前、キリーは通り魔のように現れたかと思うと、大暴れし、リンド組に大損害を与え、それこそ風のようにまた消えてしまった。
——今度見つけたら息の根を止めてやる——
そして一年前、手ぐすねひいて待ち構えていた彼らの前に、キリーは、なんとドクーガを倒し、

全世界を救った英雄になって戻ってきた。こうなっては、やたらと手を出すわけにはいかない。
——戦争から帰ってきた英雄ほど、堅気の世界で扱いにくいものはない——
こう言って、堅気でもないのに、ラッキーは舌打ちしたものだった。
やがて、バラバラだったスワン組が、キリーを慕ってブロンクスに集まってきた。せっかく手に入れたつもりのブロンクスの縄張りが、白蟻に食われたようにポロポロ崩れ落ちていく。たまりかねたラッキーは、数週間前からキリー暗殺の機会を狙った。そして今日……。
「お顔をあたらせて頂きますので、お煙草を……」
理髪師の助手の声に、ラッキーは葉巻を灰皿に置いた。理髪師の助手が、ラッキーの顔にシェービングクリームを塗った。奥からマスクをかけた理髪師が剃刀を持って出てきた。理髪師の目は笑っていた。
理髪師は、無造作に剃刀をラッキーの鼻の下にあて、ジャリッと剃った。ラッキーの口元がすずしくなった。片方の口ひげが剃り落とされたのだ。
「な、なにすんでえ!」
ラッキーの目の前に、いきなりジャックナイフが突き出された。ナイフは、ラッキーの喉元に食い込むように突き当てられた。
「先刻は、けっこうなプレゼント、有難うよ」
理髪師がマスクを取った。キリーだった。
周りで散髪していたラッキーの子分達が、思わず立ち上がろうとしたが、ラッキーが喚いた。
「立つな。てめえら、俺がどうなってもいいのか!」

キリーはニッと笑った。
「分かりがいいや……。じゃ、ラッキー親分、これにサインして貰いましょうか」
キリーは懐から書類を出した。
「な、なんでえ……これは……」
「俺の店をメチャクチャにしたのは、お前の仕業だっていう自白書……ついでに、こっちの書類にゃ、ここ数年、てめえらがやってきた悪事の数々……、極めつきは、リンド組解散の、FBI長官並びにアメリカ大統領宛ての宣誓書……」
「な、もん、役に立つけえ……もともと俺達リンド組はドクーガグループ……、カットナル大統領の配下なんだぜ……。カットナルさんが、な、事、許す筈がねえ」
「甘いんだよ。ドクーガはとっくに潰れ、カットナルは今や正義と真実の人、アメリカ大統領様だ。暴力団とのつながりがあるなんて噂はエライ迷惑だと思うぜ……」
「俺達を見放すってのか……」
「政治家はそんなもんさ。だいたい、俺がドクーガ退治の英雄ってんで、俺の二百年の罪を恩赦したのも、そのカットナルさんだ。ほんの少し前までは敵同士だったっていうのにな」
「汚ねえ……」
「確かに綺麗じゃないね。だが、溝ネズミにはダーティが似合いさ。さ、書くのか、書かねえのか！」
キリーは、ラッキーの首筋にナイフをグイグイ押しつけた。
ラッキーは呻くように言った。

「サインは、ボールペンかい？　万年筆かい？」
キリーのナイフが、一瞬光った。
ラッキーは思わず、右の人さし指を押さえた。指から血がにじんでいる。
「血で書きな。それがしきたりだろ！」
ラッキーは、顔をしかめながら書類にサインした。
「ＯＫ、達筆だぜ……」
「てめえ、そいつを大統領に届けるまで、生きていられると思っているのか……俺達の組織はどこにでもいるんだぜ。警察の中だってな」
「それより、手前の心配をしな。勝手に解散を決めちゃって……、子分達はどう思うかな……」
キリーの言葉にラッキーは青ざめた。ラッキーを見つめる子分達の目は冷たかった。
「お、おい。俺を信じろよ。俺を……」
キリーはにやりと笑い、
「よ～く話し合いな。アバヨ」
書類をひっ摑むと、理髪店の外に飛び出していった。
「追え！　取り戻せ、書類を！」
子分達は銃を抜くと、我先に理髪店から飛び出していった。
だが、理髪店の前に出たとたん、呆然となり、銃を収めざるをえなかった。そこに全米三大ネットワークのＴＶ中継車とテレビカメラがずらりと並んで、彼らを写していたのだ。やがて、口ひげを半分剃り落とされたラッキーが、理髪店から出てきた。

今や、スターとなったジャーナリスト、イザベル・クロンカイトが、ラッキーにマイクを突き付けてインタビューした。
「ミスター・ラッキー・ストライク……、全米暗黒街史上、自発的に組織を解散するなどという快挙は初めての事です……。この放送は全米はおろか、宇宙中継で全世界に同時放送されています。今のお気持ちを……」
「いや、ま、あの……、その……」
カメラのライトを正面から浴びて、どこかの政治家のように、居直れる度胸を、ラッキーは持っていなかった。
「これからブロンクスは明るくなります。皆さん、今日までいろいろありがとう」
ニューヨーク市長代理から花束を貰ったラッキーは、ひきつった笑いを作って、そう答えた。
蛇足ながら、一カ月後、ラッキーは行方不明になり、その六年の後、ニューヨーク港湾工事の作業員が、港の底から足をコンクリート詰めされた白骨死体を発見した。白骨死体の発見は日常茶飯事だったし、六年前のラッキーの失踪を憶えている者はほとんどいなかった。

＊

メチャクチャに破壊されたホットドッグスタンドをキリーの弟分達が、手際良く片付けている。
その様子が見渡せる薄汚れたバーのカウンターで、バーボンのジャック・ダニエルを飲みながら、キリー、レミー、そしてイザベルは話していた。
「イザベル、とうとう君の力を借りちまったな」

「いいのよ。ギブ・アンド・テイク。あなたはリンド組を潰し、わたしはスクープ。ついでに、全米暗黒街の組織相関図も教えてくれると有難いんだけど……」
「だめだ……」
「残念ね。でも、いつか探り出すわ」
「勝手にしろ。子供は命を大事にしな」
レミーは、キリーとイザベルの顔を交互に見つめながら、仲の良い子供のつっぱり合いを見ているような阿呆らしい気分に襲われた。
「兄キ、新しい店の設計図についてなんだけど……」
キリーの弟分が呼びに来た。
「OK！　ゆっくり飲んでいてくれ」
キリーは、二人にそういって出ていった。
イザベルはポツリと呟いた。
「あの人とは駄目だったみたい……」
「えっ？　のろけだったらお断りよ」
イザベルはフッと微笑し、ボーイに注文した。
「もう一杯、ダブルで……」
イザベルはバーボンを一気に飲み干して言った。
「あの人の自伝読みました？」
「えっ？　いいえ、私、ずっとアフリカにいたから……」

もっとも、アフリカにいた事は、キリーの自伝を読んでいない理由にはならない……なぜなら、ブンドルの書いたフランス語の「宇宙美学論」は、パリの書店から取り寄せて、しっかり読んでいたのだから……。イザベルが呟いた。
「ひどい本なんです」
「ひどいって？」
「キリーの自伝『ブロンクスの狼』、出だしは、——俺には何もなかった。我が輩は、ほとんど狼である。名前はまだない。孤児院の長い廊下を抜けるとそこは雪国だった。雪は降る降るあなたは来ない。生きるべきか死ぬべきかそれが問題だ。……初めはシュールな書き出しだなと思ったんだけど、最後までこの調子じゃあね……。何もないどころか、何が書いてあるのかも分からない……。だから、私、代筆してあげるって言ったんです。そうしたら、自伝は自分で書いてこそ自伝なんだって、つっぱって……。おまけに、その頃、世界中の千を超す出版社から、キリーについて伝記を書きたいという申し込みがあって、それをキリーったら、全部無料で許可しちゃったんです。結局、他の人の書いたキリーの伝記はベストセラー、本人が書いた自伝で売れたのは、サイン入りで売った五万部程度……。無理ないんです。何が書いてあるか、本当に分からないんですもの……」
「言葉もない……」
「どこかが子供なんです。私もいいとこ子供ですけど、彼はもっと子供……」
酔いのせいか、イザベルの舌がもつれてきた。
「分かるわ……。そのくせあの人、自分は大人だと思っている。そしてあなたを子供扱い……」
「ええ……、私、子供に見えますか？　もう二十歳になったオバンですよ」

「！……（二十でオバンじゃ、私しゃ何なんじゃ）」
レミーは、いきなりボーイに言った。
「バーボン！　ダブル！　私も飲みたくなったわ」
レミーは、グラスの酒をクイッと飲み干して言った。
「要するに抱かれれば良かったのよ。こっちからね。あなただって知らないわけじゃないんだろうし……」
「ウン……やってみた。女だもん。私だって、やりましたよ」
「！……あ……、そ……」
「一緒にお酒飲んで……、彼の部屋にいって……、ま、一応、ステレオかけたわけ……、ラフマニノフのピアノコンチェルト……分かるう？」
「分かる。マリリン・モンローの映画にでてきた、それを聞くと女の子が燃えてきちゃうっていうあの曲ね。あなたがマリリン・モンローでないところが、ちとつらい」
「うん、ま、そこは耐えて……。でもって、いろいろあるわよね。途中はしょって言うけど……、裸になったわけ……わたし」
「彼がそうしたの」
「私がそうしたの」
「あ……そ」
「うん……そ」
「で？」

「彼、……なんだか、えらく焦っちゃって……、言ったわ――うちの風呂、あのう、今日、壊れてんだ――って」
「どこまで阿呆じゃ、あやつは」
「バカバカしくなっちゃった」
「なるよなあ……」
「で、本質的に、あの人、そういうの駄目なのかと思ったわけ。最近多いもん、そういう男。……で、しつこいタイプでしょ、わたし」
「うん、ドクーガまっ青のシツコサです」
「ありがとう。で、調べたわけ……そしたら、しっかり、あっちこっちに女の人いるわけ」
「悪い奴っちゃ」
「悪い奴よ。でも、どーして私には悪くなんないの？　で、もう、わたし、止めたって思うの当然でしょ……。そうすると、こういう商売でしょ……」
「商売？」
「ジャーナリスト」
「そか」
「けっこう、それなりにフレンド出来ちゃうわけ……」
「あなたのベッドに……カンパイ……」
「でもさ……ちょっと気になるわけ……。だって」
「だって？」

「キリーは、わたしが初めて好きになった人だもん」
「うっそだーい」
「うそです」
「納得……」
「で、それが最初の頃の三カ月で……、今日会ったのが八カ月ぶり……。彼に会っても、昔の高鳴りはないわ」
「……つらいね」
「つらいね。忘れるもんね、女って……」
「……、うん……」
なぜか、レミーがしょげ返ってしまった。

*

レミーはキリーに、改めてサバラス隊長から預かった手紙を渡した。

> ディア、ミスター・キリー
> ケン太が帰ってくる。新たなる作戦が始まる。君が必要だ。もちろん、決めるのは貴殿の自由……。
>
> キャプテン・サバラス

キリーは、レミーをじっと見つめ、それから口を開いた。
「行きたいとは思うさ……。しかし、俺にはご覧の通り、三万人の元スワン組の舎弟がいる。俺がいなくてもやっていけるだろうが、俺としちゃ、三万人の家族を捨ててはいけない……」
「でしょうね。隊長には、そう伝えるわ……。頑張って、キリー」
「君もな……」
その時、じっと傍らで聞いていたイザベルが口を開いた。
「マスコミは邪魔かしら」
「そうくると思ったわ。でも、わたしにはなんとも言えないの。だって、その『新たなる作戦』自体を私、知らないもの」
イザベルはきっぱり言った。
「一カ月後、サハラ砂漠、北緯二十五度、西経五度地点ね……。わたし、行きます」

レミーの別れ際は、いつものようにあっさりしていた。
「シー・ユー・アゲイン！」
「また会おうぜ……。いよいよ困った時には電話しな」
「地球にいたらね」
小さくなっていくレミーとイザベルの後ろ姿を見つめながら、キリーは思った。
「地球にいたらね……か……」
キリーは、ホットドッグスタンドの片付けを指揮しているキリーの片腕ともいえる弟分の傍らに

行った。
「おい、お前、ハンバーグ焼けるか?……」
「いえ、俺ァ、食う一方でして」
「教えてやるよ。それから、スペシャル・キリー・マスタードの作り方もな……。いいか、あと一カ月で必ずマスターするんだ」
「はあ……」
「そしたら、俺の店はお前のもんだ……」
そして自分に言い聞かせるように言った。
「中途半端はいけない……」

# 第三章

# もう一度、アウフ、ビーダーゼン

北海
ハンブルク
エルベ川
ブレーメン
ハノーバー
OBAKE
ブロッケン山
東ドイツ
西ドイツ
オランダ
ライン川
ゾーリンゲン
デュッセルドルフ
ケルン
ボン
ルクセンブルク
ローレライ
フランクフルト
マイン川
ニュルンベルク
モーゼル川
カールスルーエ
バーデンバーデン
シュトウットガルド
ミュンヘン
フランス
スイス
ボーデン湖
オーストリア
リヒテンシュタイン

《レポートⅡ》

ソ連のESP研究所から子供達が消えた頃、赤道直下、ニューギニアの未開原住民の間で、ひとつのパニックが起きていた。

各部族には、森や山や川の精霊と話せるという呪い師達がいて、その占いが部族の生活の基盤になっていた。

彼らのほとんどが高齢であり、呪い師達は、部族の子供達の中から、精霊と話せる能力を持つ者を選んで後継ぎにするべく、呪いの教育をしていた。その子供達が、神隠しにあったように消えてしまったのだ。

――呪い師の後継者がいなくなってしまっては、我々の生活はどうなるのか――

部族の動揺を押さえるために、呪い師は言った。

「子供達は、精霊の元へ修業に行ったのだ」

各部族のパニックは治まったが、当の呪い師達は途方に暮れていた。

高齢の呪い師達には、精霊と語る力はすでになく、子供達がどこに行ってしまったか、知る者は誰もいなかったのだ。

ニュルンベルク。
西ドイツ南部、バイエルン州の都市。
世界的に有名な人形、玩具、文具品の産地……歴史上に現れたのは十一世紀からで、十四世紀には、欧州一流の商業都市として繁栄し、芸術の中心ともなった。が、第二次世界大戦により市街の大部分が破壊された。
現在は復旧され、家々の壁や塀、城壁などに中世の面影を残している。第二次大戦で敗戦したドイツの戦争犯罪人を、アメリカ等の戦争勝利国が裁いたニュルンベルク裁判でも知られる街である。
戦争という愚行の中で勝利した者に正義があり、敗戦した者が悪であるという論理がまかり通っていた時代の、暗い裁判だったが、今はオモチャと文具の街、名物のニュルンベルクヴルスト（あら挽きの肉を使った焼きソーセージ）の香ばしい香りの漂う街である。

＊

レミーは、グッドサンダーのもう一人のファイター、北条真吾に会いにドイツに向かった。
ケン太がもうすぐ戻って来て、新しい何かが始まる……、真吾なら喜んで参加してくれるだろう。
だが、風の噂に聞いた、骨折入院中の怪我の治り具合が気掛かりだった。

レミーは、真吾が入院しているという、ドイツ南部の街、シュトゥットガルトの病院を訪ねたが、担当の医師は、すでに退院した事を告げた。

「どこへ行ったか知りませんか」

レミーの問いに、医師は眉をくもらせて答えた。

「知るもんですか……。無断で病院を抜け出た人の行き先なんか……。あの人は、本当にドクーガを倒した英雄なんですか？　いえ、入院費は前払いで頂きましたから、文句は言いませんが……。患者としてのマナーがね……」

「マナー？　どういう事です？」

聞き返したレミーに、医者は、患者の秘密は部外者には言えないと語って口をつぐんだ。

病院を出たレミーは、真吾の行方を求めてシュトゥットガルトの駅からミュンヘン行きの高速列車に乗った。

「あの人なら知っているかも知れない……」

真吾の国連軍時代の親友であり、ライバル……そして、真吾と共通の恋人、今は亡きリリー・レーンの娘のために、大芝居を打って養育費をドクーガから掠め取ったシュミット・ヘンケンに会えば、何か手がかりが掴めるかも知れないと思ったのだ。

ミュンヘン駅に着いたレミーは、旅行案内所で、シュミットの家を聞いた。ドクーガ壊滅以来、真吾とシュミットがドクーガ相手にミュンヘンを舞台に繰り広げた大芝居は、ドイツの中に知れわ

たり、特にミュンヘンっ子の喝采を浴びた。

リリーが眠る墓地は、今やミュンヘンの新名所になっていた。

ドクーガの目を避ける必要がなくなったシュミットは、墓地の近くに花屋を開いたが、この花屋で白いユリを買い、リリーの墓に手向けるのが、若い女性旅行者達の間でブームになり、今や、ロマンチック・ミュンヘンという名の観光コースになっていた。

「どこもかしこも有名人か……」

確かに、ドクーガ壊滅以後、あの事件に関わった人々の人生は大きく変わっていた。

彼らの一挙一動が注目を浴び、それがいやなら、身を隠すよりない。おそらく、真吾が行方不明になったのも、そこいらが理由だろう……。

レミーは、真吾の気持ちが分かるような気がした。

＊

レミーが訪れたシュミットの花屋は、有名な割には小さくて地味な店構えだった。

リリーブームに便乗して立ち並んだみやげ物屋や他の花屋に比べて、むしろ、ひっそりと恥ずかし気に立っていて、シュミットの人柄を表しているようで、レミーには気持ちが良かった。

思ったとおり、初対面のシュミットの印象は悪くなかった。昔、世界一の壊し屋だったという事が嘘のように、気さくにレミーを居間に迎え入れてくれた。

だが、シュミットも、真吾の行方は知らなかった。

「あいつは、私がドクーガから一億ドルをぶん取った後、私とリリーの娘の前に二度と姿を現さな

いと言った……。たとえ、ドクーガが滅びた今でも、一度言った事は守る奴なんだよ。たぶん、ドイツ人以上に頑固で、日本人以上に義理堅いんだろう」
「で、今どこにいるか、心当たりもないんでしょうか……」
シュミットは、少し考え込んでいたが、やがて口を開いた。
「ない事もないが……。行ってみるかね、ニュルンベルクへ……」
「ニュルンベルク？」
「私が案内しよう……。もしもあいつがニュルンベルクにいるのなら、私も会ってみたい。なに、時速四百キロの高速列車で、ほんの三十分だよ」

*

高速列車の中でシュミットは、レミーも知らない、真吾の過去を簡単に語ってくれた。
真吾の父は、ニュルンベルク駐在の国連軍で、情報関係の仕事をしていたが、真吾が十歳の時、夫婦で西ドイツの首都ボンに向かう途中、真吾を残して交通事故で死んだ。
「あれ？　飛行機事故じゃなかったの？」
とレミーが聞いた。
「それは、あくまでも表向きの説明で、真相は隠されていたんだ」
とシュミット。
「ふうん……。どうして？」

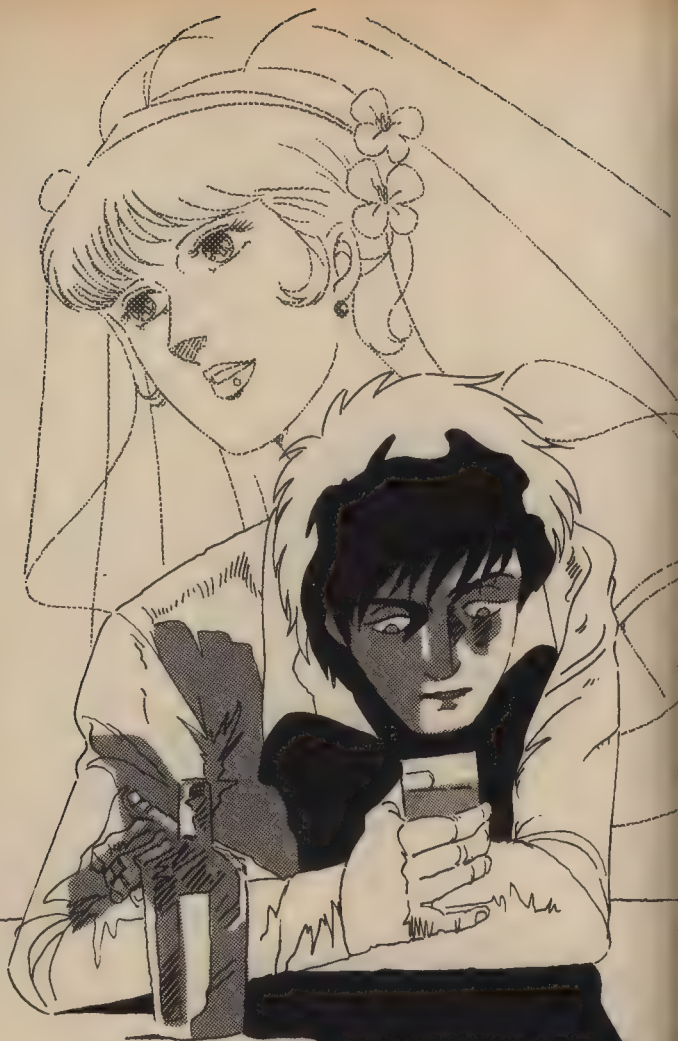
「事故の原因の裏に、なにかあったらしい」
夫婦の乗った車は時速二百キロで、ドイツの高速道路アウトバーンの立体交差のガードレールを突き破って落下し、爆発、炎上したという。事故の原因は分からなかったが、国連軍の情報部などに所属していると、原因不明の事故で命を失うなど、不思議な事ではなかった。
「十歳の時……」
レミーは、ケン太が父の真田博士を失ったのも十歳の時だった事を思い出した。
グッドサンダーのメンバーの中で、まるで実の兄のようにケン太に接していたのは、真吾だった。
……もしかすると真吾は、ケン太の中に、自分の子供の頃を見ていたのかもしれなかった。
両親を失った真吾は、ニュルンベルクにある国連付属の寄宿舎で、孤独な少年時代を過ごしたという。そして、それは国連軍の戦士として育てあげられる事を意味していた。
「あいつの趣味を知っているかい？」
シュミットがぼそりと言った。
「えっ？……いいえ、私達、そういうの、立ち入らない事にしていたから……」
「折り紙と操り人形を作る事さ……。折り紙は日本人の特技……、そして育った街のニュルンベルクは人形で有名な街なんだ。毎年、操り人形の大会が開かれる」
「操り人形……」
「ほんとうは、いて欲しくないんだ、ニュルンベルクに……」
「えっ？」
「真吾さ。過去の思い出に浸るようになったら、あいつはおしまいだ。あいつは、過去という名の

操り糸を切った筈の男だからな……」
シュミットは、レミーにというより、自分に語りかけるように呟いた。

＊

その頃、真吾はニュルンベルクの安宿のベッドの上で目を醒ました。時刻は夕方の五時を過ぎていて、辺りはすでに暗かった。
そういえば、ここ一カ月、外の明るい、まともな時間に目醒めた事などなかった。
真吾の目に、得体の知れない何かが見え出していた。それはゴキブリのような昆虫の群れであり、襲いかかるコウモリの大群にも見えた。安宿とはいえ、清潔さが売り物のニュルンベルクのホテルの筈なのに……。真っ白なシーツに、ムカデのような虫が這いまわっている。
幻覚である事は分かっている。分かっているが、幻覚を消す方法はひとつしかない。
体中がザラついていて、喉が渇く。
頭の中は、砂鉄を詰められた皮袋のように、ザワザワとした切れ目のない音が鳴り続けている。
酒だ……、酒を飲むんだ。
真吾は、ベッドからヨロヨロと起き上がると、壁に取り付けられた簡素な洗面セットを見た。赤くどんよりした目、酒焼けし弛んだ皮膚、三週間も風呂はおろかシャワーすらも浴びていないために、無精髭が顔中を覆っている。
体中から発散するアルコールの臭いが、垢にまみれた体臭を辛うじて誤魔化していた。
真吾は、フラつく足で街へ出ると、中央広場にある小さな酒場に入った。

その店の窓から、広場正面の聖母教会が見えたが、この教会には人形の仕掛け時計が嵌め込まれていて、時間になると、国王に忠誠を誓う七人の家来の像が回りながら時を告げるのだ。
真吾は子供の頃から、その動きを見るのが好きだった。
真吾は窓際の席によろけるように座ると、ウェイトレスに焼きソーセージとシュナップスを一瓶頼んだ。シュナップスは、ドイツ製の焼酎で、ビールだけでは酔いきれぬ人が、小さなグラスについで一気に飲み干し、体を温めるアルコール度の強い酒だった。
だが、ビールも飲まずにシュナップスだけを、それも一瓶まるごと注文するような客は、真吾の他にはめったにいない。
じゃが芋太りした気の良さそうなウェイトレスはしかめっ面をしたが、真吾が投げ遣りに百マルクをテーブルに置くと、仕方ないといったふうにかぶりを振って、
「フィーレン、ダンク……（とっても、ありがとう）」
と大袈裟に言って、大ジョッキになみなみと注いだシュナップスを、テーブルの上に置いた。
……どうせ一瓶飲み干してしまうなら、グラスに注ごうと、ジョッキに注ごうと、同じでしょう……という皮肉がこめられていた。
店の誰もが、最近常連になったこの飲んだくれの客を、快く思っていなかった。
ビール天国のこの国には、酔っ払いは多い。酔うほどに、相手構わず肩を抱き合い、ジョッキを振って歌い出す陽気な酒だ。
だが、真吾は歌いもせず、話しかけても答えもせず、ただじっと窓の外を見つめていた。
酔客の歌声が湧き上がる。目一杯明るい酒場の中に、真吾のいる窓辺の席だけが暗く、ブラック

ホールのように異質だった。
真吾は、震える手でジョッキを持つと、呷るように飲んだ。ザラついた体内を、焼けた砂漠の砂を潤す雨水のようにアルコールが染み込んでいった。
真吾は、熱い息をホッと吐いた。
先刻までの幻覚は消え、心地良い酔いが体を包んでいる。
真吾は、自分がかなり重いアルコール中毒になっていて、このままこんな暮らしを続けていたら、やがて神経がボロボロに弾け飛んでしまう事を自覚していた。しかし、酒を止める気はなかった。
——なるようになるしかない……。誰の責任でもない。俺自身が選んだようなものだからな。
ドクーガを滅亡に追いやったあの戦い以来、俺には何もする事がなかった。
婚約者リリーを無差別テロで失い、自分も傷ついた時、俺は決意した。「一度死んだ命だ……、二度も死んでたまるか……」
それは無差別テロの黒幕、あまりに巨大なドクーガへの強靱な抵抗の決意でもあった。ドクーガに勝つ事は出来ないかもしれないが。生き抜いて反抗を続ける事が俺の存在の証になる——
真吾は、ぶつぶつと声にならない声で呟き、苦笑した。
——おいおい、真吾。何を偉そうな事を言ってんだ。酔うと人間、大袈裟な物の考え方をするものだが、どうやら俺もそうなっちまったみたいだぜ。まっ、どっちにしろ、今の俺はクズの酔っ払いだ。ドクーガとの戦いに、まさかとしか思えない勝利を掴み、それから……何もする事がなくなっちまった。
戦いの後、俺は何かを求めて世界中を彷徨った。ギャンブル、女、酒……どれもしっくりこなか

った。……所詮、俺は戦う事しか知らない男だったんだ。戦いのない今……、二度と死ぬ気はないが、生きていく手応えもない。……酒だ。酒は、わずらわしくなくて一番手頃だ。

アルーシャ？　そう、アルーシャという娘がいた。リリー以外に、ちょっとばかりいいムードになった唯一の女性だ。ドクーガとの戦いの中、南アメリカ・キンバリー鉱山で出会った村の娘……。ドクーガの滅亡した後、二週間ほど、彼女の村に滞在したっけ……。だが、土を耕す、地に足のついた農民達の生活には馴染めそうもなかったし、アルーシャは、自然の営みの中で、のびのびと生きてこそ美しい娘だった……。

俺は別れる事にした……。

俺はアルーシャに言った。「俺にはやはり忘れられない人がいる。今、この世にはいないけれど……。その人は、今も俺をどこからか動かしているんだ」……もちろん、リリーの事だが、その気持ちの半分は嘘ではなかった。

だが、後の半分の理由は、アルーシャの村が宗教上の理由で禁酒を掟にしているからかもしれなかった。

くだらん男だね。あの娘と別れた俺は、それでも未練断ちがたく泥酔して、シュトゥットガルトのホテルで……。

なぜ、あの街に行ったか？……。

シュトゥットガルト室内管弦楽団のバロック音楽のコンサートを聞きに行ったのさ……。俺の音楽の趣味は、日本の浪花節だけじゃないんだ。

それに、この街は、リリーの墓のあるミュンヘンにも近い……。

話が脱線している？

ああ……、酔いが回ってきたようだな。

なんの話だっけ。そう、シュトゥットガルトのホテルのバスルームで、ぼんやりアルーシャを思い出していたんだ。そして、バスタブから足を踏み出した途端、石鹸に滑って、胸と足の骨を複雑骨折しちまった。

なんてこった……。

かつては、国連平和部隊の破壊工作員として、一、二を争ったこの俺が、風呂で転けて骨折入院……。

これが飲まずにいられるか……。俺は、病室の清掃員を買収して酒を買ってこさせ、毎日飲み続けた。俺がドクーガを滅したグッドサンダーの一員だからといって、病院の先生は大目にみてはくれなかった。先生は俺から酒を取り上げ、厳重な見張りをつけた。

「あなたは、地球の人々をドクーガから救った英雄の筈です。あなたの体は、あなただけのものではない。あなたを見つめる全ての人達のものです。アルコール中毒の英雄を、誰も望みはしないでしょう」

そのきつい一言で、俺は病院を脱け出した。そして、気が付いたら、この街の、この酒場で、シュナップスをたらふく飲んでいた。

薄汚れ、草臥れ果てた飲んだくれの日本人を、かの有名な北条真吾だと、気付く者がいないのが幸いだったんだ――

真吾は、ジョッキを呷り、飲んだ。気が付くとジョッキは空になっていた。
真吾は、ウェイトレスに手を挙げて合図をした。ウェイトレスは気付かぬふりをしている。
「しかとする気か……」
その時だった。
コツン！
目の前のテーブルにシュナップスの瓶が置かれた。ジョッキに、シュナップスがコクコクと心地良い音をして注がれた。
「これでいいの？」
ぼんやりとジョッキを見つめる真吾に、懐かしい女の声が聞こえた。
シュナップスを注いだのは、レミーだった。レミーの横にシュミットが立っている。
「座っていいかしら」
真吾は、肩をすくめ了承した。
レミーは椅子に座ると、注ぎ残しのシュナップスを、自分のグラスとシュミットのグラスに注いだ。
レミーは、グラスのシュナップスを一気に飲んでから言った。
「元気？」
「元気、元気……」
真吾は顔も上げずに気怠く答えた。
「ケン太君が帰ってくるわ……」

「ケン太が？」
真吾は、ジョッキから目を離さなかった。
「新しい事、始まりそう」
「忘れたよ」
「そうみたいね。一カ月後に、サハラ砂漠で待っているわ」
真吾はレミーをまともに見ずに聞いた。
「誰が俺に命令出来るっていうんだ」
「命令じゃないわ。来る来ないは、あなたの気持ちに任せるって……、あのハゲが言ってたわ」
レミーは、椅子から立ち上がった。
パリの娼婦街で育ったレミーは、アルコール中毒の人間を見慣れていた。だから、今の真吾が、再起不能なほど酒に蝕まれているのがすぐ分かった。本人に酒を断つ気持ちがなければ、他人が何を言っても仕方のない事も、よく知っていた。
「役に立たない人は必要ないから、私、行くわ……、アデュー」
アデューは、二度と会えない人に言う、フランス語の〝さよなら〟だ。
シュミットは、レミーのあまりにそっけなく冷えた態度に驚いて、レミーの顔を見た。
レミーの頬は、涙で濡れていた。
レミーは、シュミットに、——どうしようもないのよ——といった微苦笑を見せ、くるりと背を向けた。
「シュミットさん、有難う。私、先を急ぐわ」

「俺は、もう少しこいつと……」
「坊やを頼むわ」
レミーは後ろを振り返らず、足早に酒場を出ていった。
シュミットは自分のグラスに注がれたシュナップスを、真吾のジョッキに入れた。
「おごりだ。飲めよ」
「ダンク（ありがとう）」
「飲んだら、この街から、いや、この国から出ていけ」
「………」
「俺の娘、いや、リリーの娘は、誰よりお前を誇りに思っている。あの子にお前の姿を見せたくない」
シュミットは、内ポケットから小切手帳を出して数字を書き込み、真吾の前に出した。
真吾は初めて、シュミットの顔をまともに見つめて言った。
「これは？……」
「昔、ドクーガから掠め取った一億ドルの半分だ」
「リリーの娘のために使う筈だろ」
「あの娘は俺の取り分で充分だ。今のお前に、あの娘を育てる金を出す資格はない」
真吾はフッと笑った。
「リリーの娘からもお払い箱か……」
「国を出る前に、バーデンバーデンの温泉に行くといい。あすこには、アル中治療のいい病院があ

る」

真吾は小切手を見つめると、ゆっくりと呟いた。

「いやだといったら」

「殺す……」

シュミットはいきなり、ルガースタイルのレーザー銃を抜いた。

真吾の目に輝きが走った。真吾はテーブルをひっくり返すと、シュミットの腕に飛びつき、シュミットを背負い投げで投げた。

宙で一回転して着地し、体勢を立て直したシュミットに、真吾が銃をつきつけた。一瞬のうちに真吾は、シュミットから銃を捥ぎ取ったのだ。

真吾の中で腐りかけていた戦闘への動物的な勘が、シュミットに銃を突きつけられた瞬間に無意識に蘇ったのだ。

シュミットはニヤリと笑って言った。

「撃つな。銃身が震えている。狙いが外れるぞ」

真吾は手に持った銃を見た。

確かに銃身が小刻みに揺れている。

「相当なもんだな、俺のアル中も……」

真吾は、銃をシュミットに投げ返すと、ジョッキのシュナップスを一気に飲み干した。

「一カ月後にサハラ砂漠って言っていたな」

「ああ。これがレミーさんから預かった地図だ」

シュミットは紙きれを出した。
真吾は、紙きれを摘んで言った。
「リリーの娘は……」
「俺が責任を持つと言った筈だ」
「そうだったな」
「これを持ってけ」
シュミットは、先刻の銃を真吾に渡した。
「いらん。その銃はお前の癖が染み付いている。俺が撃つと三百メートル先で、三センチ右十度にずれる」
「使いものにならんか?」
「俺にはな……。アウフ、ビーダーゼン、さよなら」
真吾は背筋を張って酒場を出ていった。そして、出口の階段につまずいて、頭からひっくり返った。しかし、受け身がしっかりしていて今度は骨折しなかった。
真吾はヨロヨロと立ち上がると、窓辺で自分をみつめているシュミットにかぶりを振って呟いた。
「アウフ、ビーダーゼン……、もう一度」

*

真吾は、その日のうちに、ドイツ西南部のシュヴァルツヴァルト(黒い森)という樅の木の大森林地帯にある温泉地、バーデンバーデンに姿を現した。

＊

彼は二度と酒を口にせず、温泉につかっては森の中を駆け回り、弛緩した体を元に戻そうとした。一日十時間のハード・トレーニングで筋肉をいじめつけたが、一年間で弛みきった体は、元に戻りそうになかった。彼はトレーニングの時間を、さらに六時間増やし、普通の人間ならズタズタに壊れてしまうような気違いじみた訓練を、意地だけで耐え続けた。

「やるだけやって、ダメならそれまでさ……」

その言葉だけを呟き続けていた。

# 第四章

# ブンドルへの招待状

日本海
富山市
富山県
石川県
福井県
岐阜県
愛知県
伊勢湾
岐阜市
白馬岳
入ったら
あかん
長野市
飛驒山脈
槍ヶ岳
穂高岳
中部山岳
国立公園
松本市
乗鞍岳
立入禁止
のむぎとうげ
長野県
飛驒木曽川
国定公園
御岳山
ぶっぽーそー
HONTO WA
KO NAKANAI
中央アルプス
県立公園
木曽山脈
木曽川

《レポートⅢ》

アメリカ合衆国における十二歳未満の少年少女の家出（もちろん迷子とは別である）は、年間五十万人を超えている。多くの原因は家庭環境にあるが、どうしても説明のつかない家出も多い。

家出した少年少女は幼いため、ほとんどが警察に保護されるが、家出の理由を尋ねても……、〃わかんない……、ただなんとなく〃……としか答えられない子供がいるものだ。

だが、この一カ月に起こった家出の中で、どうしても行方の分からぬ子供が十八人、その中でも特に不思議なのは、生まれてから一言も口をきかない重症の自閉症の子が八人もいた事である。しかも、そのうちの六人は、自閉症を治すため病院に入院していた子供達だった。

口をきかず、内へ内へと籠る自閉症の子が病院から脱走するなど、まず考えられない事だし、〃すわ誘拐か？〃と警察もＦＢＩも色めきたったが、犯人らしきものからの連絡は一切なく、誘拐だとしても営利とは係わりはなさそうだった。また、行方不明の子供達の間にも、相互に何の係わりもなかった。

そして、この種の家出は世界各地で、ここ一カ月、頻繁に起こっていたのだが、ありふれた原因の家出や、事故で行方不明になる子供の数はあまりに多く、その内の僅かな数の子供達が持つ共通性に気付く者はいなかった。

その子供達は、人間以外の者と心を通わす事が出来たのだ。

ビムラー第三段階の時のケン太と同じように……。

日本・飛騨山脈。

日本の中部、一般に北アルプスと呼ばれ、富山、新潟、長野、岐阜の四県に跨る三千メートル級の山峰が、ほぼ南北に連なる山脈で、日本でもっとも雄大な景観を持つといわれ、中部山岳国立公園に指定されている人跡未踏の秘境である。

人口過密で商工業ばかりが発達した文化鍋国家日本に、人跡未踏の秘境などありえないという人もいる。

確かに二十一世紀初頭には、その言葉は正しかった。飛騨山脈は、山のように押しよせる観光客に踏みにじられ、自然公園と呼ぶのすら恥ずかしいほど、荒れ果てていた。

だが、自然保護の名目で中部山岳国立公園が立ち入り禁止地区に指定された今、飛騨山脈は、人為的に作られた人跡未踏の地になった。

自然保護のもっとも遅れた国、日本で、政府がこのような処置を取るのは奇跡とさえ思えるが、どうやら政府に対し、政治的・経済的圧力を加えた陰の人物がいた、というのが事実のようである。

政財界の大物達にとって、この黒幕の存在は公然の秘密だったが、名前は決して表面には出なかった。飛騨山中に住むと噂されるこの人物を、政治家達は飛騨の文様、または若様にもじって、飛騨の分様と呼んだ。

＊

レミーの声に驚いた乗客やスチュワーデスが、レミーの方を見ている。
ここは、東京行きのSST（超音速旅客機）の客席である。
レミーは、悲鳴に近い声をあげた。
「ブンドルを仲間にィ!?」
「あは……」
レミーは慌てて愛想笑いをすると、小声で通信用の腕時計テレビに話しかけた。
「ブンドルって、あのブンドル？」
「他にブンドルがいるか？」
レミーのイヤーパッドの中で、サバラスの声がした。
「約一名、他にもおかしいのがいたけれど……ま、それはいいとして……、隊長、あのアニさん、私達の敵ですよ」
「そして、君の恋人を殺した男だという事も知っている……」
「その私に、あいつの所へ、仲間になって下さいって頼みに行けっていうんですか？」
「いやかね？」
「別に……、仕事だもん、たとえギャラがなしでも……受けた仕事はひき受けるわ」
「ギャラなしだけ余計だが……、ファイターとして君はいい性格をしている」
「ただ……」

「ただ？」
「このサディストのハゲ！　神経疑っちゃうわ。毛がなくなると女の子に対するデリカシーもなくなっちゃうの？」
「それは髪のない者への偏見だ。今後、そのハゲという髪のない人への俗称は、差別用語としてチェックさせてもらう」
「テレビ放送じゃあるまいし、言葉ぐらいのびのび使わせてよ……」
「その議論は別の機会にしよう。通信費は、できるだけ節約せねばな。ともかく、キリーと真吾があてにならぬ以上、背に腹は替えられない。すでに我々の地球上における敵対関係は終わった。君とあの男の個人的な感情は別としてね」
「こだわりたいけれどなあ……、わ、た、し……」
「こだわるのは勝手だが、わたしの目的は作戦を成功させることだ」
「その作戦の内容も知らずにブンドルが参加すると思う？」
「たったひとつエサがあればよい」
「エサ？」
「あの男が言うところの美しい女豹だ」
「あ！　あ……あ……、なんちゅう事を……。わしゃ、なんたる連中と付き合ってきたんだ！　グッドサンダーの連中って、OVA（オーバ）と私を除いては、欠陥異常集団もいいとこ。よく、ま、ドクーガに勝てたもんよね」
「ともかく、最近のブンドルの趣味の傾向から見ると、あの男が日本にいる可能性は強い」

「狭い日本も、女一人じゃ広すぎるわ。どうやって探すの？」
「待つんだ。新聞に連絡が欲しいという広告を出した。日本にいれば、向こうから現れるだろう」
「新聞の求人欄や尋ね人のとこなんか、あの兄ィが読むかしら。いっそ『アルバイトニュース』にでもだしたら？　あの人なら『とらばーゆ』なら読むかも」
「読むさ、あの男が日本にいればな」
「あてになんない話ね……」
と、肩をすくめたレミーだが、ふと斜めの前の席の男が読んでいる新聞を見て……。
「あ～っ！　ハゲ親父！　よくも……！」
男の読んでいる新聞の半面が一つの広告で占められていた。それはブランデーの広告だった。
そのコピーは、
〃待つわ、
あなたの胸を、血のバラの色に染める日まで
レミー・マルタン・レオポード、新発売！〃
おまけに、ブンドル風のマントの男が、テーブルをはさんで、豹と向かい合って座っている写真が載っていた。ご丁寧に豹はバラをくわえている。
「見たかね。あの広告を……日本の全国紙に三日続けて載せた。東京で連絡を待て……。では……」
「待って！　あの下手なコピー、隊長が考えたの？」

「メインコンピューターのファザーだ……。では……」
　プツンとサバラスの声が消えた。
　レミーはガックリと肩を落とした。
「揃いも揃って……どうしようもない連中……。だいたい、どうして、私がブンドルなのよ。みんな、週刊誌の読みすぎなんじゃないのかしら……。そりゃ、恋人を殺された女と殺した男が愛し合いでもすりゃ、三流メロドラマとしちゃ面白いかもしれないけど……。
　そもそも、あの男がいけないのよ。そりゃ、私だって美しいって言われりゃ、悪い気はしないけれど、あの人にじゃあね。だって人並みじゃないんだもん。他の女の子にはもてるかもしれないけど、私はお断り……。
　でも、ホント、マスコミは怖いわ。……人それぞれ、愛の形はある……。で、私とブンドルだけ、な〜んもないもんだから、勝手にくっつけちゃって……。ほんとに、断じて、ブンドルと私には何にもないんですからね。……誰があんな異常美愛好変質者を！……」
「あの、お客様、電報が……」
「えっ？」
　スチュワーデスが、レミーに電文用紙を渡した。
〝成田空港通関前ニ　免税ショップデ　レミーノ　レオポードヲ　カイタマエ〟
　そして、スチュワーデスはレミーにコニャックの入ったブランデーグラスと、バラの花を一輪差し出した。

「電報の送り主の方からです」
――さっそく、ブンドルのお迎えか――
「サンクス。おいくらかしら」
「送り主の方がお支払い済みです」
「そのお金は先方に送り返して……。バラとブランデーのお金は、私が払います……」
レミーは、ブランデーを見つめた。
――フフン。どうせ、カミュのエクストラか、いいとこバカラ……、誰が飲んでやるもんですか――
それでも、なんとなく香りをかぐと……。
「あらら……」
それは、マテルのスリースターで、ブランデーとしては普及品、パリの場末のビストロでも飲める酒だった。レミーは、なんとなく懐かしくも、もったいない感じがして……。
クイッ！　と、ブランデーらしくない飲み方で飲み干した。
「ウン、いける。……あの男らしいわね」
もとはといえば、高価な酒より、この手の普及品の方がレミーの舌には似合っていたのだ。
それを見抜いてのブンドルからの贈り物だった。

＊

定刻通り、日本の成田空港に着陸した超高速旅客機から降りたレミーは、空港ビルの免税ショッ

プへまっすぐ向かった。
　新製品のレミー・マルタンのレオポードを売っているカウンターは、まだ一カ所しかなかった。
「レミー・マルタンのレオポードを……」
　レミーは、カウンターの店員に言った。
　整ったヒゲをはやし、まるでイギリス貴族の執事といった感じの店員はじっとレミーを見つめると……。
「確かにあなたには、御主人様の胸を血のバラの色に染めるトゲがありそうですな。御主人様になんの御用が……」
「今日の私は、あなたの主人にトゲを見せる気はないわ、残念だけど……」
「分かりました。通関せずに裏口から滑走路に出て下さい。ブンドル様の専用機がお待ちです。空港の外には、あなたを狙っている者がおりますので……」
「狙っている？　誰が……」
　店員は、ボーガンの矢を見せた。
「!!」
　それは、レミーがブンドルの弟、カインのジェットヘリを撃ち落とした、あの矢だった。
「あの人、生きているの？」
「ブンドル様が墜落現場に着いた時、誰の遺体もありませんでした」
「人が死んでないというのは、悪い事じゃないわ。で、その矢は？」
「ブンドル様がお持ち帰りになりました。あなたにこれをお返ししたいそうです」

「ご丁寧に……。だけど、この矢を持っている以上、あなた、カインさんの手先かもしれないでしょ」
「ええ。カイン様も、この矢を拾おうと思えば拾えたわけですからね」
「そういう事」
「私共がレミーさんにお売りするレミー・マルタンのレオボードをお見せします……。こちらへ……」
と、カウンターの奥のドアを指した。
「用心のため、銃を抜いてもいいかしら」
「どうぞ……。でも、ハイジャック防止のため、武器はチェックされている筈でしょ。飛行機から降りたばかりのあなたが、どうして銃なんかお持ちなんです？」
「お気づかい有難う。でも、もうあなたもご存知でしょう。私が昔、ＥＩＣのスパイをやっていたって事……。手品を見せましょうか？」
レミーは左手の腕時計の上に手をのせた。一瞬のうちに腕時計が消えた。
続いて胸のブローチの上へ……、そして肩にかけたショルダーバッグの金具の上へ手をやると、ブローチや金具が消え、レミーの手の中にデリンジャー型の小型レーザー銃が握られていた。
店員が口笛を吹いて言った。
「お見事……。ただし、そんなに手品の種を見せてしまってよろしいんですか？」
「いくつもあるもの……。女の体って隠せる所が一杯あるでしょ」
「ごもっとも……。では、こちらへ」

店員は、後ろのドアを開けた。
「これが、あなたにお買いいただくレミー・マルタンのレオポードです」
店員の指さした壁を見たレミーの顔に、複雑な微笑がもれた。
壁には小さな絵がかかっていた。それは、女の横顔を描いた、画家フランシス・ルグランの最高傑作だった。もちろん、ブンドルのモデルはレミーだ。
そしてそれは、ブンドルのもっとも愛する絵画のひとつだった。
「『恋する女・作品29』ね……」
「ええ。あなたには、その絵が偽物でない事と、誰の所有になる絵か、お分かりの筈です」
「ええ。あなたを信じるわ」
レミーは手に持った銃を、一瞬のうちに、腕時計とブローチとバッグの金具に分解し、もとの位置に戻した。

*

レミーを乗せ、成田から飛び発ったブンドルの専用垂直離着陸機は、飛騨山脈の上空へ来た。
人間さえいなければ、自然の回復力は早い。かつては、観光客のゴミの山脈も、緑の山脈に戻っていた。
免税ショップの店員は、垂直離着陸機を操縦しながら、レミーに苦笑し言った。
「もっとも、御主人様が植林やら、河川浄化やら、かなり手を加えましたがね。さ、これを……」
店員は、パラシュートをレミーに渡した。

「どうするの、こんなの」
「あそこに岩場が見えるでしょう。横十メートル、縦七メートルの平らな岩場です。あそこへ、これで飛び降りて下さい」
　針の穴のように小さく見えるそれは、確かに平らな岩場だった。ただ問題なのは、前方が垂直に落ちこむ崖であり、後方は密生した杉の森だった事だった。
「飛び降りる？　あそこへ？」
「はい。元ＥＩＣの優秀な情報部員のレミーさんです。スカイダイビングはお得意の筈……。ま、よほどの失敗がない限り、死ぬこともないでしょう」
「だけど、これ、垂直離着陸できるんでしょ。どこかに降りられないの？」
「性能的には可能です。しかし、あの方は、機体の排気ガスで樹木が枯れるのを快く思っておりません。この地区はどんな乗り物も、立ち入りは禁止されています。
　飛び降りるのがおいやでしたら、自然公園の入口からここまで、お歩きになるよりありません。人間の足で、五日はかかりますがね」
　レミーは溜息をつき、パラシュートを背負った。
「それにしてもよ、ダイビング用の服はないのかしら。スカートのままじゃあね」
「いけませんか」
「だって、ほら、スカートじゃ……。分かるでしょ」
「このあたりに住んでいるのは、野鳥とけものだけです。レミーさんのアンダーウェアを見ても、誰も喜びはしません」

レミーは肩をすくめた。
「OK……。やるしかないわけか……。じゃ、ブンドルに手渡す、例の絵をちょうだい……」
「とんでもございません」
「どうして？　レミーのレオポード……、私の絵を持っていく約束でしょ」
「あの絵は、私が責任を持ってお届けします。あなたが着地に失敗でもして絵に傷がついたら、ブンドル様に申しひらきのしようもございません」
「!!……、あ……、そういうこと。私より絵の方が大事ってわけ」
「人の命はお金で換算できません。しかし、あの絵はちゃんと一千万フランという値段がございます」
レミーはあきれて呟いた。
「大事にしてね、私より値の張る私の絵を」
「当然でございます」
レミーは、かぶりをふりながら、
「あなたと、も一度会いたいとは思わないけど……。ともかく、いちおうシー・ユー・アゲイン……」
そう言い残して、レミーは垂直離着陸機から青空に身を投げだした。
次の瞬間――。
ズン！
レミーの体は熱風にあおられて、宙を舞った。今さっきまで乗っていた機体の一部が爆発したの

だ。
両手両足を思いきり広げ、空気抵抗をふやし、体勢をたてなおしたレミーが見上げると、炎上する機体から、パラシュートもつけずに飛び降りる店員の姿が見えた。
――いったい何が起こったの?――
レミーの視界の片隅に、ジェットヘリの機体が見えた。見憶えのある機体……、そう、レミーがアフリカの月の山で撃ち落としたカインのジェットヘリと同型だった。
――カインの攻撃――
思わず唇をかみしめたレミーの目の前を、店員が悲鳴をあげて落ちていく。レミーは両手両足を閉じると、まっしぐらに店員に向かって落下していった。店員に追いつくと、足にしがみつくように手で合図した。店員は両手で何かをしっかり抱いて、かぶりを振った。
「あん?」
見ると、店員が抱きしめているのは、レミーを描いた絵「恋する女・作品29」だった。
レミーに呆れている暇はない。もうすぐ二人とも地面に激突だ。
レミーは、店員の体を後ろからはがいじめにするように抱きしめると、着地点の岩場を見定めた。店員の身長から見ると、この男、体重は七十キロはある。レミー一人の時に比べ二倍半の重さはあるだろう。パラシュートがもつだろうか? 落下速度は……、レミーの頭の中を目まぐるしく空気力学の計算が駆け回った。いつもはメカ音痴のレミーも、こういう時だけはスパイ学校の授業を思い出すから不思議だ。
「今だわ!」

レミーは、パラシュートのリップコードを引いた。
ガクン！　落下スピードが遅くなる。
レミーはフーッと息を吐いた。――大丈夫、これなら無事着地できるわ。……この男、着地の受身が下手だと、骨の二、三本折るかもしれないけど、死ぬよりましよね――そこまで思って、レミーは悲鳴に近い声をあげた。
――落下速度が遅すぎる。このままじゃ、岩場を通り過ぎて崖から落ちてしまう！――意外に店員の体重が軽かったのだ。
――このう！……少しはましなもん食べて、標準体重ぐらい保ってろ――
その時だった。頭上で光線がはじけた。カインのジェットヘリがレーザーを発射したのだ。レーザーは、パラシュートに穴をあけ……落下速度が早まったと思ったとたん、レミーと店員は、岩場に叩きつけられるように着地していた。素早くパラシュートをはずしたレミーは、うつろな眼で座り込んでいる店員の肩を叩いた。
「急がないと、蜂の巣にされるわよ」
我にかえった店員がわめいた。
「絵は！　私、守らねばなりません。絵は！」
「しっかりあなたが抱いてるじゃない」
店員は、しげしげと抱きしめていた絵を見つめ、
「よかった……。一千万フランが……、一千万フランが……、私は……、私は守り抜いたんだ！」
オイオイと泣きはじめた。

レミーは、つきあいきれずに天をあおいだ。
カインのジェットヘリが、再度、攻撃態勢に入って突っ込んで来る。
レミーは、店員の首根っこをつかむと、林の中にころがり込んだ。
「乱暴はよして下さい。絵に傷がついたらどうします」
むか〜っ!!
レミーは、店員の顔面に拳骨をくらわした。
「よろしかったら、その絵を、わたしがぶち破りましょうか？　それがお嫌でしたらブンドルさんのところへ、すみやかに御案内いただけます？」
「そんな乱暴な……。これは、あなたを描いた絵なんですよ」
「断っときます。昔の私を書いた絵が何千万しようと、今の私にはクズだってこと」
頭上でレーザーがはじけ飛び、樹木のきれはしが次々に落ちてきた。
それでも店員は、絵をしっかり抱えて言った。
「これを守るのが私の使命です。ま、ともかく、御主人様のところへ御案内はいたしましょう」
二人はレーザーをかいくぐって、森の中を走りに走った。

*

雪どけの手の切れるような冷たい水が、ブンドルの肌を叩いていた。
ブンドルは、じっと眼を閉じて座禅し、滝に打たれている。この山にこもってもうそろそろ六日になっていた。東洋美学の極致が禅にあると、例のごとく独断と偏見で見極めたブンドルは、半年

に一度、一カ月間、こうやって飛騨山中に一人でこもって禅の真相を極めようとつとめていた。本来なら、一カ月ほどでさとりを開ける筈もないのだが、三カ月で宇宙美学論を極めたつもりのブンドルにとっては、十分すぎるほどの期間の筈だった。

「しかし、禅は難解だ。ここ二年間、のべにして四カ月もはげんでいるのに、いまだに、これはと思えるさとりにたどりつけぬ……。東洋美学の底は深い……」

正直な話、数年前、禅の世界を求めて日本を訪れたブンドルは、近代化、いや俗化を極めた日本の姿に失望したものだった。いったい、今の日本のどこに、わび、さび、枯淡の境地があるというのか。だが、ある日、ブンドルは、世界でもっとも短い文学形式といわれる日本の俳句の中に、身のふるえんばかりの感動の句を発見した。

「やせがえる負けるな一茶ここにあり」

――やせがえるは私だ……。一茶も私だ――

確かに今の日本は、過去の日本の心を失っている。が、私は、その日本の心に感動できる心を持っている。私こそ日本の心、禅を継承できる人間なのだ……。ここいらの論理の展開は常人には測りしれぬが、ともかくブンドルは、日本の中世に、行者達が修行のためにこもったという飛騨山中を、昔の空気に戻すため、日本政府に圧力をかけ、立ち入り禁止にし、自らの修行の場としたのだ。

ブンドルの完璧主義は食生活にもおよび、それぞれ別の釜で炊いたササニシキとコシヒカリと玄米をブレンドし、梅干とタクアンだけで食べ続け、栄養失調で倒れたり、そのくせ日本人の習慣である晩酌を毎日かかさず、日本古来のドブロクという白くにごった酒を、赤ん坊がミルクを飲む

ように毎晩飲み続けた。こうまでして、さとりが開けぬのはおかしいと首をひねるのが、ブンドルの今日このごろだった。
「さて、そろそろ客人のみえる頃、夕餉の仕度をするとするか」
ブンドルは滝から出ると、さらしの着物を着、西陣の帯をしめ、無銘だが東京国立博物館の奥深く秘蔵されていた、宮本武蔵が愛用し、後に幕末の新選組、沖田総司の手に渡ったという大刀を腰につけた。(注)このような刀が存在したという歴史的証明はまるでない)
ブンドルは、身を打っていた滝が、さらに大きく激流に変わり、崖下に流れ落ちる崖っぷちに腰をおろすと、ザルに入れた米をとぎはじめた。
ブンドルは呪文のように日本語をとなえた。
「はじめ、ちょろちょろ、なかぱっぱ……」
と、その時、背後に人の気配を感じ、刀のつかに手をやった。そして静かに言った。
「人の後ろに立つ時は気をつけるがよい。ふりむきざまに、私に斬られても文句を言えぬぞ……」
「ブンドル様、レミーのレオポードをお届けに……」
振りむいたブンドルの前に、肩で息をしている店員と、ブンドルの格好にほとんどあきれかえってたたずむレミーが立っていた。
ブンドルは微笑した。
「レミー・島田、今日は本当の日本の味覚、ご飯を、最良の姿で賞味していただこうか」
「場合じゃないわ。それと、止めた方がいいわね。東洋の美学に退廃美は似合わないもの」
「手きびしいね」

「精一杯のやさしさを込めてるの、これでも……」
店員が、「恋する女・作品29」を持って叫んだ。
「そんな気取った挨拶よりも、私が命を賭けて守り通したこの絵を、どうぞ、どうぞ、お受け取り下さい」
店員がブンドルに駆けよろうとした、その時である。レーザーの光が、「恋する女・作品29」を撃ち抜いた。
「‼」
素早くデリンジャー型銃を組みたて振り向いたレミーの前に、林の中からレーザー銃を持ったカインとゴーホムがのそりと姿を現した。
ブンドルは眉一つ動かさずにカインを見すえた。
「ここは立ち入り禁止地区だ。出ていってもらいたいものだな」
「出ていくさ、お前達に礼をしたらな」
カインは、ブンドルの胸を狙って銃をかまえた。
「レオナルド、やっとお前をこの世から消せる」
「どうしてもやる気か」
「仕掛けたのはお前だ。お前のお陰で、私の作りあげた月の山の楽園は灰になってしまった」
「子供は、大人しく動物のぬいぐるみで遊んでいればよかったのだ。お前は、私の大切な人に手を出した。子供のすることではない」
レミーは、ふっとブンドルの顔を見た。

カインを見すえるブンドルの目には、弟への哀れみさえ見てとれた。
「黙れ！　その気取った口を二度ときけなくしてやる」
カインは引き金に指をかけた。
「おやめ下さい……」
店員が銃の前に立ちふさがった。
「カイン様、一千万フランの絵を灰にした上に、ブンドル様まで……。ブンドル様は打ち出の小槌……。宇宙美学論は百万部を突破……、もう少しで書きあがるPARTⅡも予約殺到……、PARTXまで出版が決定しております。それを殺すなど、もったいない真似はおよし下さい」
ブンドルはつぶやいた。
「なんというかばい方だ……。主人の恥と思わんのか」
だが、レミーは、いささかとんちんかんではあるが、この店員の必死さに心を動かされるものを感じていた。しかし、カインの残忍な目は、そんな店員をターゲットの障害物としか見ていなかった。引き金の指に力が入った。
レミーの体が衝動的に動き、店員に体当たりして、ほとばしり出るレーザー光線をよけさせた。そして、デリンジャー型銃をカインに向けて発射した。だがレーザー光線は、素早くカインの盾になったゴーホムの腹をえぐっただけだった。
「メス猫！」
カインがうなり声をあげ、銃を撃った。
レミーは肩を撃たれ、衝撃で後ろへふっ飛び、岩場に叩きつけられた。

弟カインを居合い抜きで一刀両断するブンドル

「レミー！」
ブンドルの声が気を失う寸前、レミーに聞こえたような気がした。
レミーを撃った銃をブンドルに向けようとしたカインは、目を疑った。
一瞬のうちに、ブンドルはカインの鼻先に立っていたのだ。
引き金を引く暇もなかった。
「バカ者！」
ブンドルの怒りの叫びが、カインがこの世で聞いた最後の声だった。カインの体は、ブンドルの居合い抜きで、わき腹から胸へかけて真っ二つになっていた。
ブンドルは刀を捨て、レミーに駆け寄り、抱きあげた。
「ブンドル様、後ろを！」
「ウガ〜ッ！」
腹をおさえながらも、主人を殺され逆上したゴーホムが、体当たりをしてきたのだ。
「おろかなけものめ……」
ゴーホムの体がブンドルに触れた瞬間、空気投げとも言っていい背負い投げで、ゴーホムの体は宙に飛んだ。ゴーホムの体は崖から飛びだし、そのまま落ちていった。
落ちながらも、ゴーホムの頭の中には、
「レミーを追え、殺してもかまわん！」
というカインの命令が、繰り返し聞こえ続けていた。

＊

レミーが目を開くと、目の前に竜の絵があった。それが、白いふとんに寝かされているレミーが見上げる天井だと気づいた時、レミーは再び睡魔に襲われ、眠りに入った。

＊

次に目を醒ました時、その部屋が畳敷きの日本間である事に気がついた。そして、障子の向こうに、じっと座って動かない男の影があった。レミーの肩ににぶい痛みがあったが、それより麻酔をかけられているのだろう、眠気の方が強かった。レミーは眠り続けた。

＊

気がつくと夜だった。月の光が、障子にじっと動かず座っている男の影を写していた。肩の痛みは消えていた。麻酔のけだるさがレミーを眠りの底へ落とした。

＊

あれから何日たったのだろう。ふとんの中で肩に触れたレミーは、傷があとかたもなく治っているのに気づいた。そして、着ている事を感じないほど軽い、絹の浴衣に身を包んでいた。

レミーは、ふとんから起き、障子を開けた。

そこに、いつも感じていた男の気配……。しかし、今は誰もいなかった。

レミーは人けのない廊下を、おぼつかない足どりで歩いていった。足が歩くことに慣れていない。

――随分長い間、横になっていたんだわ――

建物の様子を見ると、どうやら日本の中世に建てられた禅寺のようだった。

「お気付きになりましたね」

振り返ると、袈裟を着た坊主姿の店員が立っていた。

「その格好ではカゼをひきます。これをどうぞ」

店員が、綿の入った着物をレミーに渡した。

「どてらという日本の防寒服です」

「ブンドルさんは？」

「五日間、あなたにつきっきりで看病していましたが……、今はお墓に参っております」

「つきっきりで看病……」

「はい。それも、あなたには指一本触れず、お部屋の外の廊下に昼も夜も正座して……、あっ、これブンドル様には内緒にしておいて下さい。あなたに言ってはならぬと固く口止めされておりますので……」

「………」

レミーは、障子に写っていた男の影を思い浮かべ、フッとため息ともつかぬ息をもらした。

*

店員は、レミーを寺の裏庭にある墓地に案内した。

ブンドルは真新しい卒塔婆の前にたたずみ、じっと物思いにふけっていた。
カインとブンドルは腹違いの兄弟だった。
ブンドル家は、ヨーロッパの名門、メディチ家の分家の一つだが、病弱な母はブンドルを生んだあと産後の日肥ちが悪く、死んだ。一年もたたぬうちに、父と後妻との間にカインが生まれた。
——一年もたたぬうちとは、どういう事だ——
物心がつくと、ブンドルは言い知れぬ怒りを、父と後妻、そしてカインに感じはじめていた。ブンドルの日常は、まったく愛情というものに恵まれなかった。
カインとブンドルは、ブンドル家の後継のライバルとして、絶えず比較され続けた。だがブンドルは、ブンドル家になんの未練もなかった。ヨーロッパで一、二を争う裕福な家柄は、自らを研くための金銭的な都合よさしか、ブンドルにとって存在価値はなかった。
ブンドルは、いつか家を捨て自分の力で生きていく日を夢みて文武両道にはげんだ。
しかし、周囲は、そんなブンドルの気持ちも知らず焦りだしていた。ブンドルは、ありとあらゆる面でカインより優秀だった。
ブンドル家の後継は、ブンドル家の一存では決められず、メディチ家全体の合議によって決められる。誰の目にも、カインよりブンドルの方が後継としてふさわしいと見えた。
カインは、焦りと苛立ちの中で、いつしかブンドルを憎悪の対象にしていた。ブンドルがブンドル家後継を辞退した後も、その気持ちは変わらなかった。特に、ブンドルが自力でのしあがり、ヨーロッパの政財界を牛耳るようになると、憎悪はふくれあがるばかりだった。ブンドルに風変わりな美学があると知れば、カインも無理矢理こじつけた美学を考えだし、その完成のためにブンドル

家の財産を乱費した。その結果、ブンドル家は破産……。カインはそれすら、ブンドルの仕業だと思い込み、逆うらみを続けてきたのだった。
ブンドルは、まるでカインを相手にしていなかった。ブンドル家を捨てた後、カインが何をしようと無視しつづけた。そして、その無視が、なおのことカインの異常なまでの憎悪をかきたてたのだ。そしてレミーという女性の存在を知った時、レミーの剝製を作ってブンドルに送るという偏執的復讐を考えたのだった。
「お前と私との戦いは、ブンドル家に生まれた時に決められた宿命だったのかもしれぬ……」
「生物美保存愛好院全部分取居士」と戒名の書かれた卒塔婆に水をかけながら、ブンドルは呟いた。
「しかし、兄と弟には変わりはない。今度は私が旧約聖書にでる兄弟殺しのカインになってしまった。重い物を背負わせてくれて、カイン、お前の憎しみは私に通じたようだな」
「ブンドル局長……」
背後からレミーが声をかけた。
「局長はやめてくれ。ドクーガはもはや存在しない。わたしはただのレオナルド・メディチ・ブンドルだ」
「ブンドル……さん……。あの……、お礼をいわなきゃ……。傷を治してくれて……、サンクス」
「いや、私の弟のした事だ。すまないと思っている」
「あの……、私の来た用事だけど……」
「サバラスの手紙、悪いが読ませていただいた。お金が必要ならばオールワールドバンクの私の口

座から好きなだけおろすがよい。技術的な協力なら、あまりあてにはならぬが、月面のジッター研究所を使ってくれ」
「お金や技術ではなく……」
「私自身か？」
「ええ……」
「私は今、喪に服す身だ。それに私は孤独を愛する。他なる思考の持ち主と行動を共にするのは好まぬ。分かってくれるね」
「……なんとなく。……でも、あなたと一緒に戦ったケルナグールやカットナルは特別だと思うけど……」
「あれは最悪だった。だが、ミス・レミー・島田、人それぞれ生き方が違う。違う者が共に生きれば多かれ少なかれ無理が生じる」
「……そうかもね。……さよなら、ミスター・ブンドル……。色々とあったけど……」
ブンドルとレミーの目が合った。
レミーはクルリときびすをかえすと、ブンドルに背を向けて歩きだした。
「エンドマークはさりげなく……」
ブンドルの呟くような声が聞こえた。
「さらば、わたしの赤いバラ……」
レミーは振り向かず、耳もとに手を持っていき二、三度ヒラヒラさせて、後ろ向きのさよならを送った。

＊

レミーはカインが乗って来たジェットヘリで、飛騨山脈を後にした。
雲の向こうに消えていくジェットヘリを見つめて、店員がブンドルに聞いた。
「いいのですか？　ケン太という少年が戻ってくるんでしょ。その少年は、ブンドル様の宇宙美学論の中核をなすものの筈ですが……」
ブンドルは苦笑した。
「私は見栄っ張りなのだよ」

＊

ジェットヘリの操縦桿を握りながらレミーは鼻をかんだ。レミーが世界中を駆け回って得た仲間は、結局イザベル一人だった。
キリーも、真吾も、そしてブンドルも……。
「どいつもこいつも……」
レミーはまた鼻をかんだ。
レミーの目から涙が流れ続けていた。
レミーは、涙をふこうとティッシュを出したが——。
——ヘリの中には誰もいない。いいや、泣いちゃえ——
レミーは、ワーワー泣き出した。

これなら、ヘリが成田空港に着くころには、涙もかれはてるだろう。
レミーは、泣いて泣いて泣きまくった。

＊

ブンドルは、レミーと別れたその日から七日間、滝に打たれ、座禅を続けた。そして断食し、水以外何もとらなかった。
七日後、ブンドルはカインの卒塔婆に語りかけた。
「カイン、悪いが、私は後ろを見続けるのは止めにするよ。私には私が極めねばならぬ美学がある」
ブンドルは卒塔婆に深々と頭を下げ、五日間の道のりを二日で駆け抜け、飛騨山脈を出た。

# 第五章

# 大統領と保育園園長、そしてセールスマンの場合は……

大西洋
新大陸へ
ニューカッスル
北海
リバプール
マンチェスター
ハンバー川
カナダ
モントリオール
オタワ
バーミンガム
テムズ川
ケンブリッジ
オンタリオ湖
ロンドン
オックスフォード
ボストン
ピッツバーグ
ブリストル
ニューヨーク
フィラデルフィア
ワシントン
大西洋
アメリカ
E.T.
大西洋
ベネズエラ
パナマ
コロンビア
アマゾン川
ブラジル
ジャクソンビル
サルバドル
ブラジリア
サンパウロ
マイアミ
リオデジャネイロ
大平洋

《レポートⅣ》

また子供が消えた。だが、今回のケースは、明らかに異様だった。

場所は、デンマークのコペンハーゲンの総合病院……。その少女は、世界で一人しか生存していない病人だった。無菌症……、体に雑菌への抵抗力がなく、無菌状態のプラスチックケースの中でしか生きていられない子供だった。人命は尊いとはいえ、プラスチックケースから一歩も出られず、人と触れ合う事もできない一生は残酷とさえいえた。

その少女の姿が、プラスチックケースの中から消えたのだ。厳重に管理されている病院から抜け出す事は不可能だし、第一、外気に触れたら三十分と生きていられない体なのだ。だが、病院の中にも病院の外にも、少女の姿はなかった。やがて、少女の愛用していたラジオカセットの中に、少女のメッセージを録音したテープが発見された。

「みなさん、長い間、お世話になりました。ありがとうございました。わたしは、これから新しい生き方を目指して飛びます。お元気で……。さようなら……」

このテープによると、どうやら少女は自分の意志でプラスチックケースから抜け出したようだった。

しかし、どこに消えたのか、誰にも分からなかった。

病院の医師達は、少女の隠された能力を知らなかった。少女は自分の体を瞬間移動させる力を持っていたのだ。だが、今までは、どこに瞬間移動しても、外気に触れれば死んでしまう。少女は自分の力を使いたくても使えなかった。病院以外に無菌状態のプラスチックケースがあるのを知るまでは……。そして今、少女は、別のプラスチックケースの中にいた。

グッドサンダーという巨大な船の中に、この少女のために作られたプラスチックケースがあったのだ。

ワシントンＤＣ。

いうまでもなく、アメリカ合衆国の首都で、白亜のホワイトハウスの中で決定された様々な政策は、二十世紀以降の世界の動きを確実に左右してきた。歴代のアメリカ大統領には、暗殺された者、再選を策して対立政党の党本部に盗聴装置を仕掛けようとして失敗し、その責任をとって辞任した者も含めて、概ね、アメリカ国民は強い信頼の念を寄せている。だが、現大統領、スグーニ・カットナルに関しては、史上最低の大統領という評価がすでに下されたといっていい。

カットナル大統領が、ここ数カ月行った目新しい事といえば、アメリカの国歌を「双頭のカラスの下に」という新曲に変え、国鳥を白頭鷲からカラスに変更して顰蹙をかった事と、自らが経営する製薬会社の精神安定剤〝カットナライザー〟を国民に無料配布した事である。

精神の安定のためにアルコールや麻薬、ＬＳＤなどに依存していた中毒患者達の数は、副作用のない〝カットナライザー〟のおかげで僅かに減る傾向にあったが、ベトナム戦争以後から始まった不景気は一向回復を見せず、町には失業者が溢れ、希望と開拓精神に満ちたアメリカンドリームは、もはや伝説の中に生きるお伽噺でしかなかった。山積みする諸問題に、大統領の憂鬱は日増しに大きくなる一方だった。

そして、不幸にもネバダ砂漠で核兵器が完成して以来、数多くのＳＦ小説や映画が警告していた地球最悪の事態が、この史上最低の大統領の任期中に起こってしまったのだ。

＊

ホワイトハウスの地下一千メートルの核シェルターの中、大統領戦略指令室でカットナルは、ソ連のクレムリンとの直通テレビ電話で、ソ連邦最高会議幹部会議長ドブドロポフを相手に、口から泡を飛ばして激論していた。

激論するよりは、本来ならカットナルが謝罪しなければならないのである。なぜなら、五分前、アメリカの空軍基地の司令官の中の約一名が発狂し、モスクワへ向け、核ミサイルを発射してしまったのだ。そのミサイルは、ケン太が世界中の核兵器を武装解除した以後に製造された物で、レーダーでは感知できない「ステルス」技術の粋をつくした『見えない巡航ミサイル』だった。発射された以上、もう誰も止める事も撃ち落とす事も出来ない。二十分後には確実にモスクワを灰にしてしまうだろう。

「この気狂いのガチャ目の薄汚い、どあほうガラス野郎！　どう落とし前付けてくれるんじゃ！」

頭から湯気をたてて怒鳴り散らすドブドロポフのロシア語をコンピューターが英語に通訳してくれた。

「この、差別用語の禁止用語の薄汚い差別用語のカラスさん。どのように解決をつけるおつもりですか」

コンピューターは、カットナルを刺激しないよう差別用語をチェックして訳していた。

しかし、悪口で使われる差別用語など、どこの国でも同じようなものだ。カットナルはコンピューター通訳の差別用語の部分に、勝手に自分で言葉をあてはめてカッカしていた。

「この病気持ちの、マザコンの、薄汚いインポガラス野郎……と言ってるに違いないな」
カットナルは、髪の毛を逆立てて答えた。
「じゃかあしい。女狂いのタコじじい。飛んでいったものは知るか。てめえのケツの穴にでもぶっ刺さりゃいいんだ。この白熊野郎、くそくらえ！」
どうせ、あっちの通訳コンピューターも、
「お静かに。差別用語の禁止用語のお年寄り。飛んでいったものは止めようがございません。あなたの禁止用語に落ちたら、どうしたらいいのでしょう。差別用語さん、禁止用語！」
とでも訳すだろう。
傍らに控えていた副大統領が、さすがにハラハラして言った。
「大統領、落ち着いて下さい。このままでは、戦争が始まってしまいます。あなた次第で地球は滅亡してしまうんですよ」
「ググ……」
──なんてこった。念願のアメリカ大統領になれたってのに、ろくな事がありゃしない。なんでこの俺が、狂った司令官の尻ぬぐいをしなけりゃならないんだ……。これが、大統領の仕事か……。くそッ！──
カットナルは、カットナライザーを二十錠飲み、ニッコリとしないを作って、テレビの中のドブドロボフに語りかけた。
「戦争だけは避けねばなりません」
「仕掛けたのはそっちじゃ。責任をとれ、責任を！」

「どうとればいいんですか？」
「知るか！　モスクワが灰になった瞬間に、我が東側の『見えないミサイル』全弾がお前達に向け自動的に発射してしまうんじゃ」
「それは困ります。こっちも、攻撃を受けたとたん、自動的に西側全軍のミサイルが発射してしまいますから」
ドブドロポフの顔が真っ赤になった。
「差別用語！　差別用語の禁止用語の差別用語……」
以下、通訳コンピューターは、差別用語と禁止用語という言葉を交互に五十回以上繰り返した。
——どうしろと言うんじゃ……。あ、もう、嫌だ、嫌だ……。起きてしまった事は仕方ないじゃないか。このッ！——
カットナルは直通テレビ電話の音声だけを切ってしまった。
その時、机の上の青い色の電話が鳴った。無声でなにやら喚き散らしているドブドロポフの顔を横目で見ながら、カットナルは受話器をとった。
それは、カットナルが私費で依頼した、興信所からの電話だった。
「レミー・島田は、キリー・ギャグレー、北条真吾に続き、レオナルド・メディチ・ブンドルに接触、その後、サハラ砂漠に向かいました」
「なに？　ブンドルにまで会ったのか……」
カットナルは、かねてよりグッドサンダーのファイター達のその後が気になっていて、一年前のドクーガ壊滅後も彼らの様子を探っていたのだ。

――もちろん今は、彼らを敵とは思っていない。しかし、彼らが何かをやり出すとしたら、きっとスリリングな事が起こるに違いない――

カットナルは、三年間にわたるグッドサンダーとの戦いの日々を懐かしんでいた。しかも、人にこそ見せなかったが、ケン太の宇宙への飛翔には、感動の涙をその片目から流した覚えすらあった。

――奴らがまた動きだした――

カットナルの胸に熱いものが湧き上がってきた。

相変わらず怒りまくっているテレビの中のドブドロポフがバカバカしかった。考えてみれば、アメリカ大統領の仕事など、神経が草臥(くたび)れるだけでちっとも良い事はなかったのだ。

――俺は大統領になりたかったが、大統領の仕事をしたいわけではなかった――

カットナルは傍らの副大統領に向かって言った。

「副大統領……、宣誓したまえ」

「はっ？」

「お前を大統領に任命する」

「はあ？」

「わしは辞めた。後は任せる」

「そ、そんな、こんな事態に無責任な」

「君だって大統領を目指して政治家になったんだろう」

「そ、それは、そうですが……」

「願いが叶(かな)ってよかったではないか……」

ための、希望のない交渉を始めた。

そして大統領の椅子に座ると、地球最後のアメリカ大統領として、ドブドロポフと戦争を避ける

副大統領は生つばを飲みこむと、カットナルの手から薬瓶をもぎとって、一気に飲み干した。

「あの白熊野郎の相手を頼むぞ。なにか不都合があるなら、私は心不全で死んだ事にしたまえ」

「し、しかし……」

＊

カットナルは、ポトマック河畔の桜の並木道を、せいせいした表情で歩いていた。

「さらば大統領の座……。これでいいのだ」

そして、腕時計を見て首をひねった。

「ん？」

アメリカの軍事基地からミサイルが発射されて一時間が過ぎている。モスクワまでは二十五分。モスクワはとっくに灰になったとして、行って帰って来いで五十分もあれば、ソ連の報復攻撃で、ワシントンも灰になっている筈だ。それなのに、何も起こった気配はなかった。

「どうなっておるのだ？」

カットナルが大統領を辞めたのは、少し早まった行為だったかもしれなかった。なぜなら、ミサイルはモスクワに落ちなかったのだ。

ミサイル落下二分前に、宇宙の彼方から飛来した男の子の姿をした青白い光が、ミサイルを囲い、一瞬のうちに、ミサイルが爆発しても無害な宇宙空間に瞬間移動させた。

戦争は回避された。
そして大統領にいきなり任命された副大統領は、もし誰かに暗殺されさえしなければ、少なくともカットナルの残された任期分、あと三年は大統領の座にしがみつく事が出来たのである。

＊

ロンドン。
大英帝国の首都として繁栄を極めた大都市——、しかし英国病（「ゆりかごから墓場まで」という福祉が行きすぎて、怠け癖や非能率が国民に染みつき、経済状態が悪化したイギリスを病気にたとえた言葉）が、再起不能の極みまでいった現在は、失業者と浮浪者のあふれる世界一物価の高い街として人々から敬遠され、かつての賑わいが嘘のように寂れていた。
しかし、階級や秩序に対する、排他的で尊大ともいえる英国人気質は、いまだに人々の心に強く残っていた。そのくせ、性差別禁止法や先進民主主義国で世界初の女性首相を生み出したという進取の精神も気取っており、世界初のメカによる保育園園長を受け入れたのもこの街だった。この起用は、世界一を記した本、ギネスブックを生みだしたイギリスの首都ロンドンの面目躍如たるものがあった。

＊

夕暮れが近い。

オバは、長い影を石畳に落として、とぼとぼと街角を歩いていた。

――イギリスは男女差別は禁止されているけれど、メカと人間の差別はまだまだなんですね――

オバはかねてより、メカロボットの保母を保育園に雇って欲しいという申請書を、ロンドン教育委員会に提出していたが、その答えが今日でたのだ。

オバの願いは、委員会のメンバーの強硬な反対に遭って退けられてしまった。

「メカに子供は任せられない。メカに人間の子供の気持ちが分かる筈がない」

「町には人間の失業者があふれているのに、このうえメカを雇うなどとんでもない事です」

これらが反対の理由だった。

「ではなぜ、私を保育園の園長などにしたのです」

「あなたは特別です。あなたはケン太という少年を育てあげた。それにゴーフラッシャーを浴びたせいか、人間並みのハートをお持ちのようだ」

「でも、園長という仕事は、事務処理に忙しくて、子供と直接触れ合う時間があまりとれません」

「それでいいではありませんか……。なんにしろ、世界初のメカの保育園園長、これは大変な事なのですよ」

「今のままでは、そんな肩書は飾りにすぎません。メカの持つ良さは、子供と触れ合ってこそ生かされます」

「お言葉ですが、メカによる教育によって、子供達がメカに使われ、メカに支配される人間になったらどうします？　百年以上も昔から、機械万能時代に対して人間が恐れていた事は、まさにそれ

なのですぞ」
「メカが人間を支配するなんて、偏見です」
「率直に申しましょう。ドクーガ滅亡の際、確かに我々には喜びがあった。しかし反面、メカがハートを持った事に畏怖の感を抱いた事も事実です。メカは何を考えるか分かりませんからな」
そして、メンバーの一人は、オバに止めの言葉を言った。
「現にあなたは、メカの保母を雇おうとして人間の職場を奪おうとしているのですぞ」
「そんな……」
オバが何を言っても無駄だった。
重い足どり、いや憂鬱な車輪どりで、保育園の道にきたオバに、もう一つ憂鬱の種が待っていた。
ビートルズの「抱きしめたい」が聞こえ、オバの前に花束がつき出された。
花束の主は、殴られ専用メカのケルーナだった。「抱きしめたい」は、ケルーナの口から流れている。ゴーフラッシャーを浴びてハートを持ったものの、ケルーナは自分の気持ちを伝える声を持っていなかった。ケルーナは声が欲しいと思った。だが、オバと同じロボットではあっても、所詮、幼児向けの暴力発散用メカ……、おもちゃに毛が生えたようなものだった。体内に複雑な発声装置を組み込むスペースはなかった。仕方なく、ケルーナは、自分の体に可能な限り優秀な発声装置を買って取り付けた。それは、一種のカラオケ装置だった。ケルーナの気持ちに合った曲が選曲されて流れ出すのだ。「抱きしめたい」はケルーナのオバへの、まさに愛の告白だった。
「いい加減にして下さい。保育園の前で、そんな曲は……。第一、私は日本製のロボットです。イギリスの曲は好みません」

ケルーナは少し考え込んでいたが、指でOKの合図をして、
♬あなた、変わりはないですか〜！
都はるみの「北の宿から」を歌い始めた。
「ウン、もう、私、怒りますよ。今日は虫の居どころが悪いんです」
オバは、花束をケルーナにつき返した。
こんなやりとりが、もうかれこれ一年も続いていた。ケルーナは、毎日毎日違う花束を買い、違う曲を歌いながら保育園に通いつめたが、鉄の女性の気持ちは硬かった。殴られることしか芸の無いケルーナは、遊園地で的当てゲームの的のアルバイトをして花束を買う金を稼いでいるのだが、話せないケルーナは、それすらオバに知らせる事が出来なかった。
オバがそれを知れば、少しは気持ちを和らげて接してくれるかもしれないが、ケルーナには、歌を歌い続け、花束を差し出すより他に愛を表現する知恵がなかった。
二百何回目かの求愛もフラれ、がっくりと肩を落としたケルーナは、
♬男と女の間には、深くて暗い川がある〜
「黒の舟唄」を歌いながら帰りかけた。
暗い歌――あたりも暗くなっていた。が、暗いケルーナの顔を青白い光が明るく照らした。ケルーナに背を向けていたオバは、懐かしい気配を背後に感じて振り返った。
「オバ」うううん、母さん、元気？」
「ケン太君！　ケン太君なのね」
メカの母親と宇宙に飛翔した子供の、一年ぶりの出会いだった。

翌日、オバは、ロンドン教育委員会に辞表を出して給料を精算し、ヒースロー飛行場からアフリカのトリポリ行きの貨物便に乗った。
ケルーナは辞表を出し給料を精算する知恵はなかったが、オバとの結婚を夢みて貯めていたお金は、アフリカまでの貨物便ぐらいの費用には十分足りていた。
呆れ果てて隣の荷台を見つめるオバに、ケルーナは陽気に「ティー・フォー・ツー」（二人でお茶を）を歌い続けていた。

*

リオデジャネイロ。
ブラジル南東部の港町で、一九六〇年、ブラジリアに移されるまで、ブラジル独立以来の首都だった。港は、海と山の姿が印象的で、世界三大美港と呼ばれ、観光客も多いが、特にリオデジャネイロのカーニバル（謝肉祭）は、サンバのリズムと共に世界中に知れわたっており、その祭りは毎年、必ず、はしゃぎすぎで死者が出るというほど、熱狂と興奮で盛り上がる。ラテン系の血の気の多い民族には、こたえられない祭りなのだ。
毎年、カーニバルの時期になると、全世界の金持ち達が、それぞれ所有の船に乗って港に集まり、その美しさを競い合うが、ここ数年、豪華さでいえばトップの座を守り続けている船があった。

おそらく、世界で一番血の気が多いであろう男の所有するこの船は、船首にフライドチキンを持った女神の像が飾られており、その名を「ヨーコ丸」といった。

＊

港から陽気なサンバのリズムが聞こえてくる。カーニバルは、今、最高頂に盛り上がっている頃だ。

「いつもなら、カーニバルの行列の中で踊りまくっている頃なのに……。今年は何てこった」

ケルナグールは、豪華船の窓辺で、シャンデリアのようにまたたく港の夜景を見ながら、ぼやき続けていた。

「あなた……、お勉強の時間ですよ」

ヨーコ夫人がテキストを持って入ってきた。

――ああ、また地獄の特訓が始まる――

「ハイ、ハイ」

なげやりに答えるケルナグールにヨーコ夫人は厳しく言った。

「ハイは一語！」

「ハイ！」

「では、セールス・トーク（セールスマンの話法）のおさらいをしましょう」

ケルナグールは溜息をついて立ち上がった。ケルナグールの昔を知る者にとって、今のケルナグ

ールの服装は悪夢を見ているようなものだった。なんと、上から下までキチッとイギリスのチェスターバリーのスーツを着こなし、ネクタイはフランスのランバン、靴はイタリアのタニノクリスティ、手に持ったアタッシェケースは、アフリカ象の耳の皮で作ったイタリア製のバレクストラ。超一流ブランド商品でガチガチに身をかため、おまけに腕にはめた時計がスイスのピアジェとくると、着用しているのがケルナグールだけに、もうほとんど病気の世界としかいいようがなかった。どうしてこんな事になったのか……。

——かあちゃんに聞いてくれ——ケルナグール本人もそれしか言いようがないだろう。

ヨーコ夫人は、ドクーガが滅亡し、戦争というケルナグールの遊びがなくなった今、外食産業の社長としての自覚を彼に要求したのだった。

「社長自ら、セールスマンとして販売の先陣に立つべきです！」

愛妻に命じられては逆らえる筈もなく、ケルナグールは、セールスの心得を一から勉強する事になったのだ。特に今年は、ケルナグール・フライドチキンの支店が、フライドチキンの本場、ケンタッキーに進出する。世界のフライドチキン業界を二分して行われてきたフライドチキン戦争の結着がつけられる時なのだ。

ケルナグールは元気なく、ぼそぼそとセールス・トークを喋り始めた。

「奥様、おはようございます。わたくし、いつもご町内でお世話になっておりますケルナグール・フライドチキンの社長でございます。いつもお世話さまでございます」

この短いセールス・トークの間に、三回もペコペコと頭を下げねばならない。今までふんぞり返って後ろにひっくり返った事はあっても、人に頭を下げた事のないケルナグールだ。

セールスマンとして、ヨーコ夫人の特訓をうけるケルナグール

重い石頭を前に下げると、前に倒れそうになる。そのうえ、ボクシングをやっていた頃にパンチドランカーになったケルナグールには、バランス感覚がまるでないのだ。現に、試しに訪問してみた家で、出てきた主婦に頭を下げ、つんのめって相手を押し倒し、「すわ暴行！」と誤解した亭主が警察を呼んだという、笑えない騒ぎも巻き起こしている。

第一、いくらブランド商品を着ているとはいえ、この男が扉の前にヌッと立ったら、並みの子供はひきつけを起こし、気の強い子でも小便をちびらすという、折り紙つきのご面相だ。愛想が勝負のセールスは、どだい無理な筈なのだが、あの顔に慣れたヨーコ夫人には、さして気にならないらしく、辛抱強くセールスの特訓を続けていた。しかし、一日十時間のセールス勉強で、さしもの精力絶倫のケルナグールも、夜はすっかりガックリしてしまい、それがヨーコ夫人の不満であったが、セールスの勉強に、いつもの頭の労働力の十倍以上のエネルギーを要するケルナグールを思えば、仕方ない事だった。

「このたび、奥様にも我がケルナグール・フライドチキンの美味しさを知っていただけるのは、望外の幸福でございまして……」

——それにしても、この棒読み口調……。一向に上手くならない……。だめだ、こりゃ——

ヨーコ夫人は、いいようのない疲れを感じ、フーッと溜め息をついた。最近は、いささか匙を投げたい気分になっている事も確かだった。

今日の特訓が終わり、息も絶え絶えにソファに横たわったケルナグールは、世にも悲しげにヨーコ夫人に聞いた。

「キミ……、明日も特訓やるのかい？」

ヨーコ夫人の顔を窺うケルナグールの目は、布団におねしょの地図を描いて母親から叱られる事に脅える幼児のようだった。
ヨーコ夫人は、そんなケルナグールが愛しかった。夫人は、ケルナグールの顔を抱えるようにして胸元に押しつけた。
「あなた……、頑張って……。辛くったって、悲しくったって、今を耐えれば、あなたはケルナグール食品の社長として、外食産業の輝く星になるのよ」
ヨーコ夫人の胸元がビショビショに濡れていた。
「！」
ケルナグールは泣いていた。十数年前、ボクシングジムで会ってから、ただの一度も見た事のない涙だった。いや、この男に涙腺がある事すら信じられなかった。
どんなに愚鈍単純でも、その無神経なまでの強さに魅力を感じていたヨーコ夫人だったが、その男が今、泣いている。
「辛いのね、そんなにまで……」
夫を、せめて人並みに社長業を務められる人間にしたいというヨーコ夫人の気持ちが、ここまでケルナグールを追いつめていようとは……。ヨーコ夫人は、自分の胸の奥がうつろになっていくのを感じた。
その時、テーブルの上のテレビ電話が鳴った。ヨーコ夫人は受話器をとった。テレビにカットナルの顔が写った。
「あ、奥さん、ヨーコさんですね。お初にお目にかかります。わたし、スグーニ・カットナルです

が……」
「大統領閣下」
「いやあ、大統領商売、ありゃ辞めました。アハハハ、わし、こりちゃった、もう」
なんだか、やけに愛想が良くて気味悪いぐらいだ。
「で、あいつ、います？　わが永遠の友、ケルナグール君」
「は、はい。あなた、カットナルさんからですわ」
ケルナグールは鼻をすすりながら、受話器を取った。
「あらら、ケルナグール、どうしたんだい？　目が真っ赤だ。玉ネギでも刻んだのかな？」
カットナルにしても、ケルナグールが涙を流すなど想像を絶していたのだ。
「なんでもないわい」
ケルナグールは慌てて手の甲で涙をぬぐった。
「で、わしに何の用ぞい」
「グッドサンダーの連中が、何かを始めるらしい」
「なにィ？」
ケルナグールの顔がパッと輝いた。
ケルナグールの脳裏に、グッドサンダーとの戦いの日々が、昨日の事のように蘇った。あの頃は、なんと満ち足りた日々だった事か……。それに引き換え今は……。わしは不幸な男だ。一度止まった筈の涙が不覚にもポロリとこぼれた。カットナルは、そんな事にはお構いなしに続けた。
「奴ら、どうやらブンドルを仲間に引き入れようとしたらしい」

「あいつの所へ行って、なぜわしらの所へこない？」
「そりゃ、お前、わしはアメリカの大統領だし、お前は外食産業の大社長さんだろうが……。忙しいと思って遠慮したんだろうな」
「そうか、あは……、そうだろうな」
「奴らが何をやるにしろ、今までの実績を見りゃ面白い事に決まっている。まさか、麻雀のメンバー集めてるわけじゃないだろうしな。わしはやるぞ」
「攻撃するのか？　奴らを……」
「バカだね！　お前、わしらもう、奴らとは敵じゃない。同じ地球の仲間だろうが……。わし、奴らのやる事に参加するんじゃ。奴らが遠慮しても、わしゃ参加する。で、キミに頼みがあるんだがね」
「なんぞい？」
「わし、大統領、辞めたんだ。ところが選挙に金を使いすぎちまってね。回収しないうちに辞めちまったもんだから、手元不如意なんじゃよ」
「金、貸せっちゅうんか？」
「ま、早い話がな」
「お前の製薬会社を処分すりゃいいではないの」
「そうもいかんよ。わしの趣味で社員達の生活を壊すわけにもいかんもん」
大統領を辞めて、ソ連との戦争回避を投げ出し、地球を壊しかけた男にしては、えらく勝手な言い草である。

「お前、変わったのう」
「国民から愛される大統領を一年もやってたんだから、変わりもするわい……。ハハハ……。で、頼むよな。貸してくれんかね」
「ウウ……、カミさんに聞かねばなあ……」
ケルナグールはヨーコ夫人の顔色を窺った。ヨーコ夫人は、淋しげに笑って受話器をとった。
「お貸ししますわ、いくらでも」
「ほんとですか？……。申し訳ない……」
カットナルは深々と頭を下げた。
「ただし条件があります」
「条件？」
「わたしの主人も参加します！」
「かあちゃん！」
ケルナグールが飛び上がった。
「行きたいのでしょう、あなたも……」
「いいのかい？」
「あなたに社長業は無理のようです。でも、男がいったん家を出る以上、会社も家庭も捨てる気で行って下さい。もちろん、私とも別れるつもりで……」
「君と別れる？」
「あなた、男でしょう。男が決めた事ならば、何もかも投げうってやりとげる事です。その決意も

なしにするなら、私も会社の金を無駄に使って協力するわけにはいきません」

ケルナグールの中で、ヨーコ夫人と、これからグッドサンダーの面々が出会うだろう冒険を秤にかけた天秤が、右に左に激しく揺れた。しかし、冒険への衝動は押さえがたかった。ケルナグールの中で萎えていた熱いものがみるみる蘇ってきた。

「わし、行くぞい」

ヨーコ夫人は頷いた。そしてテレビのカットナルに言った。

「必要額を見積もりして本社に送って下さい。あなたの口座に振り込みます」

「かたじけない」

「それから、電話はこれで切らせていただきます。おそらく私達にとって最後の夜になりそうですので……」

カットナルは自分の事のように、頬を赤らめて、しどろもどろに言った。

「な、なんと言ったらいいのか……。その、ごゆっくり」

「失礼します」

ヨーコ夫人は受話器を置いた。そして先刻までの意気消沈が嘘のように、鼻歌を歌いながら酒をグラスに注ぎ、飲み干すケルナグールを見つめた。

――私は、この男がボクサーとして再起不能になってからこの十数年というもの、ボクサーに仕立てた私の責任として、私の人生を捧げてきた。でも、もう解放されていいのかもしれない。私はまだ若い。私の青春は、まだ残っている筈だ――

そう思いながらも、やはりヨーコ夫人は淋しかった。十年以上の結婚生活で、ヨーコ夫人は、ケ

ルナグールに慣れすぎていたのかもしれなかった。

＊

次の日の朝、二人は水盃(みずさかずき)をかわし、ヨーコ夫人は船から港に降りていくケルナグールの後ろ姿に火打ち石を打った。

二人はその後、二度と会う事はなかった。

# 第八章

# 砂漠の戦い

ポルトガル
スペイン
セビリア
マラガ
地中海
大西洋
アルジェの女
ラバト
カサブランカ
アルジェ
チュニス
チュニジア
モロッコ
トリポリ
アルジェリア
リビア砂漠
西サハラ
(スペイン領)
リビア
サハラ砂漠
モーリタニア
タハト山
ヌアクショット
バマコ
マリ
ニジェール
チャド
ニアメ
チャド湖
ンジャメナ

《レポートV》

ここ数カ月、ある目的のために姿を消した子供達の数は百人を超えた。
そしてある日、消えた子供達の中で、親族のある者の家に一通の手紙が届いた。
そのうちの一つを紹介しよう。
「パパ、ママ、黙って消えてしまってごめんなさい。僕らがこのまま、パパやママ達、人間と一緒にいると不幸のもとになります。
僕らは、僕らの仲間と共に新しい世界へ翔び立ちます。そう、僕らは真田ケン太と同じ種類の人間なのです。僕らは地球の人達に迷惑をかけずに、僕らの生き方を続けたい。今まで黙っていたのは、僕らを邪魔しようとする何かが、僕らを狙っているかもしれなかったからです。
多分、二度と会う事はないと思いますが、どうか悲しまないで下さい。これは、僕らが望んでやることなのです。
さようなら……」
不思議な事に、この手紙を受けとった親達に大きな動揺は見られなかった。
消えた子供達は、いわば問題児だった。友達とも遊ばず、親兄弟にも懐かず、いつも孤独で、学校の成績もよくなかった。できの悪い子供ほど可愛いとよくいうが、消えた子供達だけは違っていた。自分達が生んだ子ではあるが、親達はどこか自分達と異質なものを子供の中に感じていた。それは、たとえば動物界の、同じ種族の中に生まれた突然変異の子供を、種族同士がどこか恐れ嫌い、排除しようとする本能に似ていた。
むしろ慌てたのは、子供達を事故死だと偽ったソ連のESP研究所……、そしてニューギニア

の祈禱師……、行方不明の自閉症の子供達をメンツにかけても探し出そうとしていたＦＢＩ達だった。

手紙の差し出し場所は、北アフリカ・リビアのトリポリ……。

手紙を受け取ってから調査を始めても間にあわなかった。手紙がトリポリの郵便局から世界各地に発送された次の日には、子供達は飛び発っていたのだから……。

だが、この事実を事前に察知していた者もいた。ケルナグールとカットナル、そして、ケン太によって滅亡させられた筈のネオネロス率いるドクーガの生き残り達だった。

サハラ砂漠。

北アフリカに広がる世界最大の砂漠地帯……、その名はアラビア語のサフラ（荒れた土地）からきている。このサフラという言葉は「赤茶けた色の」という意味もあったといわれている。

その名の通り、灼熱の地獄、不毛地帯で、今も足を踏み入れる者は少ない。砂漠を緑に変えようという遠大な計画もあるにはあったが、この地方の政情不安も手伝って、未だに開発はされず、人間が住むには最も過酷な土地として地図に記されている。

この地に足を踏み入れるのは、砂漠をラクダで旅するキャラバンと、砂の海の横断・縦断に命を賭ける物好きな冒険家ぐらいのものだった。

二十世紀後半にも、日本の青年がラクダによる単独横断を計画したが、目的を果たせずに命を失っている。

だが、この砂の地獄にもメリットがないわけではない。人がいないだけに、いかなる戦闘が起ころうと、住民に対する被害が出にくいという事だ。

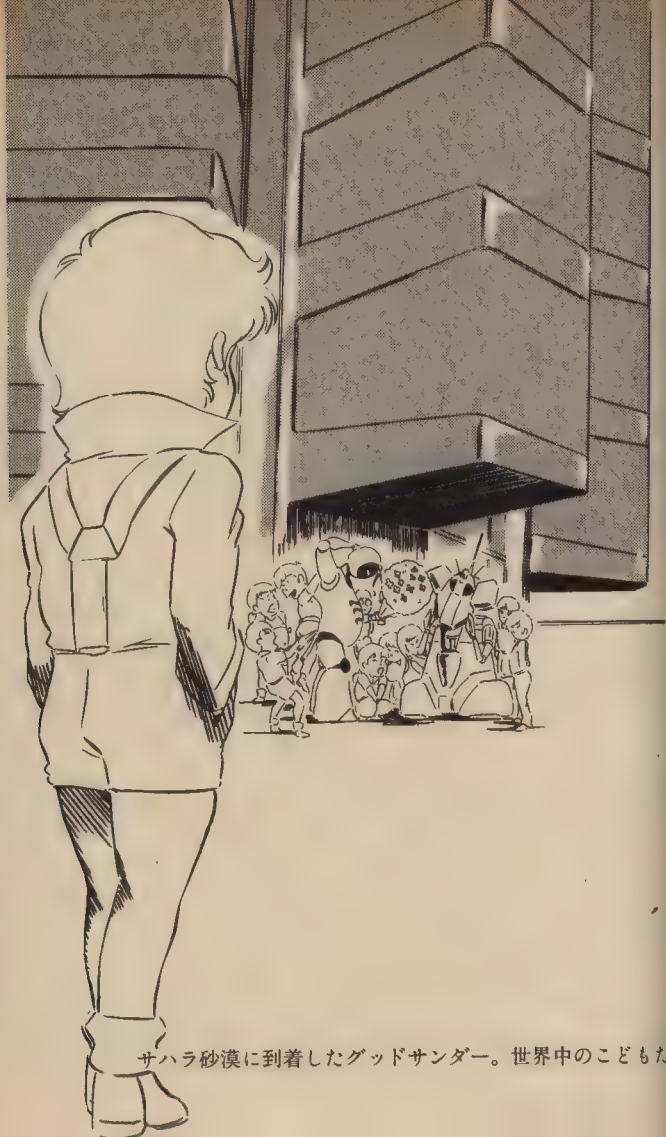
そして、今、地球の人々のほとんどが関知しないまま、ある星の命運を賭けた最初の戦いが起ころうとしていた。

＊

砂漠を月の光が照らしていた。
しかし、レミーはとてもロマンチックな気分に浸ってはいられなかった。
レミーは、グッドサンダーのメンバーを誰も集められず、この地点に仲間として現れたのは、イザベルとオバ、そしてやたらとラブソングを歌い続ける壊れたジュークボックスのようなケルーナだけだった。
——何が始まるのか知らないけれど、このメンバーで大丈夫なのかしら……——
そんなレミーに、懐かしい少年の声がした。
「レミーさん、有難う。また参加してくれて……」
月の光が砂の上で弾けるようにきらめくと、青白い炎が燃え、ケン太の姿が浮かび上がった。青白い炎さえなければ、ケン太は一年前のケン太とまるで違いがなかった。
「久しぶり、ケン太君……。また楽しく付き合えるといいんだけど、なんか、ピカピカ光っちゃって……。ビビるなあ」
「嫌だなあ。僕、そんなに変わっちゃいないよ。ただ、あっちゃこっちゃに飛べるだけで……、それと、いろんな物と話が出来るってことかな……」
「エライ違いじゃん……。わたし達のような並みの人間が、あなたに手伝える事なんか、あるの？」
「ウン……。グッドサンダーが来れば分かるよ」
イザベルがマイクを出してケン太に聞いた。
「ケン太君、帰国に際して、地球の人々にメッセージを……」

「困ったなあ……。僕のする事って、地球の人達とはあんまり関係ないんだもん……」
「でも、あなたは宇宙にはばたいた最初の人類でしょ。あなたは人類の希望だわ」
「人類の希望……。ウ〜ン、そうなのかなあ……」
ケン太は眉をくもらせた。
その時だった。
ゴゴゴゴ……。
轟音を轟かして巨大なグッドサンダーの船体が、異次元から瞬間移動して現れた。
サバラスがハッチから出て来て、ケン太に言った。
「ケン太、君と共に生きる子供達は全て集まっているよ」
「有難う。僕らの勝手を聞いてくれて……」
「ケン太達が一人歩きするまで見守るのが、真田博士と私との約束だからね」
レミーが怪訝そうに聞いた。
「ちょっと待って。ケン太達って、ケン太君のような人間が他にもいるの？」
「ウン、紹介するよ」
ケン太はニッコリ笑ってグッドサンダーの中へ入っていった。

＊

「と、こんなにたくさん……」
リビングエリアに、百人近い子供達が集まっていた。ここ数カ月の間に、地球の様々な場所から

サハラ砂漠に到着したグッドサンダー。世界中のこどもたちも

姿を消した子供達だった。
「ここにいるだけじゃないよ。地球の汚れた空気にあたると死んでしまう子も、グッドサンダーの無菌室にいるよ。それから、みんなと話すのが苦手な引っ込み思案の子もね。でも、みんな、みんな、僕と同じ友達なんだ。ね、みんな」
子供達は頷いた。
「僕、ケン太。ヨロシク」
子供達も、口々に自分の国の言葉で挨拶をした。
レミーとイザベルは目を丸くした。
「みんな、言葉が違うじゃない」
「どこから、こんなに集めてきたんです？」
ケン太の代わりにサバラスが口を開いた。
「集めたのではない。彼らが参加を希望したのだ」
「参加を希望したといっても、この子達、まだ保護者が必要な年頃でしょ」
「親という名の保護者なら、彼らは親を捨てている」
「親を捨てた？　もしかして、これ、親に内緒なわけ？」
「内緒もなにも、この子達、自らが選んだことなのだ」
「選んだっていったって、親に内緒じゃあ誘拐ってことだわ」
ケン太がレミー達に言った。
「この子達は違うんだよ。海と話が出来る子がいる。風と話す事のできる子もいる。森とだって話

せるし、メカと話せる子もいるんだ」
「要するに、ケン太君と同じってこと？」
「今はまだ、人間と僕との中間ぐらい……。でも、もうすぐ僕と同じになるんだ。そして、僕らは僕らの星で暮らすんだ」
「君達の星……？」
「僕は、宇宙の果てまで飛んでいった。そしてビッグソウルに会ったんだ。ビッグソウルは言ったんだ。人類は宇宙へ飛び出す新しい段階を迎えた、新しい人類と古い人類は同じ星に一緒に住む事は出来ない、って」
「どういう事？」
ケン太は淋しげに言った。
「同じ星にいれば、僕らは古い人類を滅ぼしてしまうからさ。たとえ、僕らがそれを望まないにしても……」
ケン太は続けた。
「生命は進化の過程で、新しいものが古いものを滅ぼしてきたんだ。猿人から生まれたジャワ原人やペキン原人のような原人は猿人を滅ぼし、原人を滅ぼしたのはネアンデルタール人のような旧人。そしてその旧人も、クロマニヨン人……今の人類のような新人に滅ぼされてしまったんだ。そして、今度は僕たち……」
「私達は滅びゆく種族ってわけ……」
「そうはしたくないもん。でも、このままだと、地球という星をめぐって、僕達と今の人間達との

間に必ず戦いが始まるよ。そして、まず、それに気付いた人間達は、僕らの芽を刈るために、僕達を始末しようとするに違いないんだ。ここにいる子達はみんなそれを感じているんだ。この子達の親も、多分、無意識にそれを感じているに違いないよ。だから、この子達はいつも変人扱いされ、一人ぼっちだったんだ。でも戦いが始まれば、遅かれ早かれ僕らが勝ってしまう。今の人間達は、地球から消えてしまう……。そうならないためには、僕らが地球を出て、別の星で生きるしかないでしょ。

僕とソウル達は、僕らの住める星を探したんだ。そしてやっと、宇宙の別の生命体にも迷惑をかけずに、僕らの住める星を見つけた。

その星は四十六億年前の地球と同じで、なんにもない星だったんだけど、僕と一緒に飛んで行ったソウル達は、その星に〝いのち〟を吹き込んで、海があり、川があり、緑のある、僕らにとっての楽園に作りあげてくれたんだ。あの星なら、地球では無菌室の中でしか生きられない僕の仲間も生きていけるし、僕らは誰にも邪魔されずに、そして誰の邪魔もせずに暮らしていける。これからも地球には、僕らと同じ子供がどんどん生まれてくると思うよ。

でも、人間との間に戦いが始まる前に、そんな子供達が住める星が出来ていれば、戦いにならずにすむでしょ」

「そのために地球を捨てるの？」

「だって、今の人間を滅ぼしたくないもん」

「………」

レミーとイザベルは顔を見合わせた。

「スケールが違いすぎるわ。滅びゆく人類の私達が、ケン太君達、新しい人達にやってあげられることがあるとは思えないけどなあ……」
サバラスが口を開いた。
「この子達が、ケン太の段階にまでなれば、我々に出来る事は何もなくなるだろう。宇宙を自分の力で飛び、一瞬のうちに目的の星にまでたどりつけるからね。しかし、この子達は、まだ半分人間なのだ。目的の星まで行く乗り物と、世話をする人間が必要だ」
「この子供達が、ケン太君のようになるまで待てないんですか？」
ケン太が強い口調で言った。
「待てないんだ。あの星を狙う別の何かがいるんだ。ネオネロスが地球に住みついたように、そいつもあの星に住みつこうと近づいているんだ。僕らは一秒だって早く、あの星に行って、星を守らなきゃならないんだ」
その時、グッドサンダーのメインコンピューター・ファザーが警報を鳴らした。
「ビムラーとは異なるエネルギー接近……」
「なに？」
眦をあげるサバラスに、ファザーが続けた。
「ドクーガのネオネロス皇帝が持つエネルギーと同種類です」
イザベルがレミーに呟いた。
「ネオネロァと同種類？　どういう事？」
サバラスがどうしようもないというように、かぶりを振った。

「いや、ネオネロスそのものだ」
「やだ！　生きていたの？　ネオネロス」
ケン太が吐き捨てるように言った。
「ネオネロスは人の心に住む悪魔だもん。人間の心が変わらない限り、いくらでも蘇ってくるのかもしれない」
グッドサンダーの上空に、赤く燃える炎が脹れあがった。
ケン太が呟いた。
「戦いたくないのになあ……」

＊

赤い炎は砂丘の上に降り、凝縮して人の形になった。その姿は、一年前に滅びた筈のネオネロスそのままだった。
「わしは滅びはせぬ。お前達の集めた子供達を操って宇宙へ進出するのは、このわしだ」
いつの間にか、グッドサンダーの周囲を重火器を持った部隊が幾重にも取り囲んでいた。その兵士達の顔は、皆、同じ顔をしていた。サバラスそのものだった。

＊

「あの顔……、どうなっているんです？」
レミーが素っ頓狂な声をあげた。

ビジョンに写しだされた兵士達の顔を見たサバラスは、目を閉じて言った。
「わたしの兄弟達だ」
「兄弟？」
「私と同じように、ネオネロスによって、試験管の中で作りあげられた、身も心もネオネロスに操られている人間兵器……悪の申し子だ」
兵士達は攻撃を開始した。
その攻撃は、メカを多用した過去のドクーガの戦法に比べれば原始的だった。第二次大戦やベトナム戦争で使われていた兵器を持った兵士達が突撃してくる。
ドクーガ最後の戦いで、スナイパーやコマンダー達のメカロボットに反逆されたネオネロスは、もっとも単純で操りやすい兵器、人間を使ったのだ。
レミーは唇をかみしめた。
「どうします？　相手は人間です。それも隊長そっくりの……」
「敵であることには変わりない」
「ＯＫ、クインローズで迎撃するわ。あるんでしょ、私の恋人」
「うむ、だが一機だけでは的になりに行くようなものだ」
イザベルがサバラスに聞いた。
「瞬間移動で逃げられないんですか？」
「待たねばならんのだ、ここで……」
「私達のほか、誰も来やしないわ」

「いいや、グッドサンダーが百人以上の人間を乗せ、宇宙を長距離瞬間移動するためには、今まで以上の移動エネルギーが必要だ。そのエネルギーがもうすぐここへ集まってくる。それまで待つんだ」

「ケン太君、なんとかならないの！」

しかし、すでにケン太の姿はそこになかった。

＊

ケン太は砂丘の上で、ネオネロスと対峙していた。

「ネオネロス。何度やっても同じだよ。おじさんは僕に勝てない……。これ以上、犠牲を出さないためにも、ここは手をひいてよ」

「わしが負けたのは、メカ達のソウルの総攻撃を受けたからだ。おまえごとき小僧のパワーに敗れるわしではない」

「僕の力だって前よりずっと強くなってるんだ。お願いだよ。もう無駄な戦いはよそうよ」

「人間が一万年にわたり生み出してきた恐怖、怒りの化身である私に、お前ひとりが勝てると思っているのか？」

ネオネロスの体が炎の塊となって宙へ飛び、ケン太に襲いかかった。

ケン太の体が青白い矢になって、ネオネロスの攻撃をかわした。

ケン太は、いきなり凄まじいスピードで宙を飛んだ。この場で二つのパワーが激突すれば、グッドサンダーにまで被害が及ぶと思ったのだ。

グッドサンダーから数十キロ離れた無人の砂漠で、二人は向かい合った。
「どうしてもやるの？」
「息の根を止めてやる」
砂塵が巻き上がった。膨れ上がり弾け飛ぶネオネロスの赤い炎とケン太の青白い光の戦いが、地軸を揺るがせて始まった。

*

グッドサンダーへの兵士達の攻撃は激しさを増していた。
ファザーが警告した。
「これ以上無抵抗で攻撃を受け続けると、今後の宇宙飛行に重大な支障をきたす損害を被ります」
その時だった。前進してくる兵士達の真ん中で、ミサイル弾が炸裂した。
「!?……」
ファザーが状況を説明した。
「グッドサンダー上空一万メートルより、戦艦級飛行物体接近中……」
ビジョンに見慣れた機体……、一年前までは敵だったファントム・オブ・クロウが写った。と同時に、二人の男の顔が図々しく写しだされた。
「やあ、さっそくドンパチやっとるのか」
「悪いが助っ人させてもらうぞい」
カットナルとケルナグールである。

ケルナグールは、ファントム・オブ・クロウに命令した。
「降下開始！」
「待てよ、ケルナグール。これはわしの艦だぞ。命令はわしが下す」
「お前の艦だとしても、費用を出したのはわしぞい」
「黙れ！　居候は大人しく乗っておれ！　ファントム・オブ・クロウ、わしの命令に従うのだ！」
ファントム・オブ・クロウは、戸惑ったかのように、推進エンジンを止めた。ファントム・オブ・クロウは、一年前にゴーフラッシャーを浴びて自らの意志を持っていた。彼がサハラ砂漠にやってきたのは、別にカットナルに命令されたからではなかった。ファントム・オブ・クロウはファントム・オブ・クロウなりに、サハラ砂漠に来てグッドサンダーに会う目的があったのだ。彼にしてみれば、ここまで来る燃料と引き換えに、カットナルとケルナグールを乗せてやっているぐらいにしか思っていなかった。
「それを昔のようにいばり散らして命令しようとは……。こいつら、何様だと思っているんだ」
ファントム・オブ・クロウは、つむじを曲げて動くことを拒否してしまった。
「どうして動かんの……」
「せっかくのドンパチを、ここで指をくわえて見てろっちゅうんか……。それはないぞい」
ファントム・オブ・クロウは、この好戦的な人間達に付き合う気持ちは全く持ち合わせていなかった。
歯ぎしりするカットナルとケルナグールを乗せて漂っているファントム・オブ・クロウの脇を、いきなりスマートな戦闘機がすり抜けていった。サメの背鰭のような尾翼が印象的な機体だった。

カットナルとケルナグールは同時に叫んだ。
「ブルーシャーク!?」
それは世界一の壊し屋、シュミットの愛機だった。だが、シュミットは引退して花屋をやっている筈だ……。では一体誰が操縦しているのか？
ふと、ビジョンに目をやったケルナグールが、また叫んだ。
「あ、ありゃ、なんじゃ？」
砂塵を蹴立てて、グッドサンダーに向け突進する一万cc級のエアー・オートバイがあった。エアー・オートバイの前部には、ロケットランチャーが備えつけられている。エアー・オートバイとブルーシャークは、ほぼ同時にネオネロス部隊に攻撃を仕掛けた。エアー・オートバイは、兵士達を蹴散らすと、一気にグッドサンダーの甲板に乗り上げた。同じくレーザー機関砲を撃ちつくしたブルーシャークも、甲板に胴体着陸した。エアー・オートバイとブルーシャークから男が飛び出してきた。
ヘルメットをはずしたオートバイの男はキリーだった。そしてブルーシャークから素早い身のこなしで脱出した男がキリーに言った。
「無茶な奴だな。相変わらず何もないんで、自棄っぱちになってんじゃないの？　キリー」
「お前、いつから壊し屋になったんだ、真吾！」
「あれは、シュミットからの餞別さ」
キリーは肩をすくめた。
「俺には餞別くれる奴もない」

二人の足下で、レーザー光線が弾けた。
「話は後だな」
二人は転がり込むようにグッドサンダーのハッチに飛び込んだ。

＊

サバラス達の前に現れた真吾とキリーは、いつもの真吾とキリーと同じだった。
真吾はリビングエリアに入ってくるなり言った。
「隊長、キングアロー、ジャックナイト、クインローズを待機させてありますね」
「うむ」
「キリー、レミー、今まで通り、俺がリーダーでいいな」
肩をすくめながらキリーが言った。
「やりたい奴がやりゃいい」
真吾の体は、飲んだくれていた時が嘘のように引き締まっていた。
レミーは呆気にとられ、真吾のシェイプアップされた体を見つめた。
「レミー、急げ！」
「え、ええ……」
三人は、それぞれの愛機に飛び乗った。
始動スイッチを入れる。
エンジンの唸りは快調だ。

「よく整備してある……。キリー、これで動きが悪ければ、俺達の腕が鈍ったって事だな」
「ブロンクス訛りのテクニック、お見せしましょう」
レミーが、冷やかすような調子で真吾に声をかけた。
「真吾、再会の乾杯は、ビール？　それともシュナップス？」
真吾は苦笑して答えた。
「リンゴジュース」
真吾が先頭を切って発進した。
「レミーちゃん、つまみは俺のホットウルフ。たっぷり食べさせてあげるからね」
「辛子とパン抜きでお願いするわ」
キリーの猫撫で声にそう切り返して、レミーが飛び出した。
「辛子とパン抜き？……。ウヒョッ、そういう事。はりきっちゃう、オレ！」
発進したキリーのビジョンに写ったレミーが釘をさした。
「キリー、考えすぎは体に毒よ」
「レミーの毒なら、皿まで食っちゃう」
真吾が割り込んだ。
「相変わらず進歩しとらんな……、お前ら」
「相変わらず堅い奴っちゃな」
キリーは大袈裟に嘆いてみせた。
「あら、わたし、柔らかいより堅い方が好みだけど」

ここぞとばかり、キリーは大声をあげた。

「わ、僕、レミーのためなら堅くなっちゃう」

三人の間に、一年前のフィーリングが完全に蘇っていた。三人のそれぞれの愛機も、手足のように動いている。

「キリー、レミー、攻撃開始だ」

「了解！」

三機は、敵部隊のど真ん中めがけて突っ込んでいった。

その時だった。

夜空に赤い光と青い光が放射状に飛び散り弾け、続いて凄まじい衝撃波が三機を上空に弾き飛ばした。

「ワーッ！」

それは雷鳴のようなネオネロスの悲鳴だった。

「な、なにが起こったの？」

体勢を整えた三機の上空から、砂漠の地平線にかけて広がっていた青白い光が、みるみる赤く燃える光を吸い込んでいった。赤い光が夜空から消えると、青白い光は凝縮を繰り返した。やがて、それは砂丘にぽつんと佇むケン太の姿になった。ケン太は、たった一人でネオネロスのパワーに打ち勝ち、一年前のあの日と同じように、ネオネロスを地球から消し去ったのだ。

主人を失ったネオネロスの部隊は攻撃を停止した。そして武器を捨てると、虚ろな表情で、まるで亡者の行列のようにグッドサンダーから遠ざかっていった。

主を失った悪の申し子達の行方に何があるのか誰にも分からなかった。彼らの中から、新たなるネオネロスが生まれてくるかもしれないが、今はただ、行く場もなく彷徨う悪の巡礼者にすぎなかった。

サバラスは、もしかしたら自らの姿であったかもしれぬ、彼らの後ろ姿を無表情に見つめていた。やがて、彼らと入れ替わるように、見渡す限りの地平にメカの大群が現れた。かつて、ドクーガの手先だったスナイパーがいた。コマンダーがいた。そして、ゴーショーグンのゴーフラッシャーによって意志を持ち、その後、人間達の前から姿を消していたメカ達の全てが、そこには集まっていた。カットナルとケルナグールの命令を無視したファントム・オブ・クロウも降下を開始した。

攻撃開始直前に敵が戦いを放棄し、なす術もなく降りてきた真吾達三人に、ケン太が言った。

「あのメカ達みんなも、僕と一緒に行くんだ。みんなのパワーで、僕らは星へ飛んでいくんだ。さあ、みんなおいで、僕らの所へ！」

グッドサンダーの周りを埋めつくしていたメカ達からソウルが迸り出た。

ソウルは、次々にグッドサンダーのビムラー炉の中へ吸い込まれていった。青白いビムラー炉は、たちまち青白く輝き、あまりの明るさに人間にはとても正視できない光の塔になっていた。

真吾達三人は顔を見合わせた。思いは同じだった。今、目の前に展開している光景は、人間の力を遙かに超えていた。彼らに、人間の力で手伝える事があるというのだろうか……。事実、真吾達が戦う前に、ケン太一人の力でネオネロスとの戦いはケリがついてしまった。

真吾がぼそりと呟いた。

「しらけるな」

レミーが窺うように訊いた。
「やめる？」
うんざりしたように、キリーが言った。
「やめてなにをする？」
三人には、乗りかかった船に乗り続けるよりほかに、なす術はなかった。
その思いは、カットナルとケルナグールも同じだった。世界大戦の危機の最中で仕事を放り出したカットナルは、報道によると、心不全で急死した事になっていた。そんな男の復帰を誰が許してくれよう。ケルナグールにしても、今さらおめおめ妻の元に帰れはしない。単純な頭脳の持ち主だけに、やるとなったらとことんやるしかなかった。
かつて敵味方だった真吾達とカットナル達は、それぞれ世にも情ないしらけ気分で、グッドサンダーのリビングエリアに集まった。

＊

「子守りィ!?」
ケルナグールが、椅子から転げ落ちそうになりながら叫んだ。
「我々に出来る事は、子守りしかないというのか？　かつてドクーガで勇猛をうたわれ、アメリカ大統領にまでなった男が……、子守り……」
吐き捨てるように言うカットナルに、サバラスは言った。
「仮にケン太が見つけた星を巡って何者かと戦う事があったとしても、我々並みの人間には太刀打

ちできぬ強大な敵だ。ネオネロスとケン太の戦いすら、我々にはどうする事も出来なかったのだからな」
「私達、役立たずのファイターってわけね」
「だから子守りか……。でも子守りなら、他にもっと上手な奴がいるんじゃないの。俺が子守りしたって、教えられるのはナイフ投げや掻っ払いの方法しかないぜ」
とキリーが肩をすくめた。
真吾も頷いて言った。
「ここにいるオバを除いて、みんな子育てとは無縁だものな……」
「しかし、グッドサンダーが目指す星は、地球から七万光年離れた銀河の端にある星だ。一度旅立ったら二度と帰れぬだろう」
「七万光年……」
一同は溜息をもらした。太陽系に最も近い恒星プロキシマ・ケンタウリですら、四・二八光年……、地球と同じ惑星を持つ可能性があり、その惑星には宇宙人が生存しているかもしれないといわれるバーナード星ですら五・九一光年、七万光年といえば、もう想像を絶する遠い距離だった。
「あの、お話中だが、七万光年とはどういう事かね」
ケルナグールが怪訝そうに尋ねた。
カットナルはかぶりを振った。
「お前と話していると話が前に進まんな。前の事件で、ケン太とグッドサンダーには、宇宙規模の謎がある事ぐらい分かっとる筈だろ。勉強が足らんよ、勉強が」

「ググ……」
　オバがケルナグールに優しく言った。
「一光年とは、光の速度で一年かかる距離です。一光年は、九兆四千六百五億二千八百四十万五千キロになります……」
　ケルナグールは、ポケット電算機を取り出した。
「かける七万か……」
「八桁の電算機じゃ無理だぞ」
「分かっとるわい。こいつは、十五桁までOKじゃ。……ん？　だめみたい」
「十八桁までなければ無理ですわ……」
「そ、そんな遠くに！」
「瞬間移動すれば、三十ステップ、ほぼ一カ月でいける筈だ。ただし、瞬間移動のパワーになるソウル達は、目的地の星に住むことになる」
「という事は、俺達は帰れないという事か……」キリーは、夢中になって写真と録音を続けているイザベルを見つめた。
　サバラスは続けた。
「だから、我々に必要なのは子守りの能力よりも、地球を捨てる気持ちが持てるかどうかだ。そして何より、君達は子供が喋る世界各国の言葉を理解できる。レミーは三十カ国語……」
「俺もそんなところかな……」と真吾が言った。キリーは人種の坩堝、ニューヨークに居ただけに、身体で様々な言葉を覚えていた。

「もっとも、訛りの激しい方言ばかりだけどな……。特に英語の訛りなら、イギリスのコクニー訛りからオーストラリアのタスマニア訛りまでOKだぜ」
カットナルは胸を張って言った。
「わしとて、大統領の責務に当たった者。五、六カ国語は、格調あるアクセントで話せますぞ」
ケルナグールは悄気返っていたが、
「そ、そうじゃ！」
ポケットから計算機のような物を出した。
「見ろ、日本製のポケット電訳機だ。五カ国語の日常会話、わしにはこれがあるぞい」
「また、フライドチキンの景品か」
「当然じゃ。我がケルナグール・フライドチキンは世界の文化交流に貢献しとるきにね」
「言葉自慢はそのぐらいにして、私は帰れぬ旅に出る意志があるかどうかを聞きたいのだ。この旅は、我々の旅ではない。ケン太達、新しい人類の旅。君達には、それに付き合う義理などないのだからな……」
一同は、サバラスの言葉に、互いの顔を見つめ合い、苦笑した。
答えは決まっていた。ケン太達の仲間の子供が、地球の人間達と相容れないなら、真吾達も地球の人間達の生活からの落ちこぼれだった。地球に未練はなかった。
ただ、年頃のレミーだけは、その時、フーッと思ったのだ。
——宇宙の果てに行ったら、当然、人間はいないわよね。すると、わたしの結婚相手は、この中の誰か……、キリーにはイザベル……、するとわたしにゃ、真吾、カットナル、ケルナグール、サ

バラス……。ま、いいか、地球に残って他に探したって、いいのいそうもないもんね――

＊

イザベルはキリーに聞き返した。
「降りろというの？」
砂漠に朝が迫っていた。白々と明けていく空に浮かびあがるグッドサンダーの巨体を見つめながら、二人は岩場に座っていた。
「俺が来た以上、君がわざわざ行く事もない」
「でも、私は新しい人類の星が生まれるのを、報道する義務があるわ」
「バカな、七万光年も遠い星から、どうやって地球に通信するっていうんだ？　瞬間移動しない限りは、最も速い伝達法の光ですら七万年かかる。君の報道したいニュースは、七万年後の地球に届く事になる」
「………」
「エジプトに文明が出来てからさえ六千年そこそこだっていうのに、今から七万年も後に届いたニュースに何の価値があるというんだ？　そのころ人間が生きている保障さえない」
「キリー……」
「俺には地球には何もない。だから旅立てる。しかし君は違う。君は根っからのジャーナリストだ。君の声を聞く者が必要なんだ。今の地球にしっかり足をつけて、地球の人々の声と共に歩む事が君の幸福なんだ。ちょっとした演説になっちまったな。……フフン」

「あなたが来いと言えば行くわ」
「………」
キリーは、じっとイザベルをみつめた。そして、ふっきるように言った。
「よせやい。仕事を失った欲求不満の女性ジャーナリストのお守りはごめんだよ。君は地球で生きるべきさ。君自身、そいつをよく分かっている筈だぜ。じゃあな……」
キリーはグッドサンダーに向かって歩き出した。
「待って！」
駆けようとしたイザベルの足下に、振り向いたキリーの銃のレーザー光線が弾けた。
「いいか、そこを動くんじゃない。……それが俺の考えぬいた君の幸福だ」
イザベルは涙でぐちゃぐちゃの顔で頷いた。
「……。ええ……、あなたの言うようにする。でも、今は抱いて……」
キリーの銃を持つ手が降りた。
イザベルはキリーの胸の中で泣きじゃくった。キリーは、イザベルのショートカットを指に覚えこませるように、何度も優しく撫でた。
その時、グッドサンダーのファザーの声が響いた。
「グッドサンダー、瞬間移動を開始します」
キリーは、イザベルの顔をしばらく見つめウインクすると、グッドサンダーに向かって走っていった。イザベルの目に、小さくなっていくキリーの姿は、もう涙でぼやけて見えなかった。だが、もし、キリーの後ろ姿をはっきり見ていたら、キリーがグッドサンダーに駆け込んだ後、ハッチが

閉まる寸前にこじあけるようにして潜り込んだ巨大な男の影に気付いた筈だった。

グッドサンダーは、砂漠にイザベルとソウルの抜けたメカを残し、瞬間移動を開始した。

同じ頃、いや、正確にいえば、グッドサンダーが瞬間移動を開始する数分前、月面のジッター研究所から飛び発ち、サハラ砂漠に瞬間移動しようとする戦艦があった。

艦の名前は、スピリットオブメディチ二世号——ブンドルが、ゴーフラッシャーで自意識を持ったスピリットオブメディチを嫌って新造した戦艦だった。一世号が白鳥を模したスタイルだとしたら、二世号は羽根を広げた白いペガサスに似ていた。二世号には、ジッター教授が真田博士にライバル意識を燃やして作りあげた、擬似瞬間移動装置が付いていた。

「あいつの作る物は、あてにならぬが、ま、ないよりはましであろう」

ブンドルは、サハラ砂漠に向けて瞬間移動スイッチを入れた。二世号は、月と地球の距離の十分の一も進まなかった。

「ま、ジッターの実力では、こんなところだろう。おぞましい出来だ。もっとも、あの男を信じたわしも愚かだが……」

ブンドルは苦笑して再び瞬間移動スイッチを押した。次の瞬間、二世号は激しく揺れて、二世号のエネルギーとは別の強力な吸引力で異次元に引っ張り込まれた。

その時間は、グッドサンダーが瞬間移動したのと同時刻だった。

＊

グッドサンダーは、漆黒の宇宙空間に姿を現した。地球はおろか、太陽も見えなかった。それも

その筈、グッドサンダーが一回目に瞬間移動した地点は、地球から一千五百光年離れた地点だった。
そして、グッドサンダーのセンサーは、後方に現れた戦艦をキャッチした。
グッドサンダーの移動パワーが、同時刻に瞬間移動したブンドルの二世号のエネルギーを引き摺り、強引にここまで運んでしまったのだ。

旅は始まった。それは、もとよりブンドルも望んでいた事だった。

# 第七章

# 遥か地球を離れて

銀河宇宙。

我々の太陽が属している宇宙——、薄い凸レンズ型の空間に、およそ二千億個の星が詰め込まれた物質の集団である。凸レンズの直径、約十万光年、中心部の厚さは一万五千光年。太陽は、銀河の中心から約三万光年離れた片隅にある。銀河宇宙は、もの凄い勢いで回転していて、その速度は、我々太陽の付近で毎秒二千二百キロ。音速の約六百五十倍。その速度ですら、銀河宇宙が一回転するには約二億年かかる。

しかも宇宙には、銀河宇宙のような集団がいくつも存在しているのだ。こういった当たり前の事でも、ずらずら書き連らねていると、「宇宙は広い」という言い古された言葉すら、珍しく聞こえてくる。

グッドサンダーの七万光年の旅など、宇宙からみれば、毛虫の散歩である。

*

「見てはならぬものを見てしまった！」

ブンドルは、グッドサンダーと交信して、総毛だった。

いきなりビジョンに出てきたのが、見てはならぬ顔、いや、見る筈のない顔、カットナルとケルナグールだったからである。

「おお、お前も来たのか？」

「懐かしいぞい」
――地球を一千五百光年も離れて、相も変わらず見せつけられるのが、この二人の顔とは……。宇宙の神秘はどこへ行った？　祟りとしか言いようがない。何が宇宙美学論だ！――
ブンドルは、世界中に存在する四文字の禁止罵倒用語を数千個、心の中で二人に浴びせかけてから、冷ややかに言った。
「グッドサンダーのファイター達は、どこへ行った？」
「何か変な奴が紛れ込んだらしくて、そいつを追いかけているぞい」
――紛れ込んだ変なやつとは、おまえらではないのか――そう思いつつもブンドルは、考えてみれば自分もその変な奴の部類に入るのではないか、と苦笑した。

＊

「笑ってられないわ」
レミーは、ハンディバズーカを握りしめ、グッドサンダー内の網の目のように張り巡らされた通路を走っていた。
瞬間移動後、グッドサンダーは、艦内に計算されていない人間の存在を感知した。ただちに艦内テレビが写し出したその人間の顔を見た時、レミーは呟いた。
「私って、ほんと趣味の悪い奴にもてるのよね」
それはアフリカの月の山以来、カインと共にレミーを追いかけてきたゴーホムだったのだ。
――一体、どうやって私の居場所が分かるのだろう……。ともかく今度こそ、確実に始末をつけ

ねば！――
　真吾とキリーも別の方向から、ゴーホムを追いつめている筈だ。
　天井のスピーカーからサバラスの声が流れた。
「レミー、キリー、真吾、気を付けろ。侵入者は、子供達の居住区へ向かっている。攻撃は慎重にしろ」
　ゴーホムは何がなんだかわけも分からず、グッドサンダーの通路をさまよっていた。
　なぜここにいるのかも定かでなかった。頭の中で別の誰かが呼び寄せたとしか言いようがなかった。
　ブンドルに投げ飛ばされ、崖下に落ちたゴーホムは、全身打撲の重症を負ったが、彼の生命力は驚異的だった。
『レミーを殺せ！』
　カインの命令と、そして褒美に貰える筈のチョコレート欲しさが彼のエネルギーとなって、その体はみるみる回復した。しかし、カインの死んだ今、幼児以下の知能しか持たぬゴーホムに、姿を見失ったレミーを探す知恵はなかった。
　では、なぜ、今グッドサンダーにいるのか……、ゴーホム自身も分からなかった。
「ごめんね！」
　目の前にレミーが飛び出してきて叫んだ。肩にバズーカ砲をかついでいる。
「やりたくないけど、ケリをつけさせてもらうわ」
　ゴーホムの目が、獲物を見つけた喜びに輝いた。

頭の中をカインの命令が駆け回った。
『レミーを殺せ！　レミーを殺せ！』
ゴーホムは両手を広げ、一歩一歩レミーに向かって歩いていく。
足元にレーザービームが弾けた。
「大人しくしろ！」
ゴーホムの背後から追ってきた真吾とキリーが撃ったのだ。
しかし、ゴーホムは構わずにレミーに接近していった。
「止まれ！　動くと撃つぞ」
キリーの声にも耳をかさない。
「何を言っても駄目。真吾、キリー、とばっちりを受けないように、そこをどいて！」
レミーは、バズーカ砲の照準をゴーホムの胸元に合わせた。
「レミー、ここで撃つ気か？」
「熱くなりすぎだぜ」
真吾とキリーが同時に声を上げた。
「こうでもしなきゃ、許してくれないんだもん、この人」
レミーの指が引き金にかかった。
その時だった。ゴーホムの頭に『レミーを殺せ！』というカインの言葉とは別の声が聞こえた。
少女の声だった。
『こっちへおいでよ。一緒に遊ぼうよ……トモダチ……』

──トモダチ……!?──
ゴーホムは立ち止まった。
レミーのバズーカ砲が火を吐いた。
その瞬間、ゴーホムの傍らの扉が開いた。ゴーホムは吸い込まれるように中へ倒れ込んだ。ゴーホムの胸元に炸裂する筈のバズーカレーザーは、空を切って、床に伏せ頭を抱える真吾とキリーの頭上で爆発した。
「ひっ、こわ、ヒステリックレーザー!」
キリーが叫んだ。
「言ってる場合か! 奴が子供の部屋に!」
真吾が怒鳴った。
「なに!」
素早く立ち上がり、扉に駆け寄る真吾とキリー、そしてレミーの鼻先で、扉が閉まり、ロックされた音がした。
レミーがファザーに叫んだ。
「ファザー、ロックをあけて!」
「その部屋の鍵には、プライベートロックがかけられました。私の力では開けられません」
ファザーの返事に、レミーはあわてた。
「中の様子を知る方法は?」
「その部屋の少女は、極度の自閉症で、覗かれるのを嫌い、テレビモニターも切られています」

「中に怪物が飛び込んでいるのよ。あなたの力でなんとかしてよ」
ファザーは、相変わらず冷静な口調で答え続けた。
「今回の旅は、子供中心にセッティングされています。中の子供がロックした以上、私にはどうしようもありません」
「もういい！」
そう怒鳴ると、真吾はメーザーバートナーを取りに部品修理エリアに走った。
だが頑丈な扉のロックを破るには、十分はかかる。
三人は、扉を開けるまで中の子供が無事である事を祈るよりなかった。

*

ゴーホムは倒れ込んだ部屋の中で、よろよろと立ち上がった。
窓のない簡素な部屋で、折りたたみ式のベッドと机と椅子しか置かれていなかった。そして、ゴーホムに背を向けて、長い髪の少女が本を読んでいた。
「可愛い妹が大人になっても、子供の頃の素直で優しい心を持ち続けて、子供達を集め、遠い昔の不思議の国の夢を話してあげ、子供達の目を輝かせ夢中にさせて、そして妹自身も子供時代や楽しかった夏の日を思い出す姿を、お姉さんは思い浮かべてみるのでした……」
少女は本を閉じると、くるっとゴーホムに向き直り、おそらく人間に対して初めて喋る言葉を言った。
「食べる？」

少女の手に、チョコレートが握られていた。それはベルギーのゴディバではなく、アメリカ製のハーシーの子供っぽいキスチョコレートだったが、そのチョコレートは、ゴーホムが仕事の褒美として貰う以外の初めてのプレゼントだった。
ゴーホムは戸惑った表情を見せた。
「いいの……。トモダチだもの」
ゴーホムは少女の言葉を繰り返した。
「トモダチ……」
少女はニッコリ笑った。

*

扉のロックを焼き切り、飛び込んで来た真吾達は、思いがけない光景に開いた口が塞がらなかった。
あの巨大なゴーホムが、少女の膝枕で眠っていたのだ。
少女は、真吾達に微笑した。
いつの間にかやってきたケン太が、真吾達の後ろから、少女に話しかけた。
「トモダチになったの？」
「ウン……」
レミーが呟くように言った。
「トモダチ、冗談はよして……。このお友達は、私を殺すために来ているのよ」

ケン太はかぶりを振った。
「違うよ。この人がここに来たのは、レミーを追って来たんじゃない。僕らに呼ばれて来たのさ。だって、この人は僕達と同じだもん」
「ケン太達と？」
　三人はケン太とゴーホムを見比べた。
「この人は、風と話す事ができた。山と海とも……、そして妖精と呼ばれた人達とも……。でも、生まれてくるのが僕らより早すぎたんだ。体がとても大きいくせに、風と話せる、山と話せるなんて事を言い出す子供を、周りの人達は気味悪がったんだよね。気持ちが一人ぼっちのこの人は、周りからいじめられて、暴れ回るようになった。そのあげくが病院に無理やり入れられて……。この人の頭の後ろを見て……」
　カインの後頭部に、五センチほどの傷がついていた。
　レミーが呟いた。
「ロボトミー手術……」
　真吾が唸るように言った。
「人間を白痴にし、命令者に絶対服従させる手術……。それをカインが手なずけたってわけか……」
「ウン」
　ケン太は、眠っているゴーホムの頭をいとおしむように撫ぜた。
「でも、この人のソウルだけは手術を受けてもやられていなかったんだ。そして、やっと今、トモ

ダチを見つけたんだ」
　少女がレミーに言った。
「この人は私と同じ……、トモダチ……」
　レミーがぽつんと呟いた。
「殺されなくてよかった」
「ん？」とキリー。
「この人に……。この人達のために仕事していて、この人に殺されたんじゃ、わたし、あんまり惨めじゃない」
「そんなもんさ、多かれ少なかれ、俺達なんてのはな」
　真吾は、メーザーバーナーを仕舞いながら言った。
「そういうこと……」
　キリーも肩をすくめた。
　少女の膝の上で眠るゴーホムの寝顔は、赤ん坊のように無邪気だった。

＊

　グッドサンダーは、まるまる二十四時間にわたってビムラー炉内のソウル達のエネルギーの回復を待つと、二度目の瞬間移動に入った。
　瞬間移動で移動する距離は増えていた。最初は一千五百光年だったが、二度目は三千光年の距離を一瞬にして移動していた。

瞬間移動が終わった時、グッドサンダーのセンサーは、距離を置いてついてくるスピリットオブメディチ二世号を感知した。そして、三度目、四度目の瞬間移動の時も同じだった。

どうやらブンドルは、グッドサンダーの移動パワーに便乗して二世号を移動させる航法をマスターしたらしい。

センサーに付かず離れず現れる二世号の姿に、ケルナグールが、

「無理しおって……。こっちに乗ればいいのにのう……」

カットナルは頷いた。

「あいつが一人を気取ってたところで、人のいない宇宙では、誰もあいつのキザを誉める奴はおらんからなあ。あいつ、淋しくないのかなあ」

「嫌みな奴だが、一応昔、同じ釜の飯を食った仲間じゃしのお……」

＊

二人の会話を知ってか知らずか、ブンドルは二世号の艦橋で、くしゃみをした。

「風邪か……、病原菌の少ない宇宙空間でも風邪をひくとは……。さすが、わたしらしくデリケートな……」

ブンドルは別にキザを気取って一人でいるわけではなかった。ただもう、あのおぞましい元ドクーガの二大怪物の顔を見たくなかっただけだった。

おまけに直情型で、そのセンスに疑問を感じざるを得ない北条真吾、そして粗野なキリー・ギャグレー……。ブンドルにとって、レミー以外は、遠慮したい輩ばかりだ。

「あの連中が相手では、レミーも苦労が絶えまい。不憫な……」
そう勝手に思い込みながらブンドルは、ここ四日間、誰とも口をきいていない事に気が付いた。
二世号の中はメカロボットばかりで、話したところで面白い事はなにもない。そんな思いが、ブンドルを無口にしていた。少しは人間と……、特にレミーと美学について会話を交わしたい気もしたが……。
「ま、いい……。宇宙の孤独……、それも美学だ」
意地でもこのまま、グッドサンダーとの距離は保ち続けるつもりでいた。

*

グッドサンダーの旅は、外が星すらろくに見えない暗黒である事を除けば、豪華船の旅のようにのんびりしたものだった。
レミーに対するゴーホムの態度は、嘘のように人なつっこくなり、いつも微笑を絶やさず気持ちが悪いくらいだった。
子供の世話もほとんど手間がかからなかった。子供達は、ケン太と新天地を求めるという共通の目的を認識していた。昔のケン太のように、やんちゃな子供らしさを見せてくれても良さそうなのに、トラブルになるような問題は起きなかった。
「やはり、私達とは違う人間なのかなあ」
レミーは、そんな子供達になんとなく淋しさを感じていた。
しかし、意外にも子供達との接触を楽しんでいたのが、ケルナグールとカットナルだった。

「子供はな、たくましくなければならん。相手がどんな奴でも、殴り勝てばいいんじゃ」

ケルナグールの乱暴な理屈に目を丸くする子供達に、昼食後の休み時間、ヘビー級チャンピオンの頃の話を聞かせるのが、ケルナグールの日課になっていた。

――そう。わしはチャンピオンの頃、子供達のヒーローだった……。それなのに、あの頃のわしは、勝つ事とマネージャーだったヨーコに夢中で、ファンの子供達に何もしてやらなかった。せめて、サインの一枚、ファンレターの返事でも書いてやっていたら、どんなに喜んだだろう――

そう思えば思うほど、今、目の前にいる子供達が可愛くなるのだった。

カットナルは、自分の不幸な子供時代と、その不遇な環境から、いかにして大統領の座についたかを子供達に話した。

好奇心の塊のような子供達は、カットナルの話を熱い眼差しで聞いていた。

――この子達が大きくなって、選挙民になっていたら楽だったのになあ――

ケルナグールもカットナルも、本質的には、子供好きなのかもしれなかった。

ケルナグールはヨーコ夫人に子供を生んで貰いたくても生んで貰えなかっただけで、カットナルはといえば、子供の頃、母親に捨てられ、以来女性が苦手で、子供を生んで貰える相手がいなかっただけなのだ。

＊

オバにとっては充実した日々が続いていた。念願だった子供達とのスキンシップが、グッドサンダーにあった。そして人間には不可能な無菌室内の少女とのスキンシップ……。菌の塊のような人

間が少女に直接接しようとすると、体を何回も殺菌しなければならない。それは、普通の人体にとっては、決して好ましい事ではなかった。しかしメカのオバは違う。たった一回の強力な殺菌処理だけで、少女と肌触れ合う事が出来るのだ。

「人間には難しい子供の世話を、私達メカは出来る」

その手応えを今、オバはしっかりと感じて幸福だった。そして、オバの助手として献身的に従うケルーナも、不器用ながら子守りに慣れてきて、唐突に日本の歌謡曲を歌い出すのを除けば、オバにとって不満はなかった。

だが、居場所の無さに肩身の狭い思いをしているのが、元祖グッドサンダーのファイター達だった。

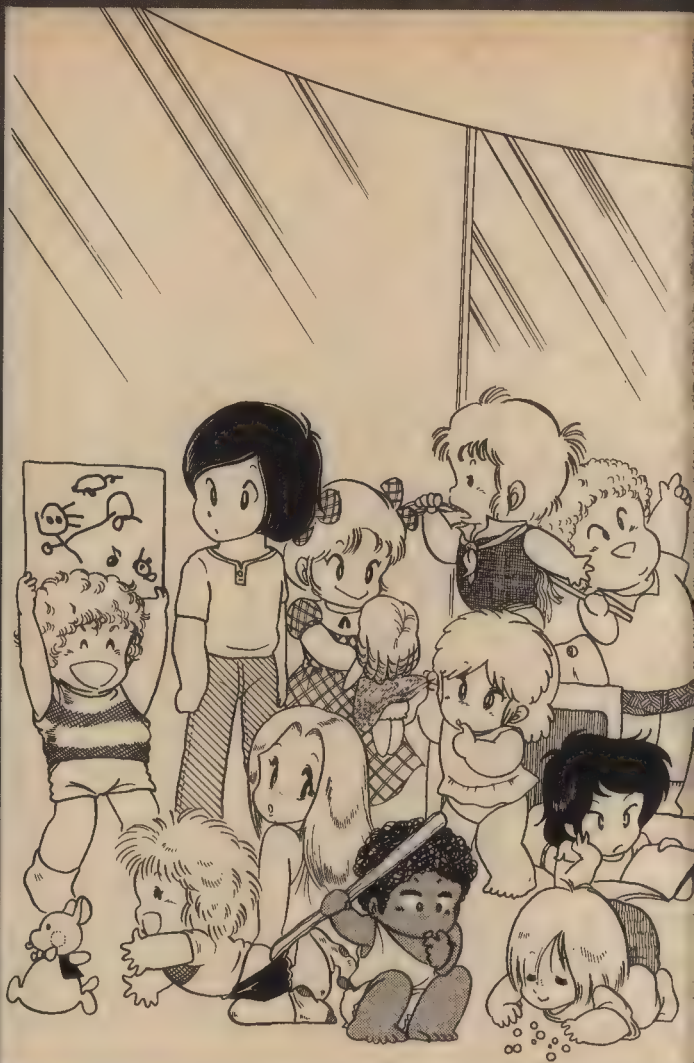
レミーは、女でなければ分からない女の子の世話があるからまだいい。真吾とキリーときたら、違う国同士の子供達の間の通訳ぐらいしか役目はなかった。しかも、その通訳自体が、言葉以外の方法で意思を通わせられる子供が多いグッドサンダーの中では、閑職中の閑職だった。酒は止めたし、自伝を書いてもしようがない。

二人は、プレイルームで、チェスやオセロで時間を潰す事が多かった。下手に子供の世話をすると、オバやレミーから邪魔者扱いされるのがおちだったからである。

だが、この二人にとって退屈極まりない毎日が破られる時が、意外に早くやってこようとしていた。

ゴーホムもまた、ソウルによって選ばれたひとりだった

# 第八章

# 未知なる敵

地球を旅立って十六日目、十五回目の瞬間移動を終えたグッドサンダーと二世号は、すでに三万五千光年の距離を飛んでいた。銀河宇宙の中心付近、目的の星までの距離のほぼ中ほどだ。
子供達の世話を終えたレミーは、ぼんやりビジョンに写る宇宙を見つめていた。宇宙には、無数の星が黒い紙に小麦粉をふりかけたように光っていた。銀河宇宙には、二千億個の星が詰め込まれていて、生命の存在する星もある筈なのだが、僅か十六日の旅では、異星の知的生命との接触は、確率からいって、限りなく不可能に近かった。
グッドサンダーの乗員と二世号のブンドルは、今現在、膨大な広がりを持つ虚無空間に存在する、唯一の生命集団に思えた。
そしてレミーは、さらに唯一の地球型生物の大人の女性だった。
「宇宙ひとりぼっちか……」
レミーがそう呟いた時、ファザーの警報が鳴った。
「未確認生命エネルギー急速接近中！　距離〇・五光年、地球型のいかなる動物植物鉱物とも異質です！」

＊

司令室に集まった一同に、ビジョンは接近してくるエネルギーを写し出した。
それは、宇宙の闇の中にぼんやりと赤く光って見えた。赤い光に追われるように、小さな青白い光がこちらに向かってまっしぐらに飛んでくる。ケン太が叫んだ。
「あれは、あれは僕のトモダチだ！」

「友達？」
「うん、あの青い光、追われているんだ。一年前に僕と一緒に地球を飛び発ったソウルだよ……。助けなくちゃ！」
ケン太の姿が司令室から消えた。
一瞬のうちにビジョンに写っていた青白い光の傍らに現れたケン太は、青白い光を抱きかかえるようにして、もの凄い速度でグッドサンダーに戻ってきた。
司令室の中で、青白い光と交信するかのように向かい合っていたケン太は、深く溜息をつくと一同に言った。
「僕達の星を奴らが襲ったんだ」
「奴ら？」
「うん。ゴーショーグンが守ってくれているから大丈夫だとは思うけど……」
〝ゴーショーグン〟、一同にとって懐かしい言葉だった。
「この宇宙には、宇宙へ飛び出せるエネルギー〝ビムラー〟をめぐって、地球と同じような戦いが起きた星がいくつもあるんだ。地球は僕らが勝って生きのびたけれど、ネオネロスのような邪悪なソウルが勝って、そのためにビムラーが爆発して破滅した星も多いんだ。邪悪なソウルが勝つような星の生命に、宇宙へ飛び出す資格はないんだ」
「誰が決めたんだ、そんな事……」
キリーが今さらながらに、吐き捨てるように言った。肩をすくめてレミーが、
「ビッグソウルさんとかでしょ、この宇宙を創り出した……」

真吾は苦笑した。
「早い話が生みの親の言いなりってわけだ」
「情けないけど、相手がでかすぎるわ」
ケン太が話を続けた。
「でも、そうならなかった星もあるんだ。ビムラーの力で星が壊されても、滅びなかった悪い奴がいるんだ」
「強ォい悪い子ってわけ」
「うん。ネオネロスよりズーッと強くて……邪悪なソウル……。そいつは新しい星を見つけては、住みついて同じ事を繰り返して、結局、その星を破滅させてしまうんだ」
「そんな悪い奴に、生みの親さんのお仕置きはないの？」
ケン太は黙ってしまった。
ケン太達が宇宙へ羽ばたくのを許された人類ならば、新たなる星を狙う邪悪なソウルも許された悪なのかもしれない。ビッグソウルは、新しい星で新しい人類・ケン太達に、より強力な敵をぶつけ、またしても試そうとしているのか……。そして、人類が高みに進化していくたびに、同じ事が繰り返されるのだろうか。
「なんだか、無限のどうどうめぐりだな」
真吾が呟いた。
サバラスがビジョンを見つめて言った。
「今は、当面のあれをどうするかだ」

ビジョン一杯に赤い光が広がっていた。

そして、その光の中に無数の黒い点が浮かんでいた。

「ビジョンを拡大しろ」

黒い点が拡大されると、異様な姿が写し出された。それは人間に似ていた。しかし、その敵は、東洋の彫刻に表れる天邪鬼（あまのじゃく）のように歪（ゆが）んでいた。しかも、体中が金属質の鱗（うろこ）に包まれ、尻尾があった。

「あいつらは、僕らの星を襲ったソウルの手先なんだ。きっと僕らが僕らの星に着く前に先手をとって、みんな消してしまうつもりなんだ」

サバラスが昔の落ちついた口調で言った。

「真吾、キリー、レミー、戦闘準備だ。ファザー、分かる限り奴らのデータを集めろ」

「了解」

グッドサンダーから、接近してくる無数の物体に向けセンサー衛星が発射された。

センサーが次々にデータを送ってきた。

「身長二メートル……、ほぼ人間と同型……、ただし、形成物質は、地球上に存在する物質とは全く異なります。しかし、生命エネルギーを全身から感知、彼らはなんらかの生き物です」

真吾がファザーに聞いた。

「生き物？　じゃあ、あのごついのは宇宙服か？」

「いいえ、その類の物ではありません。おそらく彼らは宇宙空間でも生存できる生物です」

その時だった。センサー衛星に対峙（たいじ）するように浮かんでいた生物達の大軍が、素早い動きで、雲（うん）

霞のようにセンサーの壁に張りついた。
「ただいまの移動速度、マッハ6……」
それまで言って、ファザーは口を噤んだ。
「どうした、ファザー」
「センサー衛星、機能不能……」
ビジョンにセンサーの壁部が大写しにされた。異生物は、鋭い牙と爪で、一瞬のうちに壁を食い千切っていた。
「真吾、キリー、レミー、発進だ！」
サバラスの声を受けて三人の愛機は発進した。
相手のスピードがマッハ6なら、こちらはマッハ12……、しかも相手の武器は、牙と爪だけのようだ。
「勝利は目に見えている……」
だが、三人の判断は甘かった。
三機の発射するメーザーとレーザーも、その異生物の体を、ただ通り抜けるだけだった。
サバラスの顔がビジョンに写った。
「光線兵器が駄目なら、物理的衝撃を与えるほかはない」
「物理的衝撃？」
「ミサイル弾と機銃弾を使え！　相手も物質として存在するなら、衝撃を受ける筈だ」
「了解！」

三機は持てるだけのミサイル弾と機銃を撃った。異生物はバラバラに弾けた。しかし、殺せはしなかった。

突然、音が聞こえる筈のない宇宙空間に、トランペットのファンファーレが鳴り響いた。

頭上からシンフォニーを奏でながら、ブンドル所有の二世号が、天空から舞い降りる白いペガサスさながらに突っ込んできた。このシンフォニーこそブンドルが、ドクーガ滅亡前夜、徹夜で作曲した交響曲作品一番「宇宙の美」だった。ブンドルは、この曲を宇宙空間で聞くために、宇宙に音波に似た振動を起こさせる装置を、ジッター博士に開発させたのだ。

ブンドルは、異生物に攻撃を開始した。派手な爆発音、そして爆煙が立ち上った。

宇宙に煙？

真吾達は、開いた口が塞がらなかった。

宇宙空間で起きる筈のない光景が今、見えているのだった。ブンドルはジッター博士開発の宇宙空間発煙装置の出来に満足していた。

だが、ブンドルの微笑はそこまでだった。二世号に素早く張りついた異生物達が、船体を食い千切り始めた。

「し、しまった！」

二世号のビジョンにサバラスが写った。

「ブンドル君、ただちに脱出したまえ、君の船はもう、もたん」

グッドサンダーと真吾達の交信を傍受していて、異生物の力を知っていたブンドルは、ただちに了解した。

ブンドルは二世号の進路を、異生物の大群の中心に向けると、救命ポッドでグッドサンダーへ向かって飛び出した。
異生物は二世号に、獲物に集まる蟻のように殺到した。
「今のうちだ。グッドサンダーに帰還しろ。ただちに瞬間移動する」
サバラスが三人に命じた。
「瞬間移動のエネルギーが回復するには、まる一日かかる筈ですが……」
怪訝そうな真吾にサバラスが答えた。
「今の戦いに、なぜケン太がいなかったか分かるか？」
「ケン太が？」
「ケン太は、ソウル達と共に、グッドサンダーの炉の中にいる。ケン太のエネルギーを加えれば可能だそうだ。急げ！」
「了解！」
三機とブンドルの救助ポッドを収容したグッドサンダーは、ただちに瞬間移動を開始した。

＊

一瞬にして、五千光年を飛んだグッドサンダーは、宇宙空間に再び姿を現した。
しかし、一同が息つく暇なく、ファザーの警報が鳴った。
「異生物集団、接近！」
サバラスが呻いた。

「なに！」
接近という表現は不適当だった。むしろ、異生物達のど真ん中にグッドサンダーが現れたようなものだった。
ビムラー炉の中のケン太が、ビジョンを通して言った。
「敵は僕らの移動距離を読めている。だから、さっきの所から五千光年離れたここに、異生物を待ち伏せさせたんだ」
グッドサンダーに乗船して、まともにレミーの顔を見る時間もなかったブンドルは、初めてレミーを見つめて呟いた。
「五千光年離れた待ち伏せとは……」
レミーは肩をすくめた。
「そうなの、私達には手も足もでない世界の戦い……」
「もう、どうにでもやってくれ。わしゃ、知らん」
ケルナグールがどっかりと胡座をかいて、頬杖をついた。
皆、同じ気持ちだった。
その時、ファザーが再びけたたましい警報を鳴らした。
「グッドサンダーの各部署、七カ所より異生物侵入！」
ビジョンに、異生物の侵入個所が写った。
「各地区シャッター閉鎖！」
だが、異生物達の牙と爪はシャッターなどものともしない。異生物の侵入地点が、じわじわと内

部へ迫ってくる。
　ケン太が叫んだ。
「みんな、お願い！　トモダチを守って！　僕はもう一度瞬間移動してみる」
「しかし、ケン太達のエネルギーの回復が……」
「分からない。でも、やるしかないよ。グッドサンダーは地球上にあるものを瞬間移動させる乗り物でしょ。もしかして、地球に存在しない成分で出来ているものは移動出来ないかもしれない！」
　真吾はポンと手を叩いた。
「連中だけを取り残して、瞬間移動出来るかもしれないわけか……」
　キリーがケン太に言った。
「よし、最後の御奉公だ。子供達は任せろ。ケン太、早く瞬間移動の用意を……」
　そして一同は頷きあうと、めいめいの武器を持って、子供達の居住エリアに降りていった。
　グッドサンダーは瞬間移動を開始した。
　グッドサンダーの外壁に取り付いていた異生物はことごとく宇宙空間にとり残された。だが、次の移動地点でファザーは絶望的な事実を伝えた。
「グッドサンダー内に異生物二十五体……、居住地区へ向かっています」
　グッドサンダーの内部に入り込んだ異生物まで取り残すのは無理だったのだ。
　異生物達は、次々に防御シャッターを破っていく。
　もうすぐ居住エリアだ。
　おのおの武器を持って身構える一同に、ケン太の声が聞こえた。

「みんな、こうなったら、異生物に殺られる前に、僕らの星へたどり着くしかないよ。僕とソウル達で立て続けに移動を繰り返してみるよ。エネルギーパワーがすごく衰えているから、二十回以上やらなきゃならないと思うし……。出来るかどうか、それに行き着けるかどうかも分かんないし……。人間の体にどんな影響がでるかもしれない」

サバラスがキッパリと言った。

「迷うな、ケン太。自分のパワーに自信を持て！」

一同も頷いた。みんなとっくに、ケン太に全てを託していた。

グッドサンダーは、立て続けの瞬間移動を開始した。

一回目、二回目、三回目……。

瞬間移動の間、船内の時間は止まり、異生物の前進は食い止められる。だが、移動を止めたとたん、確実に居住ルームへ向かって近づいてくる。

四、五回、六回……。

ビムラー炉の中のソウル達とケン太は、力を振り絞ってエネルギーを放射した。

それは疲れ切った少年のウサギ飛びに似ていた。

一回の放射が終わるたびに、ソウル達の青白い光は、荒い息を吐くように明滅した。

瞬間移動は十回を超えた。その一回一回のエネルギーの放射を、居住区の子供達は確実に浴びていた。

放射するケン太やソウル達にとって、どれほどの苦しいパワーの消費だったとしても、浴びている子供達には、春の暖い陽ざしのように快く感じられた。

瞬間移動は十五回を超えた。移動距離も移動地点も、その時の力任せででたらめだった。ただケン太の持つ、星への帰巣本能のようなものが、方向だけはしっかりと、グッドサンダーを目的の星へ向かわせていた。

そしてグッドサンダーの、このがむしゃらとさえいえる暴走は、結果的にグッドサンダーを待ち受ける敵のソウルの目をくらます役目も果たしていた。

二十三回目の瞬間移動を終えた時、居住エリアの警報が鳴った。それは隣の平常時の機関エリアに異生物が侵入した事を示していた。それは連続的な移動を始めてから十分もたっていない時だった。何度、瞬間移動しても、グッドサンダーの乗員達に、その時間は感じられない。ただ壁に備え付けられた距離計だけが瞬間的に跳ね上がり、移動した距離の膨大さを示していた。

今――地球から六万四千光年……。

ケン太の声が息も絶え絶えに聞こえてきた。

「あと五回か六回で僕らの星に着くよ。トモダチ達を、非常脱出ルームへ連れて行って、脱出の用意をさせて……。星に上陸したら、すぐグッドサンダーから逃げ出すんだ」

無菌室から出てきたオバが、子供を心配する母親そのもののオロオロした声で言った。

「ケン太君、大丈夫？」

「バテちゃった……。でも、やんなきゃ……。オバ……、トモダチを頼むね……」

「ええ……」

一同は迅速に子供を集め始めた。子供達も事態を了解していて整然と、素早く行動した。

ブンドルはレミーの指示に従って、てきぱきと動き、子供を並ばせた。少女を肩に抱いて並んで

いるゴーホムとブンドルの目が一瞬見合ったが、何事も起こらなかった。ゴーホムの方でブンドルをすっかり忘れているようだった。肩に抱かれている少女が、ブンドルに向かって「大丈夫ですよ」とでも言うように微笑みかけた。

壁の距離計が、いきなり地球から六万七千光年の距離をさした。

二十四回目の瞬間移動が行われたのだ。二十三回目から五分たっていた。明らかにケン太とソウルは疲れ切っていた。

二十五回目、そして二十六回目……、ビムラー炉の中でケン太は、もう人間の形を維持出来なくなっていた。ソウルの中には、青白い光が消えかかっているものが多かった。

ケン太は思った。

――こうして目指す星に着いたとしても、星が敵の手に落ちていたら、どうなるのだろう。トモダチ達は、まだ僕のように新しい人間にはなっていない。たちまち殺されてしまうに違いない。それを守る力を僕は使い果たしている……。いいや、あの星にはゴーショーグンがいる。ゴーショーグンがきっとあの星を守ってくれている――ケン太は、力を振り絞って、二十七回目のエネルギーを出した。

――目的の星まであと四百光年だった。

＊

子供達は非常脱出ルームの前に並んだ。居住エリアに備え付けられた防御シャッターが次々に閉まっていく。

オバは明るい声をこしらえて、レミーに言った。
「レミーさん、後をよろしく。私がいなくなれば、あなただけが大人の女性ですもの」
「えっ?」
「私は、外に出られない子の世話があります。あの子を最後まで守りたいんです」
無菌室の少女の事だった。
レミーは何を言っていいか分からなかった。
オバの姿は、シャッターの向こうに消えていった。
「オバ……」
しばらくして、非常脱出ルームの警報ベルが鳴った。居住エリアに異生物が入ってきた証拠だった。
二十八回目の瞬間移動が行われたのだろう。距離計が頂上まで跳ね上がった。〇光年、デジタルがあと一・一秒を指した。光の速度で一・一秒、およそ三十三万キロ……、月と地球の距離より近い地点だった。
「あれだ、目的の星は……」
サバラスが唸った。
ビジョンに写し出された星は、ケン太のいう緑の星とはあまりに違っていた。殆(ほとん)どが赤茶けて、まるで火星を見るような光景だった。
声もない一同の背後でガリッという金属音が響いた。
居住区と非常脱出ルームを隔てる防御シャッターを、異生物の鋭い爪が引き裂いた。真吾達は、

子供達を庇ってシャッターの前に立ち塞がった。

＊

無菌室の扉もすでに破られていた。プラスチックケースに迫っていく異生物の前に、オバは立ち塞がっていた。
「来ないで下さい！　ここは通しません」
異生物は手を振り上げた。爪が光った。その時、扉の陰から青白いロボットが異生物に摑みかかった。
「ケルーナ！」
ケルーナは、異生物にむしゃぶりついた。鋭利な爪が、ケルーナの首を弾き飛ばした。だが、ケルーナにとっての首は単なる飾りにすぎない。ケルーナは、エディット・ピアフの「愛の讃歌」を歌い続けていた。オバへの精一杯の気持ちだった。
ケルーナの足がもげ、手が千切れた。もともと幼児向け暴力発散メカのケルーナは、壊れ安く出来ているのだ。それでも抵抗をやめなかった。
「もう、いいの。ケルーナ、もうやめて！」
オバは涙声で叫んだ。そして異生物に体当たりしていった。

＊

その時、青白い光がグッドサンダー全体を被い尽くした。ケン太とソウル達の残る力の全てを振

り絞った瞬間移動が始まったのだ。

ビムラー炉からほとばしり出たエネルギーは、子供達の体にみるみる吸い込まれていった。

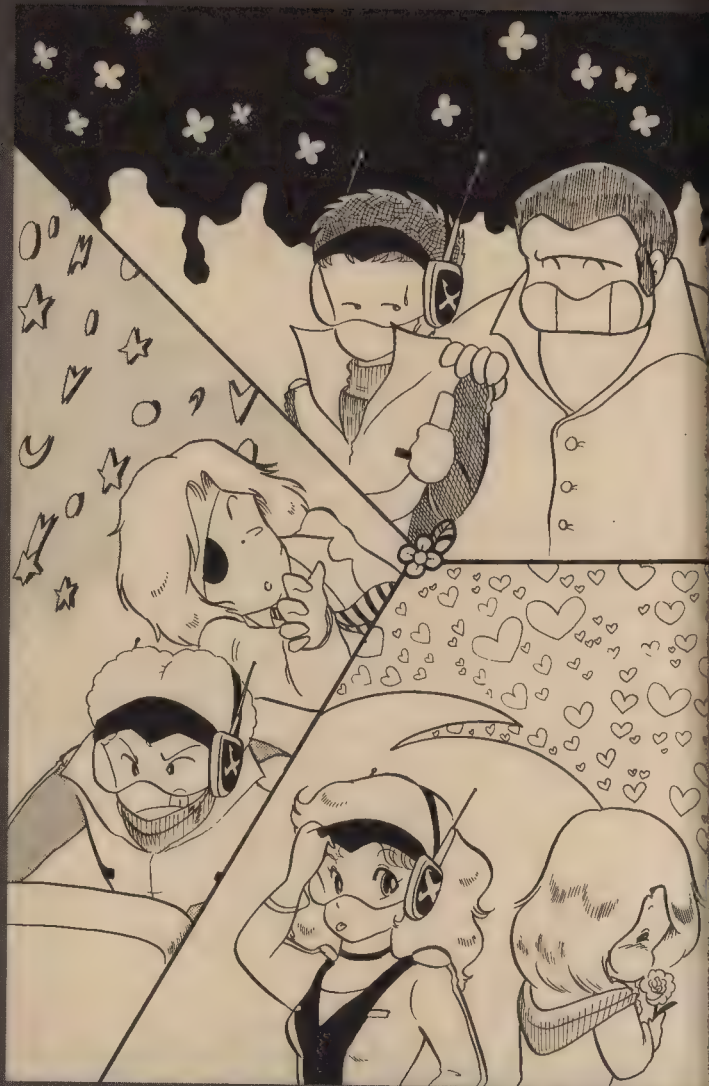
時間の外で起こったグッドサンダーの瞬間移動は、僅か三十五分のうちに、ケン太とソウルのエネルギーを二十九回も子供達に集中して浴びせかけた結果になったのだ。

そして、グッドサンダーは今、目的の星の砂漠地帯に、その巨体を乗り上げていた。

壁のセンサーは、その量に地球と同質の空気がある事を示していた。

最後の決戦！　６人乗りゴーショーグンは再びたちあがる

# 第九章

# さらば、新しい人間たち

オバの体当たりを食って壁に弾き飛ばされた異生物は、牙を剥き出してオバに襲いかかってきた。
グァーン!!
オバの目の前で、何かが炸裂した。
オバは一瞬、何が起こったのかわけが分からなかった。だが、今までオバのセンサーが感じていた異生物の存在は、跡形もなく消えていた。
「オバ、もう大丈夫……。恐い人は私が消したわ」
プラスチックケースの中から、青白い光を放ちながら少女が出てきた。
「あなた、そこから出ても大丈夫なの?」
「ええ、わたし、ケン太君と同じ体になったの」
少女の姿は壁をすり抜けてグッドサンダーの外へ飛び出した。

＊

同じ事が、非常脱出ルームでも起こっていた。脱出ルームに飛び込んできた異生物達は、跡形もなく吹き飛んでしまった。
身構えていた一同は、あまりの呆気なさに開いた口が塞がらなかった。
ズタズタにされた脱出ルームの防御シャッターが、異生物が先刻まで確かに存在していた事を辛うじて示していた。
キリーがたまらんといった感じで呻いた。
「なんなんだ! なんなんだ! ありゃ、なんだったんだよ!」

他の者は、口をきく気力もなかった。
サバラスがボソリと呟いた。
「おそらく敵のソウルが、心の中で創り出した生命だ……。だからファザーにも何の物質で出来ているか分からなかった」
カットナルが、なるほどと頷いた。
「想像の産物ってわけか……」
「けど、夢でも幻でもなく、ほんとにいたぞい」
首をひねるケルナグールに、ブンドルが説明した。
「それだけ、創り出した敵のソウルのパワーが強いという事だ。そして、その生命体を消し去ったのも……」
ブンドルは子供達を見つめた。
「あの子達のソウルだ」
一同の前に立つ子供達は、皆、青白く輝いていた。そして次々に壁をすり抜けて、グッドサンダーの外に飛び出していった。
中でもレミーが目を見張ったのは、あの男のゴーホムが、幼い少年の姿に、みるみる変身した事だった。
そればかりか、あの自閉症の少女と手を繋いで飛んで行くではないか。
「やるじゃん……」
しかし、一同の気持ちは重かった。我々は何の役に立ったんだろう……。虚脱感に襲われながら、

グッドサンダーの甲板に出た一同は息を飲んだ。
空は赤く淀み、青白く光る子供達が、真剣な表情で空の一点を睨んでいる。
そして、目の前の砂漠にぽつんとゴーショーグンが立っていた。一年前、黒光りの体で飛び発った精悍な面影はまるでなかった。赤茶け、錆つき、捨てられたように立っていた。
「どうしてこんな事に？」
よろめきながら、ケン太の姿を辛うじて残した光が甲板に出てきた。
その姿が現われたとたん、ゴーショーグンの胸から様々な光が噴きだし、グッドサンダーの周りに集まってきた。
それは一年前、地球から飛び発ったソウル達だった。
「みんな……、みんな、元気だったんだね」
光達はグッドサンダーの周りを飛び回りながら、この星で起こった事を話してくれた。
ケン太が地球に向かった後、強大で邪悪なソウルが星に襲いかかった。邪悪なソウルは、この星に緑と海を作り出した地球のソウル達を我がものにして、この星にやがて生まれ来るだろう生命を、思いのままに操ろうとした。
地球のソウルは抵抗したが、邪悪なソウルはあまりに強すぎた。ゴーショーグンは、自分の体内に地球のソウルを避難させると、持てるパワーの全力を使って、体内のソウルを守った。
邪悪なソウルは、ゴーショーグンに全力攻撃をかけて来たが、遂に地球のソウルを手に入れる事は出来なかった。
だが、その戦いは、星を不毛にし、ゴーショーグンのソウルは、自分の体を動かす力もないほど

傷ついていた。人間でいえば全身麻痺の状態だった。
「だけど、もう大丈夫さ……。僕達がいるもの……」
子供達の一人が叫んだ。
「ここは、僕達の星だ。さあ、みんな、この星を元に戻そう！」
子供達は同時に飛び上がった。
ビムラー炉の中から、メカのソウル達が飛び出した。一年前にやってきた地球のソウルも後に続いた。
子供達とソウルが撒き散らす光が砂漠に弾け、空を走った。
赤く淀んでいた空が、青く晴れ渡り、それなのに雨が降ってきた。雪も降っていた。
そして火山の噴火――。
割れた大地から、シャボン玉のような地の精気が飛び出し弾けた。
みるみる辺りは緑の野に変わっていった。木々が繁り、花々が咲き乱れた。
遠くに潮騒が聞こえ、砂漠に海が蘇った事を教えてくれた。
全てが一瞬のうちに行われた。まさに天地創造だった。ケン太達の星は、生気溢れる緑の星になった。
だが、それを見つめる真吾には、何の感動もなかった。キリーもレミーも同じだった。確かに壮大な眺めではあった。
だが、それはあまりに自分達とはかけ離れた別の世界の、別の人間ドラマだった。

たとえ、その人間を生み出したのが地球の人間だとしても。
ケルナグールが呟いた。
「これを映画に撮れば、高く売れるだろうな」
カットナルが呻いた。
「わしの選挙のPRフィルムにはならんよ……。ケン太達のPRにはなってもな」
「美しい……。この光景には、どんな音楽も似合わない。光景そのものがすでに音楽だからだ」
ブンドルはそう言ってから、苦笑した。
「白々しい台詞だ……」
自分達の力がまるで通じない世界、それはあまりに絶対的な力の表現で、感動しても疲れるだけだった。少なくとも、ここにいる人間達は、そう感じるタイプの人間達だった。
「ここで生きていくの？」
レミーが、誰に聞くでもなく言った。
「俺達、いたってしようがないんじゃない？」
キリーが肩をすくめた。
「だからといって、どこへ行く……」
真吾の言葉には、誰も答えられなかった。
その時だった。
空気の軋むような音がして、青空が裂けた。青空の向こうに、巨大な火の玉が燃えていた。ケン太が叫んだ。

「あいつだ！　あいつが僕達の敵だ！」
巨大な火球の意識が、ケン太の意識に語りかけた。
「なかなかに美しい星になったな……。君達の邪魔をして思わぬ無駄をしてしまった。最初から、お前達にこの星を創らせてから戴けばよかったのだ。私は、お前達の星、お前達の心の中に住むとしよう」
「そうはさせない……」
「諦めた方がいい……。百やそこらのお前達の数では、到底私のソウルを破る事はできぬ……」
ケン太は唇をかみしめた。
確かに、邪悪なソウルの言う通りだった。子供達の数、ソウルの数、どれをとってみても、敵に叶いはしなかった。しかも、ケン太は、瞬間移動の連続でパワーを使い果たしている。
同時に別の意識が、ケン太の意識に流れ込んで来た。
「私がいる。私のソウルを加えれば……」
それはゴーショーグンの意識だった。
「ゴーショーグン。でも、君は自分の力で自分を動かす事が出来ないんだよ」
ケン太は思わず声に出した。
「ゴーショーグン……、ゴーショーグンが動ければ……」
サバラスが呟いた。
「ゴーショーグンが動ければ……」
「この戦いに勝てるかもしれない……。でも今のゴーショーグンは、ソウルを持っていても、体は

ただの機械……。自分の気持ちで体を動かせないんだ」
「ただの機械か……」
サバラスはゴーショーグンを見つめた。
ドドド……、地軸を揺るがす轟音を響かせ、火の玉は降下を始めた。
攻撃が始まったのだ。
ケン太の下に、子供達とソウルが集結した。
「負けるかも知れない……。でも、やるしかないよ」
ケン太の言葉に子供達は頷いた。
ケン太を先頭にして、子供達とソウルは飛び上がった。

*

ケン太は、邪悪なソウルに叫んだ。
「僕達の戦いで、せっかく作りあげたこの星を壊したくない……。戦いは宇宙でしよう……」
「よかろう……」
火の玉は上昇し始めた。

*

自分のソウルの力では一歩も動けぬゴーショーグンは、悲しげに空へ飛んでいくケン太を見上げていた。

全身が麻痺したゴーショーグンは、その体に真吾とキリーが取り付いて調べているのに気付かなかった。
ゴーショーグンから降りて来た真吾とキリーに、サバラスが聞いた。
「いけるか？」
キリーが、スパナの先で頬を撫でながら、
「エネルギーも残っているし、手動部分に故障は少ない……ただし……」
真吾が続けた。
「自在に動かすには、一機に一人では無理ですね。助手が必要だな」
「一機に二人……。六人か……」
サバラス達はゴーショーグンを手動で動かすつもりだった。だが、この星にいるのは七人……一人余る。
サバラスがレミーに目をやり、何かを言おうとした。
「ちょい待って……」
レミーが、サバラスの言葉をさえぎった。
「まさか、私が女だから……、ここで生き残れって言うんじゃないでしょうね……」
「まあな……」
「こんな時だけ、女あつかいはごめんだわ。第一、男の子なしで一人で生きろなんて、残酷だと思いません？」
キリーがニヤリと笑った。

「残るとしたら隊長ですな。もともとケン太の事は、隊長が仕掛けた事だ。最後まで見守る責任があるんじゃない？」
「それに引き換え、俺達はケン太のこれからには何の興味もない」
真吾の言葉にブンドルも頷いた。
「同様だ。わたしは、この世界に美学を感じない。美学は、所詮人間が感じるものだ。人間とかけはなれたものに人間の感じる美学はない」
「あなたの独断と偏見に満ちた美学でも、ケン太に興味はないの？」
レミーがブンドルに聞いた。
「猿が人間を愛するとしたら、それは服従か、おろかな羨望でしかない。そして今の立場は、我々が猿で、ケン太達が人間だ。私は彼らに愛は持てぬ」
「ええい、もってまわった言い方をすなッ！　ともかく、ケリをつけよう、ケリを……」
カットナルが、ひさしぶりにわめいた。
「なんか知らんが、わしも、ここは好かんぞい……」
ケルナグールも力なく言った。
「隊長、決まりましたね。あなたはここに残って最後の最後まで見届けるんだ」
真吾の言葉に、サバラスは一同を一人一人見つめ、言った。
「……、よかろう……」
「みんな、行くぞ！」
一同は、グッドサンダーに走った。

ハッチの前に、オバがケルーナと一緒に立っていた。ケルーナは、もともと殴られて、壊されるように作られていた。それだけに元通りになるのも早い。

真吾は、オバの肩をポンと叩いて笑った。

「グッドラック！」

キリーは、オバとケルーナの両方を指さし、

「君達……、できてる？　いや、できるかな？　うまくやんな……、オバ……」

「キリーさん、なんの事です？　意味不明ですが……」

「俺達の中で愛が見つかりそうなのは、オバ、お前だけだってこと……。あばよ！」

真吾はキリーを追ってハッチの中に駆け込んだ。

レミーがオバの前に来た。

「よかったね、オバ」

「レミーさん……」

「やっていけるもんね、あなたなら、この星で……、ケン太君達の母親として……。女として羨ましいと思うわ……、マジに……」

オバは、レミーに言う言葉がなかった。

レミーは、オバの頭部に軽くキスをした。

「サンクス、マイ・ベスト・ガールフレンド、楽しかったわ」

レミーはオバを残して駆け込んでいった。

オバはケルーナに言った。

「いいこと、ケルーナ。ここで妙な別れの歌なんか歌いだしたら、承知しませんからね」
「ケルーナ……」
ケルーナは、一言言って頷いた。

＊

一同は、発艦準備を終えた三機に飛び乗った。
真吾のキングアローにはケルナグールが助手として乗り込んだ。キリーのジャックナイトにはカットナル、そして、レミーのクインローズにはブンドルが乗った。
組み合わせは別にもめはしなかった。真吾のキングアローは激しい操縦を要求される。
バランス感覚はなくなっていたが、ケルナグールのフットワーク、そして単純さ。真吾が操縦に夢中になった時の頭ごなしの命令口調に耐えられる精神構造を持っているのは、三幹部の中でケルナグールしかいなかった。
同じ意味で、キリーの口走る場末のスラング英語を一瞬のうちに理解できるのは、カットナルしかいなかった。
元ブロンクスの狼と元アメリカ大統領……、もしかしたら、アメリカで最も孤独だった男達のコンビかもしれなかった。
そして、残りのブンドルは、レミーと……。
「私は残り物か……」
「お気に入らないでしょうけれど、私の言うとおりに動いて頂くわ」

「美しきものには逆らわぬ主義だ」
――この期(ご)におよんでよく言うよ――レミーは気のきいた返事を見つけようとしたが、思いつかず、仕方なく言った。
「るん、るん」
「なにかね、それは?」
「気にしないで……」
ビジョンに真吾が写った。
「そろそろ、行くぜ」
「あ～あ、せわしないったらありゃしない。この星に来たそうそうこの騒ぎでしょ。せめて、一晩ぐらいのんびりしたかったわね、最後の夜って奴を……」
キリーが割り込んだ。
「そしたら、俺に抱かれたかね?」
「もち……。他の皆さんにも……。皆さんさえよければ」レミーは半分本気だった。
真吾が冗談とも本音ともなく……、
「そいつは残念だ」
と呟いた。
カットナルが怒鳴った。
「けしからん。お前ら、わしらと戦っていた時も、こんな不謹慎な会話をしとったのか。わしらは真面目(まじめ)だったのに……」

「まあまあ。わしとて、戦いの間、かみさんの事、忘れたことなかったきに……」
ファザーの声が聞こえた。
「お話し中ですが、ぐずぐずしていますと間に合いませんよ。ケン太君達は今、大苦戦です」
「分かったよ、ファザー……。最後に俺達から別れの言葉を贈るよ。レミー、キリー、いいな、セ〜ノ」
真吾の音頭とりで三人は口をそろえた。
「愛するとっあん……、あばよ……、くたばっちまえ！」
三機は轟音を残してグッドサンダーを発進した。
三機のビジョンにファザーの溜息ともつかぬ声が聞こえた。
「わたし……、ショックです」
レミーが呟いた。
「いいすぎちゃったかしら」
キリーが言った。
「いいってこと……。ファザー、あんたは、簡単にくたばるタマじゃねえぜ」
「そりゃそうです」とファザー。
「がんばりな、ファザー！　俺達は行く」
真吾のキングアローを先頭に、最後の大旋回が始まった。
なにもかも、一年前と同じだった。
ゴーショーグンの胸が開く。両足が開く。

逆噴射して、胸に吸い込まれるキングアロー。ジャックナイトもクインローズも、それぞれの持ち場の脚部にジャストフィットする。
「お待ちどおさん、ゴーショーグン！　俺達が飛ばしてやるぜ！　手動操縦開始！」
真吾が、ハンドルとギアバーを目まぐるしく操作した。
「エネルギー、パワー全開！」
「パワー全開！」
ケルナグールがレバーを引く。
ゴーショーグンの目に光が入った。
「パワー全開、確認！」
キリーが、力まかせにギアを叩き込む。
ゴーショーグンの右腕が、高々と振りあげられた。背中の浮上エンジンが唸りをあげる。
レミーが叫ぶ。
「ゴーショーグン、浮上！　アニさん、レバーを全部引いて！　全部よ！」
ブンドルが、機敏な動作で指示に従う。
ズズズズ……。
砂塵を巻きあげながら、巨体が上昇していく。加速をつけて、真一文字に大空へ向けて見る見る小さくなっていく。
見上げるオバ、ケルーナ、そしてサバラスは、もう何も言う言葉がなかった。
――本当に最後の最後まで付き合わせてしまった……。たとえこの戦いの結果がどう出ようと、

私は君達と出会えたことを誇りに思う——

＊

ゴーショーグンはぐんぐん上昇していった。

今、ゴーショーグンを動かしているのは、確実に真吾達、人間だった。

「——受けた仕事はやりとげる。そのくせ、今回俺達にはなにもなかった。ギャラのない仕事だが、それにしたって仕事がないってのは、しゃくにさわるもんさ。やっと最後になって、俺達のできる仕事ができたってわけだ。それにしても奇妙なもんだぜ。ハートを持ったメカの手足になって、人間が動いてやがる。人間が手足にならなきゃ動けないメカ……。メカと人間の二人三脚……。そして助ける相手は、人間から生まれたとはいえ、今はもう人間とはまるで違った別の存在……」

キリーのその思いは、他の一同が思っていることとほぼ同じだった。

その時、一同の意識に別の何かが語りかけた。

「それでも君達は、彼らの生みの親なのです。そして、私達、地球に存在したソウル達も……。私を敵のソウルの真ん中へ連れていって下さい。私達の力で、新しい人間達を守り抜くのです」

それは、ゴーショーグンのソウルの声だった。

「冗談じゃない。俺達は俺達で好きにやってきた事だ。新しい人類を守るなんて、ごたいそうなお題目はまっぴらだよ。好きでやり始めた事はやりとげる。それだけだ。それが好き者のこだわりってもんだ。ゴーショーグン、君を望むところへ連れていってやる。しかし、それで終わりだ。もう、まっぴらだよ。アルコールを絶って鍛えなおしたこの体が、全く役にたたない世界なんてのは、く

そくらえだ！」

真吾の思いも、また他の一同と似ていた。

「思えば遠くに来たもんだわ。でも私は、全然変わっちゃいない……」

レミーには疲労感があった。他の一同も同じだ。

＊

たちまち宇宙に飛びだしたゴーショーグンの前で、邪悪なソウルとケン太達の壮絶な戦いが展開されていた。

邪悪なソウルは、限りなく巨大だった。あの異生物と同じ姿に形を変え、ケン太達をにぎりつぶそうとしていた。

「あそこへつっこむのか……」

ケン太達の戦いは、かぶと虫にたち向かう数匹のアリのように見えた。

カットナルが呻いた。

「こりゃ、絶対生きていられんぞい」

ケルナグールは、そのくせ、やる気満々の声で言った。

「美しい戦いになりそうだ」

そう呟くブンドルにレミーが言った。

「この戦いには興味がないんでしょう？」

「今まではな。しかし今から我々がからむ以上、この戦いは美しくなければならぬ」

真吾が叫んだ。
「行くぞ、みんな！」
「分かってるって……。だからもう、その、みんなでセーノって掛け声、やめてくんない。昔の戦争映画みたいでダサイぜ」
キリーが、うんざりしたように言った。
「だって格好つかないだろ」
「格好つけてもどうにもなんないわ」
レミーの一言に、真吾は頷いた。
「それもそ～だ。では……、行きますです」
ゴーショーグンは、邪悪なソウルの胸もとめがけ、まっしぐらに飛んでいった。
それに気付いたケン太の声が聞こえた。
「ゴーショーグン、真吾、キリー、レミー、どうしてここへ！」
「わしらの事もお忘れなく」
とケルナグールが言った。
「ケン太、この戦いの結果がどうなるか知らん。だが、俺達のやれるだけの事はする。後はケン太、お前達の勝手だ。勝手にやっていけ。俺達は俺達で勝手にやっていく。俺達は、お前らはおろか、人間からも落ちこぼれた人間だ。だが俺には、俺だけの生き方がある。浮き草のようにフワフワとな……。どうやら、それが性に合っている。アウフ、ビーダーゼン」
真吾の言葉に、キリーとレミーが続けた。

「以下同文……。坊や、苦労しな」
「シー・ユー・アゲインって、もう言えないみたい……。アデュー」
邪悪なソウルに近づくにつれ、ゴーショーグンの揺れは激しくなった。
だが、それに勝る力がゴーショーグンの体内からわきあがっていた。
ゴーショーグンのソウルが力をふりしぼっているのだ。
ゴーショーグンの体から青白い光の渦が噴き出しはじめた。
戦いのケリはもうすぐつく。

「いよいよか」
ブンドルが呟いた。
レミーがそしらぬ顔で言った。
「今のうちに言っとく……。アニさんの事、なんとなく、なんとなくよ……、好きになってた。少しだけ……」
「光栄だな」
いきなりビジョンにキリーが写った。
「それはないでしょ、レミーちゃん。俺達、どうなっちゃうのよ。なあ、真吾」
「男と女だ。いろいろあるさ。でも長く続きゃしないわけよ。レミーだもん」
「どういう事よ、それ」
「俺が似合いだってこと、早い話が……」

真吾がそう言うと、キリーは呆れたようにわめいた。
「あっ、どさくさにまぎれて売り込みやがって！」
「いいや、どんな者にも恋を歌う権利はある」
ブンドルがレミーに造花のバラをさしだした。
「レミー、俺はユリを贈るよ……」と真吾。
「俺ァ、パン抜き辛子抜きのホットウルフ」とキリー。
「グハハハ。若いのう、みんなは。わしもお前達の年頃にはヨーコと……グフフフ」
「いいかげんにさらせ！　この期におよんで、なんちゅう台詞を……、ウウウ、薬！」
カットナルは懐をさがしたが、薬はなかった。考えてみれば、大統領を辞めてから薬を飲む習慣が治っていたのだ。
「ま、いい。副作用がないとはいえ、薬は薬……、飲まずにこしたことはない。ま、いいこと、いいこと……」
カットナルはニタリと笑った。
一同が、その笑顔を気味悪げに見つめた時……、鮮烈な光線が体中を走り抜けた。
邪悪なソウルの胸に食いこんだゴーショーグンが、今までにないパワーのゴーフラッシャーを発射したのだ。
邪悪なソウルの悲鳴が聞こえた。
空間が歪み、邪悪なソウルは四散した。
ゴーショーグンのソウルは邪悪なソウルとともに飛び散った。

ケン太達と彼らの星は守られた。

＊

六人は、暗闇の中を飛んでいた。
それがどこなのか、本人達には分からなかった。今まで乗っていたコクピットも、隣にいた筈の相棒の姿も見えなかった。
それぞれが、ただ一人だけで、暗闇をどこかに向かって飛んでいた。
そこは、邪悪なソウルとゴーショーグンの激突で生じた空間の歪みの中だったのだ。だが、たとえ彼らがそれを知ったとしても、彼らにとってはどうでもいい事であった。
六人の中に、今、確実にあるのは『生きている』という実感だった。
——なぜ生きている？……。知るものか……。ともかく生きているんだ。ケン太達も、地球に住む人間達も勝手に生きるがいい。どっこい、自分も生きてやる！——

その後の戦国魔神ゴーショーグン（完）

# あとがき

おととしの十二月に「戦国魔神ゴーショーグン」の放映が終わってから、早くも一年半が経とうとしています。なにしろ二十六回の放映中に三回も、放送時間帯が瞬間移動するという恐るべきマイナー番組で、ブンドル氏を筆頭に、キャラクター達には奇妙な人気がでたものの、全体のストーリーを知っている方は、あんまりいないのではないかと思っていました。

突然降ってわいた映画化も、これまた超マイナー……。二度とやれないゲリラ戦法で、放映された二本をつないでの番外編……。ますます本来の「ゴーショーグン」のストーリーが、どこかにいっちゃったようです。

ま、いいや。所詮、忘れ去られる運命のロボットアニメにすぎない「ゴーショーグン」……。なんとなく、ひがんでおりました。

そうしたら、どうなっておるのだ。『アニメージュ』主催のアニメグランプリ（第4回）のサブタイトル部門で一位……。

うそだろう。あの番組を見ていた人が、そんなにいるの……？　絶句！

そのうち、新宿にある「ミンキーモモ」のアフレコスタジオに、『アニメージュ』のむくつけき

男性編集者が約二名、うろつきだし――「ゴーショーグン」が目当てか「ミンキーモモ」が目当てか、分からない所がこわい――とうとう「ゴーショーグン」の文庫化が決定してしまいました。
タイトルは「その後の戦国魔神ゴーショーグン」。
そうです。この本が先に企画されたのです。
ところが、考えてみれば「ゴーショーグン」の本来のストーリーを知っている人が何人いるのか、見当もつかないのです。
「本編を知らなくて、その後も、その前もないんじゃないですか？」
「それもそうだ……。でも、一年前に終了しちゃった番組を、今ごろ本にしても大丈夫かな」
僕だって大丈夫とは思っていません。
最終回に「See you again……」とは書いたものの、口では期待してはいても、誰も実現するとは思っていなかったのです、正直言って……。
かくして、不安だらけで出版された「戦国魔神ゴーショーグン」、お楽しみいただけましたか？
ＴＶ版の「ゴーショーグン」は、それなりに色々実験をした番組でした。その一つ一つを、ここではあげませんが、その精神で、小説版も下手な工夫をしてみたつもりです。
さて「その後の戦国魔神ゴーショーグン」は、形式的にはわりとオーソドックスに（編集注・どこがオーソドックスじゃ！）、キャラクター達のその後を追いかけています。彼らの自由な生き方を楽しんでいただければ、うれしいのですが……。
最後に、今はバラバラになってしまいましたが「ゴーショーグン」を不思議なパワーで作りあげた、スタッフ・キャストの皆さんに感謝します。そして「ゴーショーグン」チームとして、また

「See you again……」できる日を楽しみにしています。そう。「その後の戦国魔神ゴーショーグン」のキャラクター達のように……。

えっ？　パートⅢですか？　はあ……。がんばります……。

首藤剛志

## ●テレビシリーズ主要キャスト

### ■レギュラー

真田ケン太……松岡洋子
サバラス……小林　修
北条真吾……鈴置洋孝
キリー・ギャグレー……田中秀幸
レミー・島田……小山茉美
OVA……間嶋里美
ネオネロス……藤本　譲
ケルナグール……長堀芳夫
カットナル……木原正二郎
ブンドル……塩沢兼人
ジッター博士……寺島幹夫

### ■ゲスト

ファンキーバンク団の女の子(7話)……黒須　薫
アルーシャ(9話)……川波葉子
フランシス(12話)……池田秀一
刑事ブラン(13話)……広瀬正司
シュミット(16話)……伊武雅刀
サントス(17話)……堀勝之祐
ジミー(19話)……山田栄子
ジョージ技師(19話)……池田　勝
イザベル(20話)……松尾佳子
ススマン(21話)……渡辺　猛

# *See you again*

## ●テレビシリーズ製作スタッフ

企画……佐藤俊彦
プロデューサー……相原義彰／加藤博
原案・文芸担当……首藤剛志
音響監督……松浦典良
美術設定……勝又　激
キャラクター・デザイン……本橋秀之
平山　智
色彩設定……永江由利
録音……高橋弘幸（整音スタジオ）
効果……伊藤道弘（E&M）
制作担当……庄司　清

放映日／S56・7・3～12・28
金曜夜５時～５時30分、テレビ東京(当時東京12チャンネル)系放映

| 放映No. | 放映日 | タイトル | 脚本 | 絵コンテ・演出 | 作画監督 | 作画 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | S56 7/3 | ゴーショーグン発進せよ | 首藤剛志 | 日高麗　湯山邦彦 | 田中保 | 笠原慎介　影山楙倫　いのまたむつみ |
| 2 | 7/10 | 激闘トライスリー | 首藤剛志 | 西村純二　西村純二 | 上條修 | 富田悦子　工藤利喜 |
| 3 | 7/17 | リトルファイターGO | 渡辺由自 | ゆやまくにひこ　大庭寿太郎 | 神宮慧 | 松岡秀明　新谷憲　堀隆 |
| 4 | 7/24 | 危険ないたずら | 渡辺由自 | 落合正宗　乾国義 | (海野金太) | 小野浩一郎　南全子　小原髪夫 |
| 5 | 7/31 | 地獄のファンタジーランド | 首藤剛志 | 網野哲郎　大庭寿太郎 | 田中保 | 大渡力　片瀬美恵子　安東信悦 |
| 6 | 8/7 | 光る眼の悪魔 | 山崎昌二 | 落合正宗　湯山邦彦 | 神宮慧 | 笠原慎介　影山楙倫　いのまたむつみ |
| 7 | 8/14 | 隠し砦の仲間達 | 湯山邦彦 | 西村純二　西村純二 | 上條修 | 富田悦子　工藤利喜 |
| 8 | 8/21 | ゴーショーグン帰還せず | 山崎昌二 | 日高麗　大庭寿太郎 | 松岡秀明 | 新谷憲 |
| 9 | 8/28 | ダイヤモンドは燃えつきて | 渡辺由自 | 落合正宗　西村純二 | 田中保 | スタジオ・ジャイアンツ |
| 10 | 9/4 | 恐るべしビムラーの謎 | 首藤剛志 | 日高麗　湯山邦彦 | 神宮慧 | 堀隆 |
| 11 | 9/11 | 花束を君に | 首藤剛志　渡辺由自 | 西村純二　西村純二 | 上條修 | 富田悦子　工藤利喜 |
| 12 | 9/18 | 別れのモンマルトル | 首藤剛志　木下薫 | 落合正宗　大庭寿太郎 | 田中保 | 笠原慎介　影山楙倫　いのまたむつみ |
| 13 | 9/25 | 暗黒街の激闘 | 渡辺由自 | 日高麗　湯山邦彦 | 神宮慧 | 影山楙倫　いのまたむつみ |

# 戦国魔神ゴーショーグン放映リスト

| 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10/5 | 10/12 | 10/19 | 10/26 | 11/2 | 11/9 | 11/16 | 11/23 | 11/30 | 12/7 | 12/14 | 12/21 | 12/28 |
| 1人ぼっちのOVA | 熱砂の女王 | さらば青春の日々 | グッドサンダー危機一髪 | ケン太ゴーショーグンに乗る | 叩け!ロンドン秘密基地 | 宇宙中継これがドクーガだ | 皇帝の陰謀 | 浮上地底からの謎 | 暴走グッドサンダー | 海の敵を叩け | 決戦秒読み開始 | 果てしなき旅立ち |
| 渡辺由自 | 富田祐弘 | 首藤剛志 | 首藤剛志 山崎昌二 | 渡辺由自 | 富田祐弘 | 首藤剛志 | 渡辺由自 | 首藤剛志 | 首藤剛志 | 首藤剛志 | 首藤剛志 | 首藤剛志 |
| 日高麗 西村純二 | 葛岡博 長尾粛 | ゆやまくにひこ 湯山邦彦 | 西村純二 西村純二 | 落合正宗 大庭寿太郎 | 落合正宗 長尾粛 | ゆやまくにひこ 湯山邦彦 | 大庭寿太郎 大庭寿太郎 | 落合正宗 湯山邦彦 | 西村純二 西村純二 | 大庭寿太郎 大庭寿太郎 | 落合正宗 長尾粛 | ゆやまくにひこ 湯山邦彦 |
| 神宮慧 | 松岡秀明 | 田中保 | 上條修 | 落合正宗 | 落合正宗 | 松岡秀明 | 神宮慧 | 田中保 | 上條修 | 松岡秀明 | 田中保 | 田中保 |
| 堀隆 | スタジオ・ドーム 新谷憲 | 笠原慎介 影山楙倫 いのまたむつみ | 富田悦子 工藤利喜 | 大渡力 増尾昭一 | 秋津博 | スタジオ・ドーム 新谷憲 | 堀隆 | 笠原慎介 影山楙倫 いのまたむつみ | 富田悦子 工藤利喜 | スタジオ・ドーム 新谷憲 | 柳田勤 落合正宗 | 影山楙倫 いのまたむつみ |

なにわ♡あい

# その後の症候群♡

決まった!!

似あうよ

あ
ガッ
ポロ

こわした
こわした
かわりに
おまえの足
もがれるぞ
殺されるぞ
こわいぞ
ひえ〜っ

なに
折った

よかった〜
うれしい〜

おまえを
はくせいに
するのさ
そして
日本に
悪

どうやって?
そりゃ
郵便小包
宅急便
国鉄小荷物

包装
厳重に
しなさいよ
原型
とどめなく
なることも
?
ボロッ

ぬく
ぬく ♪
こわれもの
注意

よっ

酒入れて蒸してみないか
ドイツのシュナップスっての手に入れたんだ

そういえば真吾の奴ドイツ出だったな
たぽたぽたぽ

わ
ホ!!
あるこぉる
ケルナグール

お客さん
飲むばかりは体に悪いよ

おつまみ
ん
おごるよほら

アメリカの有名な店のまねしたの
ハー
ニューヨーク

あのグッドサンダーのキリーって人のやってる店でね――
あれ?

真吾!!
再会・・・
キリー!!
元気そーじゃないか
やー
あははっ
久しぶりだなー
実際は こんな ゆーちょーじゃ なかったけど
1年間いろいろあったよ
おれもさ
で一度おまえを殴りたかったんだ
おれもだっ
??
わしは若いころうんともててな
一番のべっぴんさんにプロポーズしてな
ウェディングドレスが似あってな♥
きゃっ♡
どんな人?
アルバムとりにいくっ
はなせ!こらー
もうむりだよ

地球に残された側
かあ

ゴーフラッシャーをあびて自由意志をもった空ビン
ワイワイ

おまえたちいっぱいいるなー
でもカラスの数より少ないぜ
なんだと

157
156

ゴーショーグンがなくなりましたね
はい
END

続刊の題どうします
「ケン太くん」とかねーー
あははっ

ぼくなんかいらないんだ
くすんくすん
あ

新刊
それでもゴーショーグン
AM文庫
にこにこ

ほんまかいな…

不遇な 次男坊に 限りなき 愛をこめて♡

# カインよい子だ ねんねしな♡

出来のいい兄弟の中で めだつには
①より秀でてみせる
②ちがった方面で 才能をのばす
③ひたすら あきらめて お慈悲を乞う

!!

私は②でした。

ギャ

ゴーフラッシャー!!

グッドサンダーと戦っていたころ

カインさまから贈り物です

どかん ぼかん

ほー

またカイン
からか
カードがついてます

親愛なる兄上へ
おもしろいものをおみせします
つっかえせ
まだつづきが

やーい
見る勇気がないだろー
弱虫
ボケ カス
あけろ
はい

私は
自分の顔にながめ入るほどぱあではない
すあ
よいものを感謝する レオナルド

昔からそうだった
じーー
あにうえー
あそぼうよー
ねー
あそぼー

カインさまのほうがお出来がよろしいのです
そうとも

お兄ちゃんお兄ちゃん
よぉなっていうのに

Aip

おちまい

アニメージュ文庫

# その後の戦国魔神ゴーショーグン



N-003

1983年4月30日初刷

著者 首藤剛志

発行者 徳間康快
東京都港区新橋四—一〇—一 〒一〇五
発行所 株式会社 徳間書店
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替 東京四—四四三九二番
印刷 大日本印刷株式会社
製本
(編集担当 鈴木敏夫・片桐卓也)

ISBN4-19-669506-X C0193 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

アニメージュ文庫は

# AMJuJu（ジュジュ）と呼んで下さい。

●JuJuには5つの部門があります

**NOVEL**

アニメ作品の小説化が原則だけど、しばらくたったらオリジナルにも挑戦します。

**CHARACTER**

人気キャラクターの個人写真集。ピンナップや名場面がいっぱい載っています。

**FILM**

傑作アニメのフィルム文庫。コマを豊富に使用したオール・カラー版です。

**PEOPLE**

アニメーター、演出家、脚本家など、この1冊で、その人のすべてがわかります。

**THE BEST**

「アニメージュ」で、好評のうちに連載終了したものを、1冊にまとめます。

●既刊AM文庫もよろしく。
●宇宙戦艦ヤマト・完結編(前編)
●戦国魔神ゴーショーグン
●セロ弾きのゴーシュ
●作画汗まみれ
●六神合体ゴッドマーズ十七歳の伝説
定価はすべて380円です

カバーイラスト＝上條修・なにわ♡あい
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱